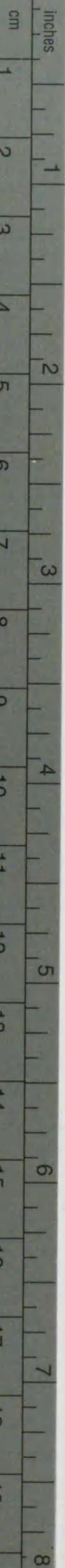


Kodak Gray Scale



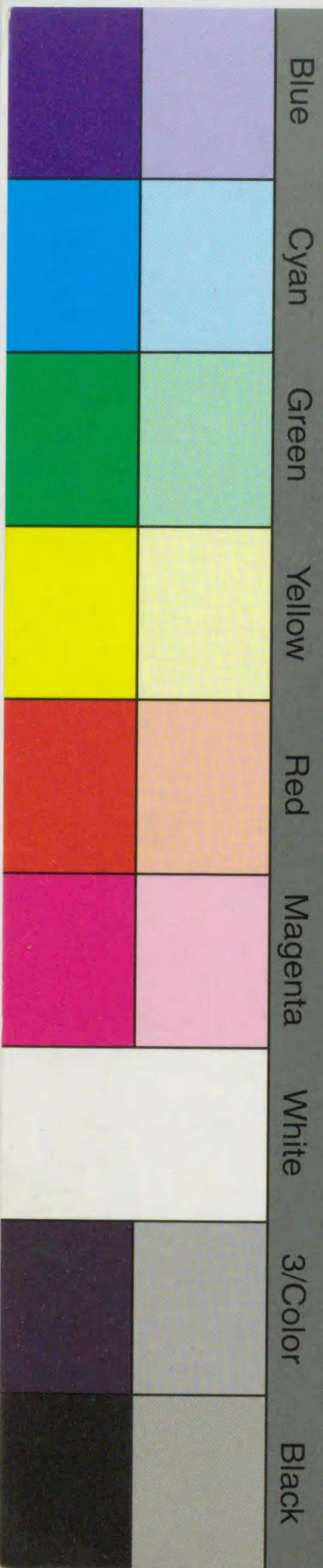
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

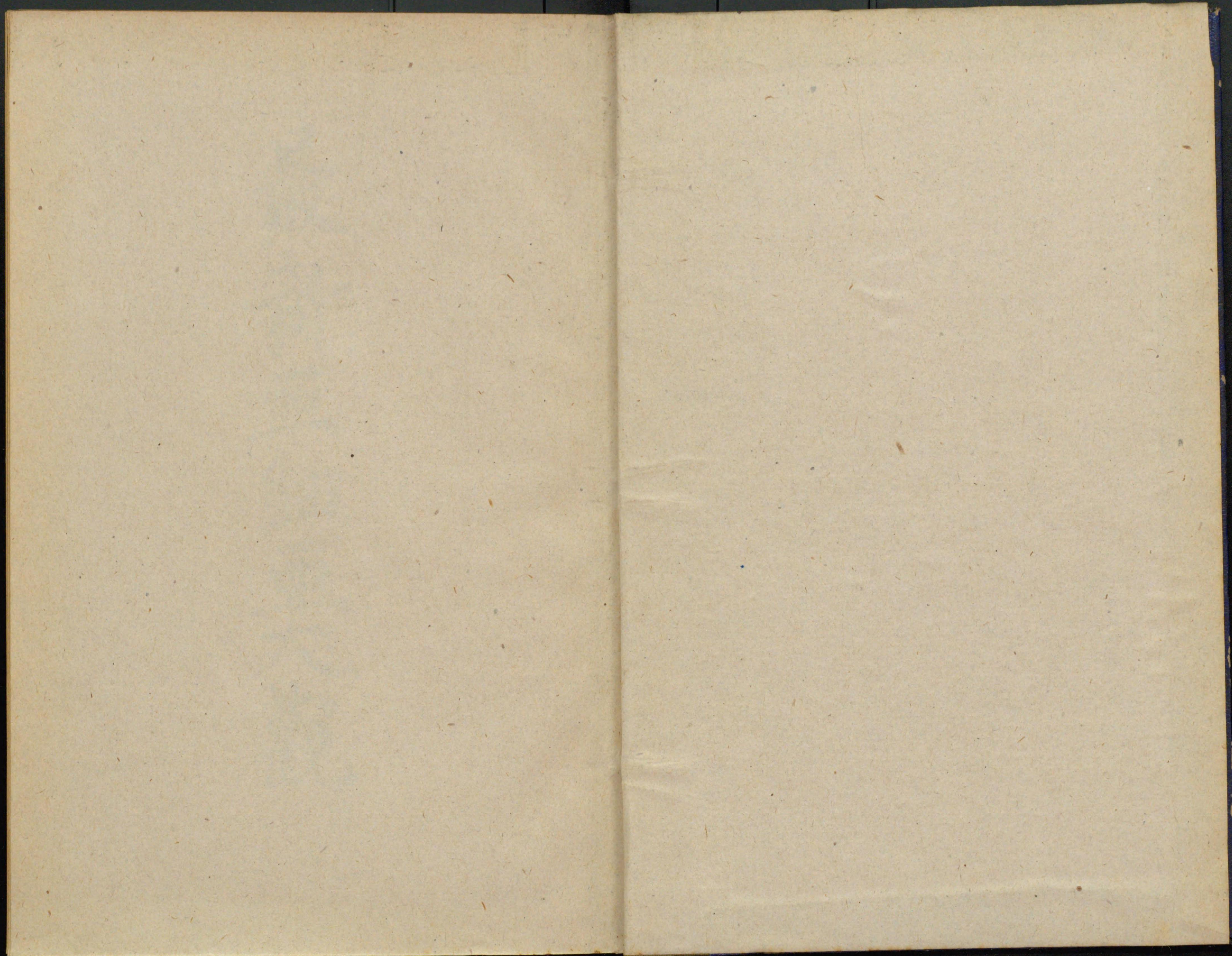
© Kodak, 2007 TM: Kodak



554-237



1200501510012



253



最新亞細亞大觀



明治天皇御製

久方儀 其 居 去 山

金 今 十 年 三 三 公 州

許 多 外 了 國 行

十 二 八 五 山 寺 也

男 爵 物 部 有 道 記 志

明治天皇御製

久方 漢 其 居 去 山

金 今 十 年 三 月 廿 日

清 廷 引 了 國 行

十 二 日 在 山 上

男爵物部有道謹志

八山造



八
年
秋

Small vertical red text on the gutter.





兼六

合掩

八松

及山造





兼六

合捲

八秘

及山造



554-237

序

亞細亞復興の希求は全亞細亞民族の胸底に流るゝ共通の思潮である。過去數世紀の間、歐洲の壓迫を受けて雌伏してゐた亞細亞の諸民族は近時頓に自覺して、歐米人の所謂亞細亞の反抗を明に表示しつゝある。見來れば、げに今や西方の文化に黄昏が來らんとするに反し、東方の文化に輝かしき黎明が來たのである。

我が日本民族が極東に光榮ある國を建て、より茲に三千載、宇内に冠絶する善美崇高なる國體を保持して今日の盛大を致し、今やこの亞細亞復興の新氣運に際して荷ふ所の國家的使命は極めて重い。しかもこの使命を深く自覺して進む所に、より大なる民族的の發展があり、より輝かしき國家的の飛躍がある。弛緩せる國民精神を緊張させ、姑息因循に墮せる國論を統一して確

乎たる經綸を打建てることも、先づこの民族的使命を深く認識することから始められなければならぬ。

顧ふに亞細亞大陸に對する日本の國策は、夙に滿蒙問題を解決してその地歩を明確にし、之を基礎として廣く東洋の平和を確保し、全亞細亞民族を指導する本來の使命に邁進すべきであつたが、遺憾にも之が解決を遷延したる爲め却つて現在の如き紛糾せる危局に直面し、國家の憂患を招くに至つたのである。併し乍ら之れらの問題も更に之を再吟味して其處に國民的覺悟を決定し、一個の信念に基き天職の命ずる所に向つて進まば、狂瀾を既倒に廻らすに決してその策なしとせず。斯くして更に愈々東亞全民族の爲に共存共榮の大道を打開くことも出来るのである。されば今日の要務は何よりも先づ全亞細亞の實情に立脚してその歸趨を明にし、日本民族の進むべき大道を見出すことに存すると信ずる。

本會は曩に歐洲大戰に際し、亞細亞大觀を編纂して亞細亞各國の現勢を詳にし、我が國民の進路に對する指標として江湖の賞讃を博したが、爾來十餘年を経て各國の國狀に多大の變化を呈し、今日の實情に相副はざるものとなつたので、今回全然稿を改め、最新の資料によつて最も明確に亞細亞の全豹を描き、各國の歴史、地理より政治、産業、交通、民俗等を詳叙するは勿論苟も我が帝國に交渉を有する限りに於ては之が關係を説述し、進んで亞細亞各地に於ける民族運動の實情をも説いて、若干の示唆を讀者に與ふることゝした。恐らく最新亞細亞大觀と稱する標題に對して、名實相背く所なきを信ずると共に、一面、國家經綸の存する所にも觸れ、今日の亞細亞の動向と照應して、明日の日本の國際的地位を探究することにも努めたのである。

本書は斯くして亞細亞に於ける日本の立場を明にし、復興亞細亞の指導者たる我國の立前よりして亞細亞の各國を觀望し、一面國際知識の涵養に資す

ると共に、それによつて讀者の興味がおのづから亞細亞の全局に向つて注がれるに至らんことを期した。今や新しき亞細亞はその胎動を始めてゐるのである。之が助産婦たり慈母嚴父たるべき者は日本である。されど自ら顧れば對支對露の問題の如き、宜しく問題そのもの、本質を正視して既得の權益を確持し、自らの地歩を確實にするにあらずんば、謂ふ所の復興亞細亞の指導者たる使命は果されない。本書が先づ力點を茲に置いて編纂に努めたのは當然であるが、期する所は全亞細亞民族を一丸とせる新亞細亞の出現であり、それを體系化する所の基礎を探究する資料を提供することが實に本書編纂の重要目的であつた。而して其の叙述は努めて乾燥無味に陥らざらんことに留意し、趣味的題目を織込むと共に多數の寫眞を挿入し、之に對しても解説を附したから、一個の讀物としても、讀者に豊なる興味を以て呼び掛けるものがあると信ずる。

兎もすれば輕浮なる風潮と危激なる思想とが、相交錯して世を搖撼せんとし、健全なる國民精神を毒する傾向の窺はるゝ際、本會が此の書を世に送るもの偏に敢爲雄健の氣象を鼓舞し、併せて國民意識を旺盛にして、民族的經濟の根幹に培はんことを念願とするがためである。

昭和六年十一月菊花馥郁たるの節

黑龍會主幹 内田良平 識

凡例

- 一、本書は各國の位置面積人口を掲げて國勢の輪廓を描き、次で人種宗教の説明を試みた。蓋し人種と宗教とは國家相互間の關係に重要な意義を有することを認められたからである。
- 一、政治上の區劃の項下には、政治組織と地方行政の大要を述べて、その國が如何に統治されてゐるかを明にすると共に、政治的進歩の概勢を察知する料とした。
- 一、各國と日本との關係に就ては、條約關係、通商關係は勿論、相互の國民的交渉に關して出來得るだけ諸般の事柄を網羅するに努めた。是れ大亞細亞の聯盟は國民相互間の理解と提携とがその基調となるべきものであるからである。
- 一、各國の歴史は往古を説くこと簡にして、現代に接近するに従ひ之を詳述する方法を執つた。限りある紙數に對しては斯くするより外に仕方がなかつたのである。
- 一、政治上の地位の項は編纂者が最も心血を濺いで記述した所である。多種多様の資料

を検討して正鵠を得たる叙述をなさんとする爲めに多くの時間と努力とが費されたことは茲に言ふ迄もない。

一、各國の風俗に關しては、多くの資料を準備しながら一々之を収録することが出来なかつた。本書の性質上それよりも他の重要な記事を入れることが至當と信じて之を割愛した爲めである。

一、寫眞版は本文の記述のみによつては盡し難き憾みある點を補ふと共に、本文の記述とは全く無關係に寧ろ獨立した資料たる意味に於て收載したものが多々存する。讀者が之によつて文字の及ばざる邊に別個の知識を攝取されんことを望む。

一、本書は最初四百五十頁内外を目標として編纂に着手したが、愈々稿を起すに及び記述すべき重要題目が餘りに多く、叙述の壓縮に努めたるに拘はらず遂に斯の如き大冊を成すに至つた。但し斯くして始めて内容の完備を見ることを得た次第である。

一、本書の編纂に當り、赤堀政基氏が主として之れを擔任せられ、尙ほ材料の蒐集には本會々員等が多年の調査によるものを主とし、又た外務省亞細亞局より幾多の資料

を與へられ、東亞經濟調査局其他からも亦各種の便宜を與へられた。それらの勞苦と厚意とに對し、茲に深甚なる謝意を表する。

昭和六年十一月上院

黑龍會編纂部識

最新亞細亞大觀 目次

第一章 總論.....(一)

挿入寫眞版 バビロンの廢墟——コスロー王の白宮殿

第二章 支那.....(一三)

第一節 概説.....(一三)

位置.....(一三) 地勢及び氣候.....(一三) 面積及び人口.....(一五) 人種.....(一七)

第二節 支那本部.....(一九)

行政上の區劃.....(一九) 政治上の組織.....(二〇) 都市.....(二三) 産業.....(二三) 農

業.....(二三) 蠶絲業.....(三五) 工業.....(三五) 鑛業.....(三七) 貿易.....(三三) 貿易開

市場.....(三五) 鐵道.....(三五) 日本との通商關係.....(三三) 在留邦人及び其職業狀

態.....(三三) 在留邦人分布狀態.....(四〇) 主なる會社商店.....(四一) 日本人商工會議

所.....(四三) 人材養成機關.....(四四) 支那の排日運動.....(四四) 山東と日本の關係.....(四八)

歴史.....(四九) 政治上の地位.....(五五)

風俗 服裝.....(八六) 婚姻.....(九〇) 誕生.....(九〇) 宗教.....(九四) 葬式.....(九七) 學

生社會……(九八) 人浚ひ……(九九) 土匪と海賊……(100)
 挿入寫眞版 揚子江——萬里の長城——蔣介石——黃鶴樓——下層民生活狀態——香港——漢口埠頭——北平萬壽山——日貨排斥の刑具——日貨排斥ポスター——日貨排斥劇——明陵の石人——孔子像——宣統帝——孫文——支那の兵士——孫文の遺骸——蛋簇の水上部落——嫁入りの輿——山西省の穴居民——葬式——支那人の挨拶

第三節 滿洲……………(101)

歴史……(101) 産物……(102) 滿洲の鐵道……(103) 葫蘆島の築港……(103) 滿蒙の漢人化……(103) 滿蒙地方の水田可耕地……(103) 滿蒙に於ける日本の特殊權益……(104) 滿蒙に於ける日本人の現状竝に在滿朝鮮人に對する壓迫……(105) 邦人の分布狀態と職業別……(105) 間島と國際關係……(105) 滿洲の戰蹟……(106) 滿蒙回の政治上の地位……(107)
 風俗 服裝……(105) 飲食……(105) 住居……(107) 宗教……(107)
 挿入寫眞版 大連の廣場——大連港頭の移民群——山海關——大連埠頭の大豆——撫順炭坑の露天掘——鴨綠江鐵橋——奉天の新市街——滿洲の移民部落——敦化附近の遠望——間島龍井村市街——旅順白玉山の表忠塔——奉天大西門——新移民の農作——冬の北滿洲
 挿入地圖 滿蒙鐵道系統圖……………(106)

第四節 蒙古……………(108)

歴史……(108) 産業……(108)

風俗 服裝……(107) 飲食……(107) 婚姻……(107) 誕生……(107) 宗教……(108)
 葬式……(108)

挿入寫眞版 成吉思汗——蒙古の騎兵——活佛——蒙古の曠原——蒙古人の服裝と住宅——蒙古婦人の盛裝——魔除けダンス——頭蓋骨の聖盃

第五節 新疆……………(112)

歴史……(112) 産業……(112)

風俗 服裝……(112) 婚姻……(112) 飲食……(112) 誕生……(112) 宗教……(112)
 葬式……(112)

挿入寫眞版 タクラマカン沙漠——新疆の農夫——天山南路——天山各地の獵夫

第六節 川邊及び青海……………(115)

川邊……(115) 青海……(116)

第七節 西藏……………(118)

政治上の地位……(118) 歴史……(119) 産業……(119)

風俗 服裝……(118) 住居……(119) 婚姻……(119) 誕生……(119) 宗教……(119)
 葬式……(119) 三番叟と西藏語……(119)
 挿入寫眞版 ヒマラヤ山の雄姿——喇嘛宮殿——達賴喇嘛——中世時代の西藏騎馬武者——西藏の貴族——西藏人の挨拶——西藏の兵隊——旅藝人

第三章 亞細亞露西亞

第一節 概説

第二節 西伯利亞

位置……(三四) 地勢及び氣候……(三四) 面積人口……(三〇〇) 人種……(三〇〇)
行政上の區劃……(三三)

(イ) 極東地方 ……(三三)

住民……(三三) 産業……(三三) 農業……(三三) 林業……(三六) 漁業……(三六)

鑛業……(三七) 都市……(三九) 交通……(四〇) 猶太人移民計畫……(四二) 浦潮

港の地位……(四二) 極東露領開發五ヶ年計畫……(四三) 日本の漁業權益……(四四)

(ロ) ブリヤートモンゴル共和國 ……(四六)

面積住民……(四六) 行政區劃……(四七) 産業……(四七) 都市……(四八) 交通……(四八)

(ハ) ヤクーツク共和國 ……(四八)

面積住民……(四九) 行政區劃……(四九) 都市……(四九) 産業……(四九)

(ニ) 西伯利亞地方 ……(五一)

面積人口……(五一) 行政區劃……(五一) 人種……(五一) 都市……(五一) 産業……(五一)

交通……(五一)

(ホ) ウラル地方 ……(五三)

面積人口……(五三) 人種……(五三) 都市……(五三) 産業……(五三) 交通……(五三)

日本との通商關係……(五三) 在留邦人……(五三) 日本との貿易……(五三) 歴史……(五三)

政治上の地位……(五三)

風俗 民性……(五三) 服裝……(五三) 住居……(五三) 飲食……(五三) 婚姻……(五三)

宗教……(五三)

挿入寫眞版 西伯利亞の鳥群——ツングース人の家——勘察加の漁業——砂金の採取——浦

湖——犬橋——バイカル湖——ハバロフスク市——エルマークの西伯利亞攻撃——スターリ

ン——北海の流氷 ……(五〇)

第三節 中央亞細亞 ……(五二)

位置面積人口……(五二) 政治上の區劃……(五二) 人種宗教……(五二) 産業……(五二)

都市……(五二) 交通……(五二) 日本との關係附回教徒の建國運動……(五二) 歴史……(五二)

政治上の地位……(五二)

風俗 遊牧民……(五二) 土着民……(五二) 服裝……(五二) 食物……(五二) 婚姻……(五二)

文化……(五二) 葬式……(五二)

挿入寫眞版 キルギス風俗——燃料製造——イブラヒム記念寫眞——クルバンガリ——帖

木兒——サマルカンドの帖木兒の墓——パミールのレニン記念碑——共産治下のトルコマン

——トルキスタンの女——踊子——輕業——タシケンドの花嫁

挿入地圖 中央亞細亞の鐵道網……………(三六八)

第四節 高架索……………(三七一)

位置面積人口……………(三三二) 政治上の區劃……………(三三二) 人種宗教……………(三三三) 都市……………(三三三)

産業……………(三四) 交通……………(三六) 日本との關係……………(三七) 歴史……………(三七) 政治上の地位……………(三〇) 風俗……………(三四)

挿入寫眞版 高架索の土民——美しきチフリス市——石油の都バクター——裏海の波光——高架索の軍道——高架索の勇者

第四章 西部亞細亞……………(三七七)

第一節 土耳其……………(三七七)

位置面積人口……………(三七七) 人種宗教……………(三八) 政治上の區劃……………(三八) 都市……………(三八)

鐵道……………(三九) 産業……………(四〇) 日本との通商關係……………(四一) 歴史……………(四二) 政治上の地位……………(五一) 希領及伊領諸島……………(五三)

風俗 國民性……………(五九) トルコ風呂……………(六〇) 服裝……………(五九) 婦人の解放……………(六一) 政教の分離……………(六一) 羅馬字採用……………(六一)

挿入寫眞版 首府アンゴラ——土耳其の農民——クルド族の部落——ケマル・パシヤ——ボスボラス海峡の壯觀——今日のクルヂスタン——回教徒の禮拜——土耳其の相撲——過渡期の土耳其婦人

挿入地圖 新興土耳其と其舊領土の分屬圖……………(三五〇)

第二節 シリヤ……………(三六四)

位置面積人口……………(三五四) 政治上の區劃……………(三五四) 人種宗教……………(三六) 都市……………(三五)

交通……………(三五) 産業……………(三六) 歴史現狀……………(三六)

風俗 回教徒の風習……………(三八) 婚姻……………(三九) 割禮……………(四〇)

挿入寫眞版 シリヤの土民軍

第三節 パレスタイン……………(三七〇)

位置面積人口……………(三七〇) 都市……………(七一) 人種宗教……………(七一) 産業……………(七一)

交通……………(三七) 歴史現狀……………(三七) 聖地エルサレム……………(三六)

挿入寫眞版 新興の猶太人街——エルサレム——基督

第四節 ケラク王國……………(三七九)

位置面積人口……………(三七九) 歴史現狀……………(三八〇)

第五節 イラク王國……………(三八〇)

位置面積人口……………(三八〇) 住民宗教……………(八一) 政治上の區劃……………(八一) 都市……………(八一)

産業……………(八三) 交通……………(八三) 歴史現狀……………(八四)

挿入寫眞版 メソポタミヤの陸商——チグリス河のお碗舟——バグダードの兵隊

第六節 亞刺比亞……………(三八七)

位置面積人口……………(三三七) 政治上の區劃……………(三三七)

第一 ネチド王國……………(三八八)

建國の歴史……………(三九〇) 都市……………(三九〇) 産業……………(三九一) 鐵道……………(三九一)

第二 エーメン王國……………(三九二)

建國の歴史……………(三九三) 都市……………(三九二) 産業……………(三九三) 鐵道……………(三九三) 國際關係……………(三九三)

係……………(三九三)

第三 英領アデン……………(三九三)

行政上の區劃……………(三九三) 都市……………(三九四) 産業……………(三九四) 人種……………(三九四)

第四 印度保護地……………(三九四)

産業……………(三九六) 都市……………(三九六)

第五 佛領シェイクサイド……………(三九七)

政治上の地位……………(三九七)

風俗 服裝……………(四〇〇) 武器……………(四〇〇) 飲食……………(四〇三) 住居……………(四〇三) 宗教……………(四〇三)

挿入寫眞版 メッカの聖堂—アデンの港—亞刺比亞乙女—メッカの巡禮者—ドルースの花嫁—亞刺比亞の饗宴—マホメット

挿入地圖 亞刺比亞に於ける英國の政治的勢力圖……………(三八八)

第七節 波斯……………(四一七)

位置……………(四一七) 面積人口……………(四一八) 人種宗教……………(四一八) 政治上の區劃……………(四一八) 都市……………(四二〇) 産業……………(四二一) 交通……………(四二二) 日本との關係……………(四二四) 歴史……………(四二五)

政治上の地位……………(四二二)

風俗 民情……………(四二七) 服裝……………(四二九) 住居及び飲食……………(四三〇) 婚姻……………(四三一) 葬式……………(四三一)

宗教……………(四三二)

挿入寫眞版 テヘランの城門—シヤスター地方の油田—波斯皇帝—波斯の軍隊—波斯の成年式—波斯炬燵

第八節 亞富汗斯坦……………(四三四)

位置面積人口……………(四三四) 政治上の區劃……………(四三五) 都市……………(四三五) 人種……………(四三六)

宗教……………(四三七) 産業……………(四三七) 交通……………(四三八) 日本との關係……………(四三九) 歴史……………(四四一) 政治上の地位……………(四四六)

史……………(四四一)

風俗 民情……………(四四八) 服裝……………(四四八) 食物……………(四四九) 婚姻……………(四五〇) 誕生……………(四五〇)

挿入寫眞版 首府カブール—亞富汗斯坦顧問プラタプ—亞富汗斯坦皇帝—亞富汗斯坦の軍隊—カイバル越—パロキル越—亞富汗斯坦風俗

西亞細亞と日本……………(四七一)

第五章 印度……………(四七三)

第一節 印度本部……………(四七三)

位置面積人口……………(四七三) 地勢及び氣候……………(四七三) 政治上の區劃並に統治組織……………(四七五)
 人種……………(四七〇) 言語……………(四八〇) 産業……………(四八三) 都市……………(四八四) 交通……………(四八六)
 日本との關係並に印度志士の去來……………(四八七) 日英の紡績戰……………(五〇〇) 在留邦人……………(五〇一)
 主なる會社商店……………(五〇二) 歴史……………(五〇三) 政治上の地位……………(五二五)
 風俗 民情……………(五二四) 服裝……………(五二五) 飲食……………(五二七) 祭禮……………(五二八) 婚姻……………(五三二)
 誕生……………(五三三) 奇習……………(五三三) 宗教……………(五三四)
 挿入寫眞版 シムラの政廳——象の儀裝——ヴェダ族——カルカッタ市街——タゴールとポー
 ス一家——タゴール歡迎會——タゴールより頭山翁に贈れる手書——印度王族の衛兵——カ
 イバル越の守備兵——反英示威運動——聖雄ガンヂー——印度の最敬禮——叫ぶミュージン
 ——カシミル風俗——舞姫——象のスボーツ——ジプシイの舞踏——印度の大饗宴——牛糞
 の乾燥——結婚式——恒河の水行——ブダガヤの大塔——釋迦——葬式

第二節 ネパール……………(五四一)

位置面積人口……………(五四一) 人種宗教……………(五四二) 都市產物……………(五四三) 政治上の地位……………(五四三)
 風俗……………(五四三)

第三節 ブータン……………(五四三)

位置面積人口……………(五四三) 人種宗教……………(五四三) 都市產物……………(五四四) 政治上の地位……………(五四四)

風俗……………(五四五)

挿入寫眞版 ブータン王

第四節 錫蘭……………(五四五)

位置面積人口……………(五四五) 人種宗教……………(五四五) 政治上の區劃……………(五四五) 都市……………(五四五)
 產物……………(五四六)

挿入寫眞版 ゴム液の採取

第五節 俾路直斯坦……………(五四六)

位置……………(五四七) 面積人口人種……………(五四七) 政治上の區劃……………(五四七) 都市……………(五四八)
 產物……………(五四八) 風俗……………(五四九) 軍事的地位……………(五四九)
 挿入寫眞版 ベルチスタンの土民——ベルチスタン風俗

第六章 南洋……………(五五〇)

第一節 概説……………(五五〇)

日本人の史蹟……………(五五三) 眞如法親王の御事……………(五五五)

第二節 暹羅……………(五五六)

位置面積人口……………(五五六) 政治上の區劃……………(五五六) 人種宗教……………(五五七) 産業……………(五五八)

都會……(五〇) 日本との關係……(五二) 主なる會社商店……(五二) 在留邦人……(五四)
歴史……(五五) 政治上の地位……(五六)

風俗 民情……(五四) 服裝……(五七) 飲食……(五七) 住居……(五七) 婚姻……(五七)
挿入寫眞版 僧侶——手長猿——アユチャの水郷——皇帝と宮殿——野象の渡河——古代劇——
——古式の丸木舟——民屋

第三節 佛領印度支那……………(五七七)

位置面積人口……(五七) 政治上の區劃……(五八) 東京……(五八) 安南……(五八)

老樾……(五九) 東甫塞……(五九) 交趾……(六〇) 人種宗教……(六〇) 都市……(六一)

交通……(六一) 日本との關係……(六一) 主なる會社商店……(六一) 在留邦人……(六一)

歴史……(六一) 政治上の地位……(六一)

風俗 服裝……(六一) 住居……(六一) 結婚奇風……(六一) 食物……(六一) 氣質……(六一)

挿入寫眞版 アングールの佛塔——東京の婦人風俗——河内市街——東甫塞の王宮——疆樞侯——
——結婚の晴衣

第四節 緬甸……………(六〇〇)

位置面積人口……(六〇) 人種宗教……(六〇) 政治上の區劃……(六一) 都市……(六一)

産業……(六一) 歴史……(六一) 政治上の地位……(六一) 交通……(六一)

日本との關係……(六一) 在留邦人職業狀態……(六一)

風俗 服裝……(六一) 住居……(六一) 誕生……(六一) 婚姻……(六一) 葬式……(六一)

挿入寫眞版 トラベラトゥリー——佛塔——雨祝ひの祭禮——緬甸美人——マンダレーの四百
五十塔

第五節 馬來半島……………(六一六)

位置面積人口(六一) 政治上の區劃(六一) 人種宗教……(六一) 都市……(六一) 交

通……(六一) 日本との通商關係……(六一) 主なる會社商店……(六一) 邦人職業狀

態……(六一) 新嘉坡軍港……(六一) 歴史……(六一) 政治上の地位……(六一)

風俗 氣質……(六一) 服裝……(六一) 住居……(六一) 婚姻……(六一) 葬式……(六一)

挿入寫眞版 鳳梨園——新嘉坡——椰子の並樹——馬來風物——蕃族の音樂

第六節 比律賓……………(六三二)

位置面積人口……(六三) 人種宗教……(六三) 政治上の區劃……(六三) 都市……(六三)

産業……(六四) 日本との關係……(六四) 在留邦人と職業……(六四) 主なる會社商

店……(六四) 對比貿易……(六四) 歴史……(六四) 政治上の地位……(六四)

風俗 民性……(六五) 服裝……(六五) 住居……(六五) 食物……(六五)

挿入寫眞版 マニラ市街——先驅者の記念碑——比律賓の島々——リカルテ夫妻——比律賓議
事堂——椰子の實の筏——ネグリト族——民家——アタ族の食事——豚の丸焼

第七節 東印度諸島……………(六五四)

政治上の區劃……(六五) 爪哇……(六五) 面積人口……(六五) 人種宗教……(六五)

都市……(六五六) 産業……(六五七) スマトラ……(六六九) 面積人口……(六六九) 人種宗教……(六六九) 都市……(六六九) 産業……(六六九) セレベス……(六六九) 面積人口……(六六九) 人種宗教……(六六九) 都市……(六六九) 産業……(六六九) ボルネオ……(六六九) 面積人口……(六六九) 人種宗教……(六六九) 領屬區劃……(六六九) 都市……(六六九) 産業……(六六九) モルツカ群島……(六六三) 面積人口……(六六三) 人種宗教……(六六三) 産業……(六六三) 小スンダ列島……(六六四) 面積人口……(六六四) 人種宗教……(六六四) 都邑……(六六五) 産物……(六六五) 日本との關係……(六六六) 在留邦人分布状態……(六六六) 在留邦人職業別……(六六六) 主なる會社商店……(六六七) 貿易額及重要商品……(六六七) 歴史……(六六八) 政治上の地位……(六六九)

風俗 服裝……(六七〇) 住居……(六七〇) 飲食……(六七〇) 婚姻……(六七〇) 葬式……(六七〇) 挿入寫眞版 スラバヤ市街——實りを祈るバリの女——路傍の賭博——ラフレシヤの花——爪哇の竹橋——モルツカ島民の盛裝——バリ島の假裝ダンス——叛逆者の梟首——爪哇の神話劇——バタク族の假裝ダンス——イフガオ族の結婚姿——スマトラの結婚奇習

第八節 帝國委任統治領

……(六六一)

位置……(六六一) 面積人口……(六六一) 人種宗教……(六六二) 政治上の區劃……(六六三) 産業……(六六三) 歴史……(六六四) 政治上の地位……(六六六) 風俗 服裝……(六六九) 食物……(六六九) 住居……(六六九) 教育……(六六九) 挿入寫眞版 ボナベ島民の踊——ボナベ島の婦女——南洋廳——チャモロ族風俗——島民集會

所と石貨

第七章 關係地方

……(六九三)

第一節 概説

……(六九三)

第二節 埃及

……(六九四)

位置面積人口……(六九四) 政治上の地位……(六九五) 都市……(六九五) 人種……(六九五) 宗教……(六九六) 産業……(六九六) 交通……(六九六) スエズ運河……(六九七) 日本との關係……(六九七)

第三節 ニューギニア

……(六九九)

位置面積人口……(六九九) 人種宗教……(七〇〇) 屬領區劃……(七〇一) 都市……(七〇一) 産物……(七〇二) 日本との關係……(七〇二) 挿入寫眞版 バプアの美人——土人の小屋——蠻人の合宿所——奇妙な葬式

第四節 濠洲聯邦

……(七〇四)

位置面積人口……(七〇四) 人種宗教……(七〇四) 政治上の區劃……(七〇四) 都市……(七〇五) 産業……(七〇五) 政治上の地位……(七〇六) 挿入寫眞版 濠洲の牧場——龜の競走——無氣味な通行止

第五節 匈牙利……………(七〇)

位置面積人口……………(七二) 人種宗教……………(七二) 政治上の區劃……………(七三) 都市……………(七三)

産業……………(七三) 日本との關係……………(七四) 歴史……………(七九) 政治上の地位……………(七四)

挿入寫眞版 プレロー博士歡迎會

第六節 フインランド……………(七八)

位置面積人口……………(七八) 政治上の區劃……………(七八) 人種宗教……………(七九) 都市……………(七九)

産業……………(七九) 日本との關係……………(八〇)

第七節 エストニア……………(七二)

位置面積人口……………(七三) 人種宗教……………(七三) 都市……………(七三) 産業……………(七三) 政治
状態……………(七三)

目次 (終)

最新亞細亞大觀

黑龍會編纂

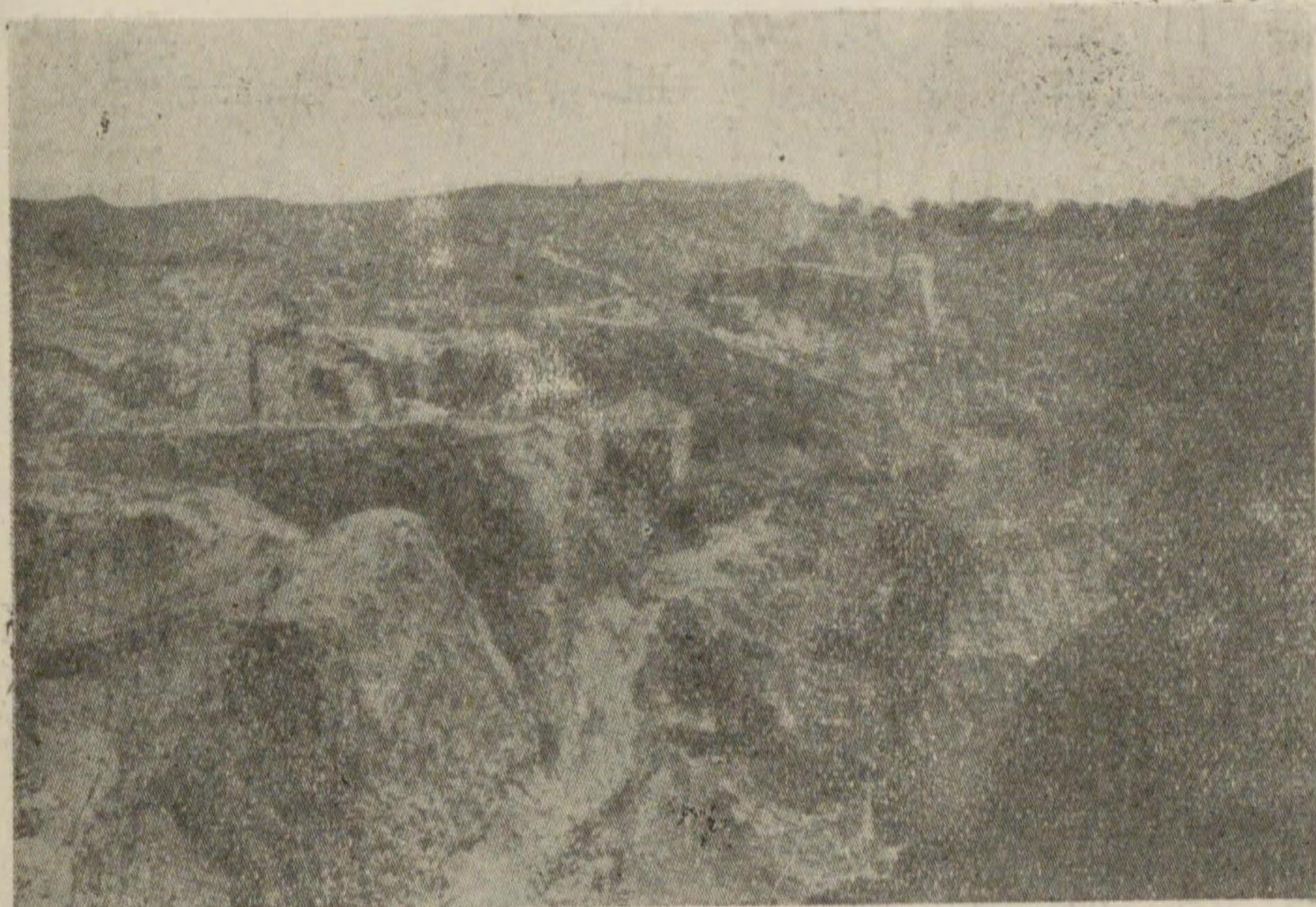
第一章 總論

亞細亞は歐羅巴と共にユーラシヤ大陸の主體となり、面積一千七百二十萬方哩を有し歐羅巴の面積三百八十七萬方哩なるに對し、實に四倍半に近い廣大なる地域を占めてゐる。殊に亞細亞は世界中最も早く文明の發達した地方で、彼のバビロニア、アッシリヤ、カルデア、波斯、支那、印度等に於ては、歐洲大陸がまだ未開草昧を呈してゐる時代に燦然たる文化の光を放ち近世歐羅巴文明の源泉となつたのである。亞細亞といふ名はアッシリヤ語のアスといふ語から出でアスは日の出といふ意味を有し、亞細亞とはすなはち旭の昇る地といふことを意味する名稱なのである。然るにヨーロッパといふ語は夕暮の意味で、この二語を對照すれば古代文化の所在を示す明確なる意義を有することが知られる。地圖を開いて見れば一目して知られる通り

亞細亞とは日出の意を含む語

歐羅巴はユーラシア大陸の半島で、亞細亞はユーラシア大陸の主體である。然るに近世では歐

亞細亞に於ける獨立國



バビロンの廢墟 昔の年千四に昔の文化の光を放つたバビロンの都は久が蹟遺年近、がたつかなも由るぬ尋を跡のそた復てれも埋に底地くし。るゐてし示に前眼の人代現を影面の明文代古の亞細亞や今てれさ掘發

羅巴民族が常に優勢を示し、亞細亞民族は絶えず壓迫を受けて、亞細亞の各地が歐洲諸國の屬領となり、現に亞細亞の全體中、獨立國の面積は約七百萬方哩に過ぎないのに歐米諸國の屬領と化せる面積は約一千萬方哩に近い。今日、亞細亞に於て獨立國たる地位を保つてゐるのは、日本、支那、暹羅、土耳其、波斯、亞富汗斯坦、ネヂド、エーメンの八箇國に過ぎず、しかもその中に自力で獨立を確保するだけの資格を有するものは果して何箇國であるか、いさゝか疑問の存する所であると共に、眞の文明國と稱するに足る國は日本を措いて他に殆どないといつてもよい。人口の割合からいつても亞細亞十億の

地勢と民族性

民族中、約半数は歐米諸國の主權に隸屬する被征服者で、約半数が獨立國家の國民たることを誇り得る資格を持つてゐるに過ぎない。

亞細亞が古代に於て既に燦然たる文化を有してゐた上に、斯く廣大なる地域を占め、且又豊富なる天然資源を有するに拘らず、遂に開明富強の度に於て歐羅巴に凌駕せらるゝことゝなつたのは、地勢の然らしむる關係によると共に一面には民族性の相違にもよるのである。倩ら地勢の點から稽ふるに、亞細亞の北部は氣候が酷寒で人類の住むに適せず、南方は又熱帶圈内にあつて、一應は人類を早く進歩させても、やがて又徐々にそれを退化させる危険を持つて居る。而して比較的適順な緯度に位置する地域には高峻な山脈が連亘して面積の廣い幾多の高原を現出し、西藏、蒙古、バミール、アルメニヤ、イラン、小亞細亞、タリム等の諸高原となつて居る。この高原地方に住む人種は生活の手段として勢ひ牧畜に依らなければならぬ運命を有し、幾世紀もの間遊牧生活を續ける結果、いつまでも文化の向上を來すことが出來ないのである。しかのみならず、山地や高原の住民は生活資料に乏しいために掠奪に走り易く、自ら文明を建設し得ないばかりでなく、文明の破壊者として働いたのである。亞細亞に早く發達したアッシリアの文明も山地から大舉して掠奪に出掛けて來たメデア人のために蹂躪され、ニネベの文化

もこの掠奪者のために忽ち亡ぼされたのであつた。其他、蒙古、波斯、小亞細亞、亞刺比亞、高架索等の高原地帯にゐた民族が、掠奪のために暴ばれ廻つて平原地帯に發達した文明を甚しく破壊し、戦争攻略の繰返される毎に亞細亞の文化は破壊されたのである。

又、精神的方面では亞細亞民族の間からは世界の三大宗教たる佛教、回教、基督教が發生し世界人類に多大の感化を與へた程優ぐれた素質を持つてゐるのであるが、その一面には著しく宿命觀的な傾向を帶び、神秘的、非現實的な思想を抱く民族が多くを占めてゐたことが、政治的にも社會的にも進歩發達を妨げる原因となつてゐる。日本と支那とが永く獨立を保持して來たに反し、亞細亞の西部及び南部に國する各民族が、近世に至つて歐洲の勢力に壓迫され、殆ど獨立國と稱するものがないやうな状態に陥つてゐたのは、地理的に歐洲に接近してゐた關係にも因るが、一面には前述の如き民族的傾向のため知力の發達を妨げられて、抵抗力を失つてゐたからである。歐洲の民族が亞細亞から受けた宿命觀的思想の影響から脱却して、知力本位の生活に轉進し、種々の大發見大發明をなし、物質世界を征服することに成功した新銳の氣を持して進出し來るに及び、舊い迷信と慣習とに囚はれてゐた亞細亞の民族が、忽ち征服されてしまつたのも餘儀なき次第である。つまり、これらの民族は神佛に歸依することを知つて、知

力に歸依することを知らず、物質世界に順應することを心掛けて、物質世界を征服することを

閑却してゐたために遂に被征服者たる地位に落ちたのである。

しかしながら、社會的有機體としての國家は概ね發達と隆盛とを経て、やがて又凋落の時期に達するのが例であつて、文華燦然、繁榮富強を呈せし西歐の文明國も、隆盛の極點に達しては其處に復た弊害を生じ、一轉して凋落の時代に入らざるを得ず、遂にその時機に入れる徴候を現はし來りて、曩には先づ急激なる破壊作用たる歐洲大戰を勃發し、戦後に於ては戰勝國たると戰敗國たるとを問はず參戰國は一樣に疲弊の色彩を濃厚にし、この大戰を一轉機として、亞細亞方面に對する壓力を弱めることゝなつた



歴史は返すすべし、波羅斯の王宮、白宮の遺蹟、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅斯の王宮、波羅ス

亞細亞復興の
新氣運

既に壓力の弱めらるゝ以上、今まで壓迫を受けてゐたものが之を撥ね返さうとする努力を増し來るのは當然で、歐洲大戰後、弱小民族によつて民族自決の叫びが高調されるに至つたのは決して怪むに足らない。この機運に乗じて、久しく歐洲強國の桎梏に苦しめられてゐた波斯、亞富汗斯坦が完全に獨立し、亞刺比亞にはネチド王國が新に興り、土耳其も亦瀕死の状態から脱して、小亞細亞に據り新興の氣を吐くこととなり、印度三億の民衆も獨立を求めて猛然と奮起するに至つた。其他暹羅は獨立國としての健全性を著しく増し、小國ながらも紅海の濱に據つてエーメン王國がその存在を明にした。斯くして亞細亞には八個の獨立國家を算ふることとなつた上に、巨象の如き印度が獨立を求めて活潑なる動作を始め、印度支那では安南の志士が回天の事業を策し、南洋諸島でも爪哇に民族自決の運動が起り、比律賓も百折撓まざる概を以て獨立運動を續けてゐる。見來れば亞細亞の天地には民族的復興の氣運が躍然と漲つてゐるのである。正に是れ長い眠りの後に來れる新しき曙でなくてはならぬ。

但し亞細亞の各獨立國、竝に歐米の羈絆から脱せんとして、ある亞細亞諸民族の實情を眺めると、まだ概して文化發達の程度が低く、智力的にも經濟的にも歐米の諸勢力に對抗する力が弱いのであるから、到底一朝一夕に歐米の勢力を排除することは難く、亞細亞諸民族が完全な

亞細亞民族
解放の
前途

る解放を得るまでには多大の努力を要するはいふまでもない。これは長い歴史の間劣敗者として處し來つた因縁上致方もないことであるが、今や彼等が覺醒して自ら解放を期するに當り、多大の努力を課せらるゝといふことは、一面に民族的の能力を鍛鍊する機會を與へられる譯であつて、必ずしも悲觀すべきことではない。例へば印度民族について言ふも、英國人が『印度人が完全に自治の能力を有するに至れば、英國は印度に自治を與へるに決して吝かなるものではない』といつてゐるやうに、亞細亞民族の文化の程度の低いことが、歐米人に取つては解放を拒否する都合のよい口實となりつゝあるのである。しかも宗主國たる歐米諸國が、その植民地政策に於て、植民地住民の文化を向上せしむる方法を遺憾なく講じてゐるかといへば、寧ろ反對に植民地住民の智能の向上を阻止する態度に出で、彼等を無智の儘にしておいて、その支配權を行使するに都合よいやうな方針を執つてゐるのである。印度に於ける英國、印度支那に於ける佛國、東印度諸島に於ける和蘭、一として皆然らざるはない。しかしながらガンヂー一たび起てば、多數の印度民衆は彼の指揮に従つて、身を牢獄に投ずるも悔いず、安南獨立の志士が一たび事を起せば、安南の民衆は陰に陽に之に加擔してその舉を助けるといふ状態で、隱約の間に漲る解放の精神は、假令火を以てするも水を以てするも之を防ぎ止めることは出來な

歐洲列強
の領土的
並に經濟
的掠奪

いのである。さうした運動が波濤の寄せては返す如くに繰返されてゐる裡に、民族精神は益々鍛鍊され、民族的能力は次第に増進され、遂に初一念を達成するに至るのであつて、亞細亞に於ける被壓迫民族は、今正に鍛鍊時代に置かれて居るものと見ることが出来る。亞細亞は天産の饒なる土地である。この絶大なる富源を擁しながら目覺ましき經濟的發展をなすに至らないのは、これまで歐洲列強によつて領土的、經濟的の掠奪を被つてゐたからである。巨大なる富を藏し、且又巨大なる富を生産する所の印度が、今尙ほ貧しき民衆を以て滿されてゐるのは、之に對して英國の搾取が止め度なく行はれるからである。波斯や亞富汗斯坦の微々として振はないのも、これまで歐洲の諸勢力に壓せられて、自主的活動を妨げられてゐたからである。印度支那、暹羅、緬甸、中央亞細亞、高架索等、何れも同然であつて、支那についても亦同様のことがいはれ得る。されば何としても亞細亞の發展を圖るには、外來の勢力を排除して、亞細亞民族自身が亞細亞の主人となることが根本要件である。亞細亞に於ける被壓迫民族の解放運動に、日本が直接與ふことは元より國際條理の許さぬ所であるから、如何ともなし難きことであるけれど、亞細亞復興の新しき曙が來たことを知らせる曉鐘を打ち鳴らしたものは日本である。日露戰爭に於て日本が強大なる露西亞を破つたといふ事實は、實に多數の亞細亞民族に多

日本が諸
民族に與
へた感化

日本民族
の任務

大の希望と信念とを與へる結果となり、明治以後に於ける日本の目覺ましき發展は、彼等をしておのづから奮ひ起たしむる龜鑑となつたのである。新興の諸獨立國は何れも日本のなした所を學んで、これから建國の大業を成就すべくいそしんで居り、多年屈從を強ひられてゐた民族は、長い忍苦の諦めから覺めて解放を求めやうになつて來たのである。しかも、それらの國々や民族は、文化もまだ進まず實力も弱く、その存立状態は決して健全鞏固であるとはいひ難い。されば之を誘導扶掖して儼然たる國家を打建てさせるのは亞細亞の最強國たる日本民族の任務で、これらの諸國が眞に健全富強の國たるに至つて、亞細亞の復興は成就するのである。今や歐洲には赤色露國が擡頭して亞細亞を赤化するに餘念なく、米大陸には北米合衆國があつて絶大なる資本の力により亞細亞に進出せんとし、大英帝國はいさゝか暮氣頹唐たる觀はあるけれど、大規模なる産業設備と屬領とを從へて依然亞細亞の經濟的支配者たらんとしてゐる。これらの諸國が一齊に攻勢的態度に出て來れば、亞細亞の政治的經濟的及び文化的獨立は甚しく脅かされ、謂ふ所の亞細亞の復興も一片の空辭に歸する虞れがある。之に對する策は亞細亞の諸國が提携して相互扶助の道を歩み、經濟的政治的諸力を統合し、其處に一大勢力を作るより外にはない。

日本國民は亞細亞以外の諸大陸を目指して國內過剰人口の捌け口を求めんとしても、到る處で門戸を閉鎖され、僅に遠隔なる南米に多少の移民を送り得るに過ぎない。假令、南米が永久に本邦移民の安住地であり得るとしても、雲煙萬里、隔絶せる南米の地理的位置は、母國との關係を密接に保つに不便であるから、それよりも更に手近の處に適當なる發展の地を見出し得るならば、其處に向つて進出を期するを勝れりとする。この意味からいつて亞細亞は閉却するを許さぬ地で、仔細に研究を積むならば、邦人の往いて以てなすべき事業は多いのである。第一に日本は亞細亞の諸國と密接なる經濟上の聯携を保ち、相互の貿易を増進して共存共榮の實を擧ぐるは勿論、今後幾多の建設的事業を必要とする後進諸國のために我が國の進歩せる學問技術を以て充分なる寄與をなすべき必要がある。國內産業の開發にせよ、鐵道其他の交通事業にせよ、諸般の文化的社會的施設にせよ、苟も我が國民が力を假すに適當なる事業に對しては進んで其の國の便宜と利益とを圖るべきである。只だ一箇の商業國民として我が商品の販路を開拓すれば足るといふ如き態度から一步を進めて、親切なる助言者となり、有力なる應援者となり、更に進んで協同者となり、指導者となつて、亞細亞復興の大業に參する底の高遠なる民族的理想の下に行動すべきである。

今日では世界の國家乃至社會は漸次大きな單位になりつゝある。言葉を換へていへば、單獨孤立せる國家は最早國際經濟社會に存立することが困難となつて、幾つかの結合した國際經濟團體を形成し、それによつて存立を鞏固にすべく企圖されてゐる。四十八州を結合した北米合衆國は元來大陸單位の國であり、勞農露國はその聯邦内に廣大なる地域を包容して偉大なる經濟團體となり、英國は幾多の屬領を従へて大英帝國の名の下に地球上へ羽翼を擴げてゐる。更に歐洲では佛蘭西のブリアンが提唱する歐洲聯盟により、世界經濟の將來に處せんとしてゐる。これらの國際的經濟團體はその内部に豊富なる天然資源を藏し、有無長短互ひに相補ひつゝ生産消費の圓滿なる統制を圖り、その餘力を以て團體相互間の爭覇戰に臨み、更に又それらの團體結成に洩れたる國々を自己の勢力下に支配せんとしてゐるのだから、亞細亞の諸國が個々に分裂してゐたのでは到底之に對抗し得べき筈はない。この國際的傾向に對し、亞細亞の諸國が打つて一丸となり、未開發の状態に置かれてゐる豊富なる天然資源を利用して、偉大なる經濟的發展を期することは正に目前の急務といはなければならぬ。新興諸國の撓みなき努力も、之をその單獨孤立せる國情から見れば、現代の世界的大勢に照して、その力が餘りに微弱であり、或は又自彊の途を求むる餘りに互助協調の必要を忘れて無益の抗爭に耽り、却つて國運を

誤らんとしてゐる國もあり、尙又、國際的に動きつゝある危激の思潮に搖撼されて、所謂赤化の渦中に捲込まれんとする危険を孕んでゐるものもあつて、復興亞細亞の半面には尙ほ渾沌として方向の一致せざるものがある。この秋に際し全亞細亞の民衆を呼び覺まして各自の國を全ふすべき大道を指示し、共存共榮の目的を遂ぐべき亞細亞聯盟に體系を與へることは、日本國民の任務であると共に、又日本自身のために存立を確保する所以の道である。亞細亞大觀がこの目的のために若干の寄與をなすべき用意の下に編まれたものであることを識認せらるれば幸である。

第二章 支那

第一節 概説

位置

北は亞爾泰^{アルタイ}、薩彥^{サヤン}、ヤプロノイ諸山脈と黒龍江とで露領西伯利亞と境し、東は長白山脈で朝鮮に境し、黄海、東海、支那海に枕してゐる。南は結露山脈、南嶺山脈、雪嶺山脈、ヒマラヤ山脈で印度と境を分ち、西は亞爾泰^{アルタイ}、天山、葱嶺で、露領中央亞細亞と境を接してゐる。

地勢及び氣候

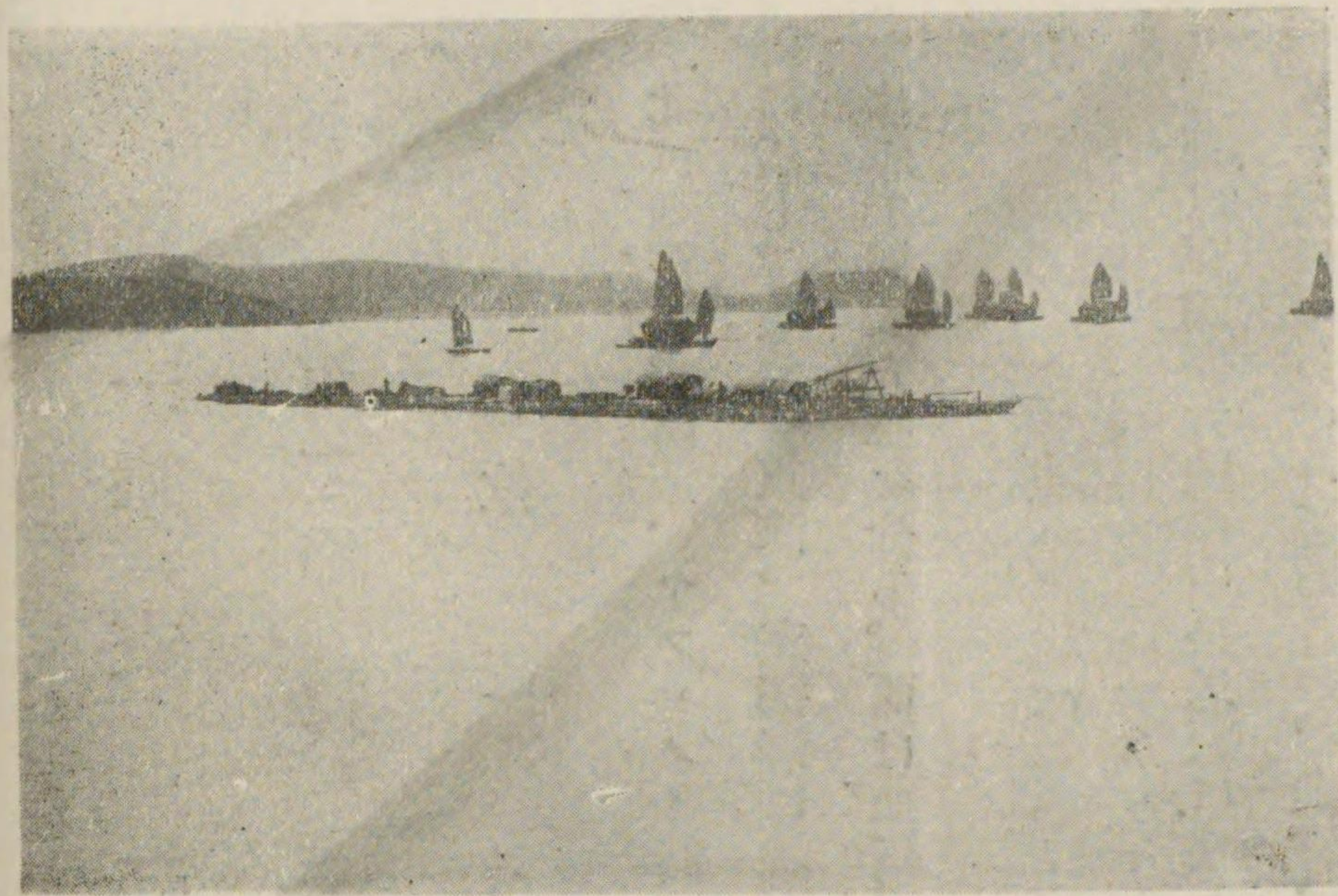
支那は亞細亞大陸の中央以東に亘り亞細亞全土の四分の一を占め、海岸線は東部の太平洋に面する所にあるのみであるが、港灣、岬角、半島等の出入を計算すれば全長約四千五百哩乃至五千哩に達し、國內は西部が亞細亞の東部高地に屬して土地が一般に高く、ヒマラヤ、天山、

位置

支那の地勢及び氣候

アルタイ、サヤン、興安の諸山脈が之を抱擁し、パミル高原から東走する崑崙山脈は西藏高原

黄土の堆積



江子揚りた々洋 江の長さ凡そ三千哩、洋とてし海に注ぐこと天 那支てつ代に民國那支が河のこ、は觀大るた渺浩、でりかばんさ浸もを。るあでうやるみてつ語をとこるた國大の

とタリム盆地、蒙古高原との境を成してゐる。東部は一般に土地が低く、支那平野、滿洲平野が開け、これらの平野は石英、長石、方解石、雲母等の微細な破片から成る所謂黄土の堆積による優良な土壤である。河川の重要なものは太平洋斜面に注ぎ、運輸灌漑の便を與へてゐる。氣候は面積廣大で大山脈や大高原があるため、所により差異あるを免れず、南部に於ける熱帶圈内にある土地は海洋の影響をも受けて海洋的氣象を帯ぶるに反し、北部には高原沙漠があつて雨量少く、大陸的氣象を帯び寒暑共に烈しく中部地方は寒暑適中の地あれど海洋の影響を受けないため、依然大陸性を帯び、概して寒暑共

に甚しい。支那本部だけに就ていふも、この地方は季節風帯にあつて、冬は北及び西北の風が吹き空氣が乾燥して寒く、夏は西南風が吹いて甚だ濕潤を呈し、春秋二季に於ても一日の間に温度の劇變を呈する缺點がある。

面積及び人口

廣大なる支那の總面積に就ては、未だ嚴密なる實測が行はれてゐないから、確實なる數字を求めるとは不可能である。政治年鑑には一千一百八萬三千五十方料と記載されてゐるが、大正十二年（一九二三年）支那郵政總局の調査として發表された所によると、支那本部面積百五十三萬二千七百九十五方哩、東三省三十六萬三千七百方哩となつてゐる。之に蒙古百八十二萬八千方哩、新疆及青海五十八萬方哩、西藏六十五萬一千方哩を合算すると全土の總面積は實に四百九十萬五千九十五方哩（一千二百七十三萬四千七百餘方料）となる。要するに正確なる數字は如何にもあれ、その總面積が我が國の十六七倍に達することは疑ふべくもない。人口に就ても諸説紛々として定まらないが、昭和六年二月國民政府内政部より最近の調査により發表した所によると、總人口四億七千四百四十七萬八千と記録され、その省別人口は左の通りである。

謎の如き支那の面積と人口

| | | | |
|----|------------|-----|------------|
| 江蘇 | 三四、一二六、〇〇〇 | 雲南 | 一三、八二一、〇〇〇 |
| 浙江 | 二〇、六四三、〇〇〇 | 貴州 | 一四、七四六、〇〇〇 |
| 福建 | 一〇、〇七一、〇〇〇 | 湖南 | 三一、五〇一、〇〇〇 |
| 廣東 | 三二、四二八、〇〇〇 | 湖北 | 二六、六九九、〇〇〇 |
| 廣西 | 一三、六四八、〇〇〇 | 江西 | 二〇、三二三、〇〇〇 |
| 安徽 | 一一、七一五、〇〇〇 | 青海 | 六、三一五、〇〇〇 |
| 四川 | 四七、九九三、〇〇〇 | 綏遠 | 二、一二三、〇〇〇 |
| 山西 | 八、九〇六、〇〇〇 | 察哈爾 | 一、九九七、〇〇〇 |
| 山東 | 二八、六七三、〇〇〇 | 熱河 | 六、五九四、〇〇〇 |
| 河北 | 三一、二三三、〇〇〇 | 遼寧 | 一五、二三三、〇〇〇 |
| 河南 | 三〇、五六六、〇〇〇 | 吉林 | 七、五三五、〇〇〇 |
| 山西 | 一一、二三〇、〇〇〇 | 黑龍江 | 三、七五五、〇〇〇 |
| 陝西 | 一一、八〇二、〇〇〇 | 新疆 | 二、五五二、〇〇〇 |
| 寧夏 | 一、四五〇、〇〇〇 | 外蒙古 | 六、一六〇、〇〇〇 |
| 甘肅 | 六、二八一、〇〇〇 | 西藏 | 三、七二二、〇〇〇 |

備考 昭和五年十一月東京で開かれた國際統計會議に於て、支那人口研究の權威として知らるゝ米國コーネル大學教授ウキルコックス博士は、支那現在の總人口に關する論文を發表し、三億四千二百萬人が正確數字であると述べたが、之に

對し中國政府代表陳華寅氏は、過去十八年間に於ける支那の人口統計によれば千人に對する人口増加率は七、八パーセントであるから、今日は正に四億四千五百萬人に達してゐると力説した。斯く支那の人口に對しては専門學者の間にも甚しき計數上の相違があるが、要するに支那の人口は正確な戸口調査がないのだから、暫らく前掲の國民政府發表の數字に従ふより外はない。

人種

人種

人種は大別すると(一)漢族、(二)滿洲族、(三)蒙古族、(四)土耳其族、(五)哲伯特族、(六)苗裔族、(七)朝鮮族で、此外日本人もある。

漢族 黄河、揚子江の流域を中心として、後光のやうに四方に放射してゐる。

滿洲族 通古斯人と滿漢人との二つある。通古斯人は滿洲及東蒙古に住んでゐる。滿漢人は滿洲人の漢人化したもので、滿洲全部が中心で、蒙古、新疆に散在してゐる。

蒙古族 東蒙古族は、内外蒙古を根據として支那本部及滿洲に少しばかり散在してゐる。西蒙古族は天山南北路、烏梁海、塔爾巴哈臺等に住んでゐる。

土耳其族 西北から漸次移住して來た種族で、漢人と同一の言語を用ひてゐる。東干や、漢回、や纏頭回は之であつて、天山南北路と、青海と、西藏の西北部に住んでゐる。

廣東)廣西(南寧)貴州(貴陽)雲南(雲南)(以上支那本部)
 遼寧||舊奉天(瀋陽||通稱奉天)吉林(吉林)黑龍江(龍江||通稱齊々哈爾)熱河(熱河)察哈爾
 (張北||通稱張家口)綏遠(歸化)新疆(迪化)寧夏(寧夏)西康(康定||前名打箭爐)青海(西寧)
 尙ほ從來、奉天、吉林、黑龍江の三省を東三省と呼んでゐたが、之に熱河省を加へて東北四
 省と稱することゝなつた。上記二十八省に外蒙古と西藏とを合したものが即ち支那全土である。
 又、南京、上海、廣州、漢口、青島、北平、天津の七市は特別市と稱し、他の諸市と區別し特
 別市政府條例により行政されてゐる。

政治上の組織

民國十七年公布の中華民國々民政府組織法により、政府は、行政院、立法院、司法院、考試
 院、監察院の五院を以て組織し、政府に主席委員二人、委員十二人乃至十六人を置き、五院々
 長は右の政府委員より之を任じ、主席委員は國際的儀禮について政府を代表し、且つ陸海軍總
 司令を兼任する。行政院は最高行政機關であつて内政部、外交部、軍政部、海軍部、財政部、
 實業部、教育部、交通部、鐵道部、及び建設委員會、蒙藏委員會、僑務委員會、勞工委員會、

國民政府
の組織

禁煙委員會の各部各委員會を以て組織し、各部に部長、政務次官、事務次官各一人を置き、各
 委員會に委員長副委員長各一人を置いてゐる。これが我が國の内閣に相當するものである。地
 方は各省に省政府委員を任じ、首席委員が統括して行政を掌る仕組となつてゐる。軍事機關は



蔣 介 石

前記五院から獨立し、參謀本部、
 訓練總監部、軍事參議院を置き、
 參謀總長、訓練總監、軍事參議院
 々長を任命して、軍事上の最高行
 政を掌る。

然るに昭和六年五月南京の國民
 政府に對立して廣東に同様の組織
 を有する廣東國民政府が組織され
 汪兆銘を主席として廣東廣西の諸
 省を地盤に頻りに南京政府の非を鳴らし、兵力を擧げて南京政府を討伐する氣勢を示してゐる
 有様で事實上支那には現在二個の政府が對立してゐる。廣東政府の目標は南京政府主席たる蔣

介石の獨斷的態度を非とし之を打倒せんとするのであるから、國民黨の所謂黨を以て國を治めんとする一般方針に差異はなく、何れは早晚合體すべきものと觀測されてゐる。

都市

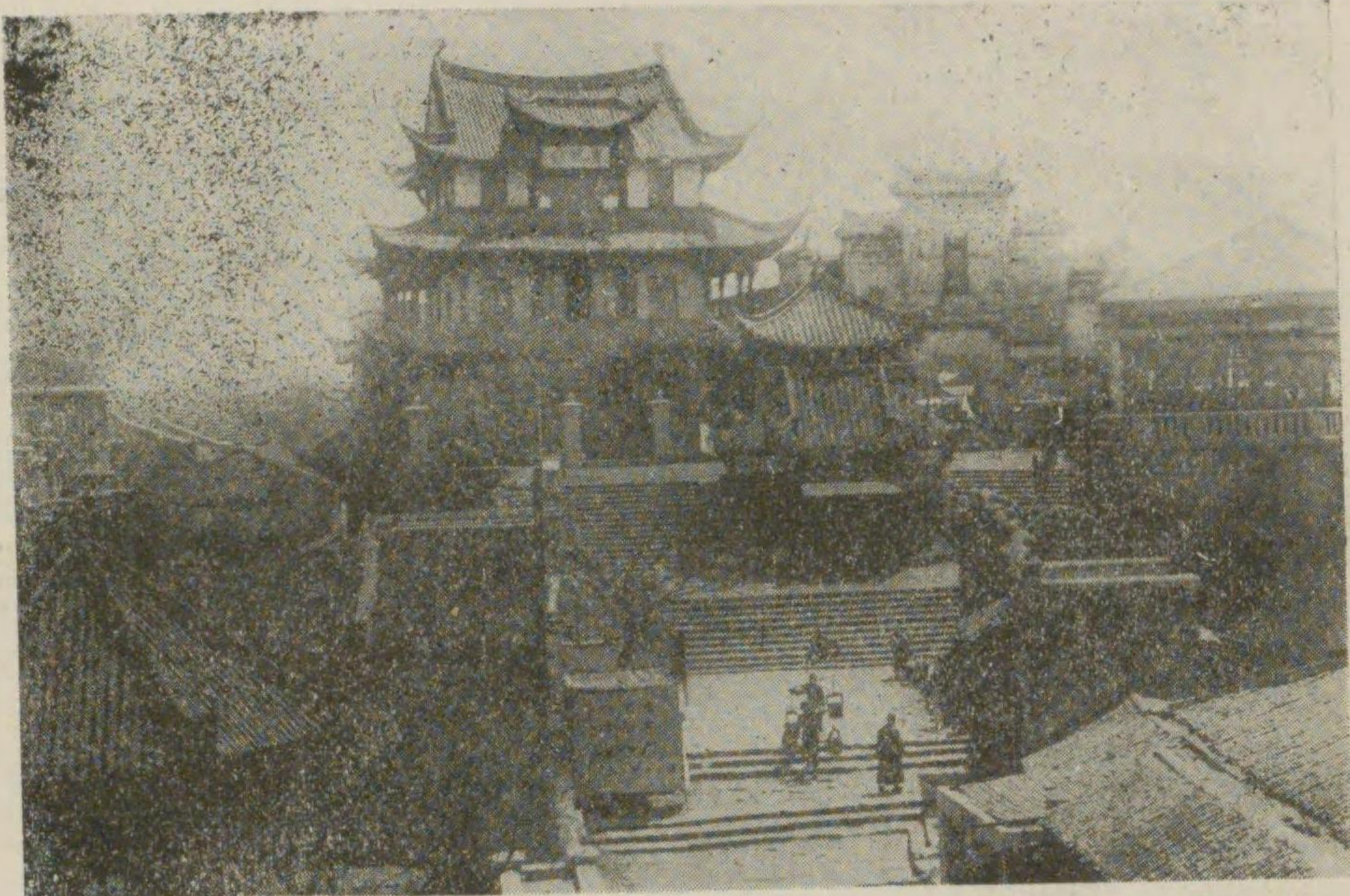
都市の人口

支那の都市に就ては正確なる人口統計が行はれてゐないから實數を知ることは困難であるが、凡そ人口十萬以上を有すること確實と見らるゝ都市を擧げると次のやうなものである。(括弧内は人口、單位萬)

- 上海(一五〇) 北平(一三〇) 漢口(八一) 天津(八〇) 廣東(九〇) 成都(五〇) 杭州(四二) 香港(四〇) 南京(四五) 無錫(五〇) 重慶(五〇) 潮州(三五) 哈爾濱(三二) 南昌(三〇) 福州(三一) 西安(三〇) 寧波(二八) 濟南(三〇) 大連(二六) 青島(二七) 開封(二五) 太原(二五) 奉天(二四) 佛山(二五) 蘇州(二〇) 長沙(二〇) 溫州(二〇) 澳門(一九) 廣州灣(二〇) 九龍(一八) 武昌(一五) 厦門(一二) 蕪湖(一一) 濟寧(一二) 安東(一一) 鎮江(一〇) 揚州(一〇) 漢陽(一〇) 湘潭(一〇) 漳州(一〇) 桂林(一〇) 貴陽(一〇) 雲南(一〇) 張家口(一〇)

農業

重農主義の國

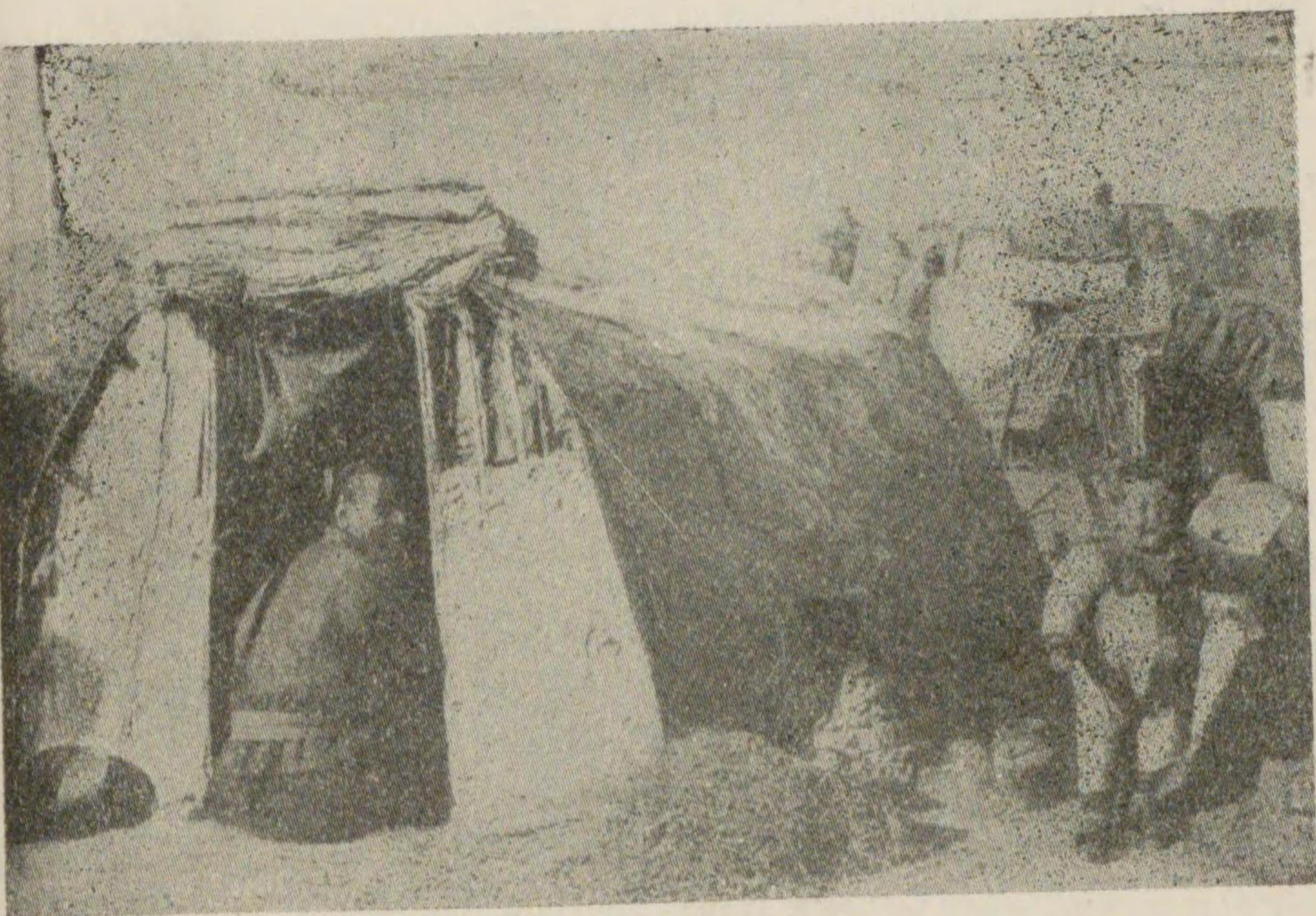


黃鶴樓 李白の詩に於ては、其の歴史に其の名を傳へられたる黃鶴樓は、曾ては漢武の第一偉觀として昌昌の名物であつたが、長髮の賊亂に燒かれ、其の再建の祝融の災に今は昔の面影もない。

地があるから、之が開墾を盛んにし、農業の開発を圖るに至らば、一大農産國たるに至るべき

支那は昔から重農主義の國である。今日でも全國民の四分の三以上が農民で、支那本部及滿洲の耕地總面積は確實なことは判らないが、約十五億七千萬畝(一畝は我國の約六畝三合)と註せられ、土地總面積の約一割五分に當り、農民は自作農階級の者が多數を占め、大地主は少い。農耕の技術は概して幼稚で、耕作物は米、小麥、高粱、黍、粟、豆類、麻、甘蔗、茶、煙草等である。現在では國內農産物だけでは國民を養ひ切れず、年々多量の米、小麥粉、砂糖、雜糧を輸入に仰いでゐる。耕地は農田地(水田早田)が九割を占め、園圃地(桑、茶、蔬菜類の栽培地)は一割である。國內には尙廣大なる可耕

は明かで、支那民族發展の一面は農業開發にあると稱せられてゐる。然るに近年戰亂相次ぎ、



支那下の民生生活 廣い支那の社會層は複雑である。北平天津附近。もともなは原始状態に近き山村に住る。るる

農村に對する課税が苛重を加ふるのみならず、軍閥の鬭争と匪亂とが頻りに繰返されるため、農村は一層甚しき打撃を受け、家は焼毀され耕地は蹂躪され、農民が離散して荒蕪地のみ徒らに増加する有様である。最近支那政府はジュネーヴの國際労働局と聯絡を取りて産地十ヶ年計畫なるものを立て、未開墾のまゝ放置されある肥沃なる可耕地三億エーカー（約我一億二千町歩）を十ヶ年間に美田に化するといふ方針を發表したが、事實右の如き状態であるから、支那の國情が改善されざる限り、急速に多くの美田を増加する如きことは實現殆ど不可能と見るの外はない。

蠶絲業の發展

蠶絲業

蠶絲業の發達は甚だ古く、西曆紀元前三千年頃既に支那では養蠶が行はれた。現在では江蘇浙江を中心とする長江下流地方に最も發達し、四川、湖北を包括する長江上流地方並に山東、廣東、廣西が之に次ぎ、其他北では山西、河南、南では福建にも多少の産額あり、滿洲地方には柞蠶を産出する。近年、浙江、江蘇兩省には蠶桑改良運動が起り、蠶業學校、講習所等を設け官民一致して組織的に改良運動を行つてゐるので、同地方に於ける蠶絲業の進歩發達は甚だ顯著なるのみならず、漸次各地方に及び、今や農家主業の一として重視される有様である。養蠶の種類は大部分春蠶で、一部には夏蠶を飼ふ者もあり、秋蠶は未だ試養時代である。現在の全産繭額は一ヶ年三百七十萬擔内外と推算せられ、我國の産繭額に比し約六割強の割合である。近年座繰製絲は漸次衰へ、輸向機械製絲の發達著しく、乾繭又は製絲として、英、米、佛、日、諸國に輸出し、特に米國に於ける、日本生絲との競争を惹起し、我國生絲販路の一部を侵蝕せんとする機運にまで進みつゝある。

工業

支那に於ける各種工業は近年頓に勃興の氣運を示し、新式機械を應用せる工業に就ては正確な統計なきも、現在既に八百工場、その資本額六億元に達すといはれてゐる。殊に國民革命もほぼ完成して、軍政時代から訓政時代に入り、國民政府當局は國產振興の見地から自國工業保護政策に力を注ぎ、國貨振興を高調しつゝある。民間に於ても外國人企業に刺戟されて新に企業を目論見るもの續出し、就中紡績事業は新機械工業の王者として最も發達し、昭和四年度（一九二九年）に於ける在支紡績は支那人經營の工場七十七、英國人工場三、日本人工場四十六といふ割合を示してゐる。電氣事業の如きも同年十一月現在の統計によると、民營の發電所數五百二十三、之が資本額五千四百九十萬元、發電容積二十萬六千ワットを算し、官營及外人經營の發電所を合すれば八十餘萬キロワットに達する。而してその發達の趨勢は、十年間に五倍の増加をなした割合となつてゐる。

其他製油、製革、製糖、織布、燐寸、卷煙草、罐詰、食料品、セメント、石鹼、化粧品等、

固有の資源を利用して國產の發達を圖らんとする諸工業の勃興しつゝあるは、大に注目に値する。唯だ支那人は大規模の株式組織による企業の經營に就ては、まだ試練時代にあるものと見られてゐるが、小規模の簡易工業は曩日の日貨排斥以來一層發展の跡が顯著である、何分にも四百九十五萬方哩の大面積を有し、其處に包藏する天然資源は無限である上に、國民は勤勉で且つ賃銀が頗る低廉であるのだから、眞に和平統一の事業が成り、國家が完全なる統制力を備へ、産業政策に力を盡す曉に於ては、その經濟的活躍は驚くべきものがあらう。國民政府當局は軍政時代に於ても夙に國貨振興の方策を講じ、國貨展覽會、國貨検査所、工業試験所、工商發展委員會等の施設に努め、工業教育に就ても學校を新設する等、その用意の疎かならざることを示してゐたのであるから、將來四億民衆を驅つて一層工業的發展のテンポを速かならしむるものあるべきは疑ふべからざる事實である。而して支那の對外貿易表を見ても、各種機械類の輸入額が逐年増加しつゝあることは、支那の産業發達の趨勢を最も雄辯に物語るものである。現在工業の最も目覺しき發展を呈してゐるのは、上海、天津、武漢、無錫、廣東の五都市であつて、就中無錫の發展特に著しく、今に上海に次ぐ大産業都市となるべき機運を示してゐる。

鑛業

廣大なる支那の地中には、無盡藏の鑛物が埋藏されてゐる。支那は古來鑛業を賤む風があつたが、近時は鑛業獎勵の方針を執つてゐるので、鑛産物の數量は、逐年増加する趨勢を示して

石炭

ゐる。

○石炭 支那の石炭埋藏量は頗る豊富で、世界第一といはれ、就中四川の巴蜀炭田、貴州雲南の雲貴炭田、山西の山西炭田等は殆ど無盡藏と稱すべき大炭田である。現今盛んに採掘されてゐるのは、滿洲の撫順、本溪湖、直隸の開平、灤州、井陘、臨城、山東の嶧縣、淄川、坊子、博山、河南の焦作、江西の萍鄉等である。その中撫順と開平灤州が兩大關であるが、撫順は日本、開平は英國、灤州は支那自ら經營に當り、本溪湖、淄川、坊子の諸炭坑は日支共同で採掘してゐる。因みに専門家の推定では、支那の石炭埋藏量は九千九百億噸以上と稱せられ、日本の埋藏量推定七十五億噸に比し、格段の相違である。

石油

○石油 陝西、四川等に相當豊富な油田があり、新疆省のカンチガン、阿克蘇、庫車、烏魯木齊、甘肅の玉門縣、敦煌縣等にも有望な油田があると稱せられてゐる。但し如上各油田とも單に大體の觀測に止り、未だ現實に採油が行はれてはゐない。唯だ各國が之に着目して窺かに採油權の獲得を競ふてゐる状態である。最近の情報によれば、英人技師が揚子江上流西康省金門江流域で、約三十哩に亘る大石油田を發見したが、その埋藏量の多きこと今後世界の需要に對し、約三百年間供給し得る見込だと傳へられてゐる。

鐵

日本と漢
冶萍公司

○鐵 直隸の龍煙、山東の金嶺鎮、江蘇の鳳凰山、安徽の桃冲、江西の城門山、湖北の大冶、滿洲の本溪湖、鞍山站等が鐵礦の産地として著名である。その他山西、四川、福建等にも有望なる鐵山が多く、それらの鐵が大規模の經營法によつて採掘されるやうになつた曉には、支那は、産鐵國として大なる供給力を示すに至るであらう。就中大冶の鐵山は世界第一と稱せられ、有名なる漢冶萍公司は大冶の鐵を中心として設立されたもので、萍郷の石炭と大冶の鐵を漢陽の製鐵所に送つて、鋼鐵又はビツグアイアンに作る目的から、各地の地名を一字づつ取つて漢冶萍公司といふ名稱を附けたのである。日本はこの漢冶萍公司に總額四千萬圓の資本を貸付け日本の製鐵政策の見地から、八幡製鐵所に鑛石及び銑鐵を供給せしめる契約を結んで居るのであつて、其處で採掘される鐵鑛石は實に日本の製鐵事業の根幹をなす所の重要な關係を持つてゐる。

○アンチモニー 支那はアンチモニーの大産地で、その産額は世界全産額の四割四分を占めてゐる。中部支那及び南支那の各地に産し、就中湖南省がその主産地である。

○金 古代には支那は多量の金を産したが、現代では古來の金鑛が採掘し盡されて、産額が少ない。今日では滿洲吉林省の夾皮溝、東北岔、綏芬河、土們子、太平溝、黑龍江省の漠河、呼

金

鉛

瑪爾河、吉拉林等が金の産地として知られてゐる。蒙古、西藏、新疆等にも金産があるが、未だその調査が確實に行はれてゐない。

○鉛 湖南、貴州、四川、雲南の諸省を主とし、河北省の平泉北部地方、河南、山東、安徽地方にも産する。現時最も有名なのは、雲南省の君山及湖南省の水口山である。殊に水口山の全産量は約四百萬噸と稱せられてゐる。その他熱河の平泉、小黑溝、灤平等では、銀と共に鉛を産する。察哈爾の獨石鉛産、張花鉛産、興和銀鉛産、遼寧省の蓋平化銅溝鉛産等、枚擧するに遑ない程であるが、交通機關の不備と、採掘技術の幼稚なる爲め、採掘量は多くない。

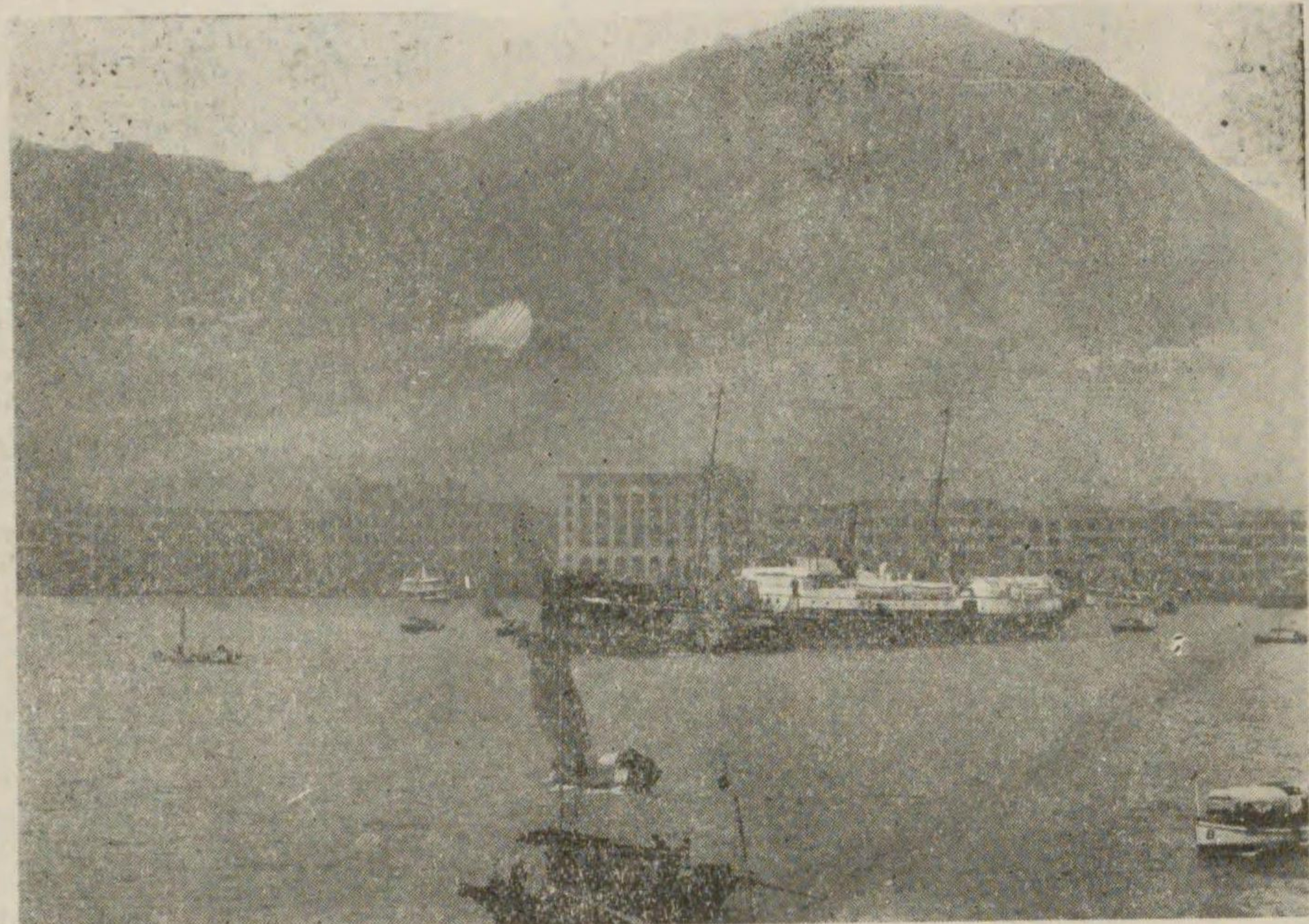
○錫 支那には錫の産額が頗る多い。その主要地は雲南省で、廣西、廣東、湖南の諸省にも錫産の著名なものがある。雲南省は全支産額の九割を占め、主要産地たる箇舊地方には長さ三十哩幅十哩に亘る錫産があるといふから、その埋藏量の大きさが想像される。

○銅 雲南、四川、安徽、甘肅諸省に産し、就中雲南省は世界に於て最も豊富なる銅産埋藏地として知られてゐる。斯く多量の埋藏量を有してゐるに拘らず、交通機關の發達しないのと、採掘法が幼稚なため、現在でも無盡藏なる寶庫があたり放棄されてゐる形で、却つて支那内地で消費される銅は日本や米國等から輸入されてゐる。

錫

銅

貿易市場としての支那



香港英國支那進出の根據地たる香港は、領有當時に僅に二千人に餘りたれど、今日以後十八年、たつたてて大都會となつてゐる。

貿易

支那は英支アヘン戦争の後、我が天保十三年（一八四二年）始めて英國と通商條約を結び、次で一八四四年に米國と通商條約を締結し、爾後順次歐洲各國との通商を開始し、貿易額は累年増加して各國から有望なる貿易市場と目せらるゝに至つた。昭和四年（一九二九年）の對外貿易額（金銀を除く貨物貿易）は二十二億八千萬海關兩に達し、其内輸入十二億六千六百萬海關兩輸出十億一千五百萬海關兩である。之を前年度の貿易額二十一億八千九百萬海關兩に比するも約一億圓近くを増加し、軍閥の抗争等、貿易を阻害すべき内紛の絶えざるに拘はらず、貿易額の増進する所にその偉大なる經濟的潛勢力を示

してゐる。支那が海外貿易のために開放せる市場は別項に擧ぐる通り開港場、開市場、寄航港等百以上に上るが、その内海關を設けてゐるのは上海、大連、天津、廣東、漢口の五大港以下四十九箇所である。今各國對支貿易の大勢を窺ふために昭和四年（一九二九年）度の國別對支貿易額を示せば左の通りである。（單位千海關兩）

| 國別 | 輸入額 | 輸出額 |
|--------|---------|---------|
| 香港 | 一一〇、四二二 | 一七三、五八一 |
| 澳門 | 五、七七〇 | 四、四四二 |
| 佛領印度支那 | 一四、二六三 | 五、七五四 |
| 暹羅 | 四、一四五 | 五、一三六 |
| 新嘉坡 | 一一、〇九六 | 一三、五六〇 |
| 蘭領印度 | 五四、二六二 | 一一、四五九 |
| 英領印度 | 五四、一八〇 | 一、七八一五 |
| 英國 | 一一八、六五七 | 七四、三三七 |
| 獨逸 | 六六、七五三 | 二二、四五八 |
| 和蘭 | 一一、八二六 | 三九、五四三 |
| 白牙 | 二五、七五五 | 四、一三三 |

| | | |
|------|---------|---------|
| 佛國 | 一八、〇四四 | 五六、三一九 |
| 伊國 | 一九、八一七 | 一六、三七七 |
| 露國 | 一八、一四八 | 五五、九八六 |
| 朝鮮 | 一四、八六八 | 三九、七八四 |
| 日本 | 三一九、〇七五 | 二五六、四二八 |
| 日比律賓 | 三一九、〇七五 | 七、四一九 |
| 比律賓 | 五、〇三〇 | 一三七、八三六 |
| 米國 | 二三〇、一〇九 | — |
| 玖瑪 | 三、六五七 | — |
| 濠洲 | 六、〇一五 | 一、一〇八 |

重要輸入品は、綿製品、砂糖、棉花、金屬、米、石油、毛織物等で、煙草、小麥粉等之に次ぎ重要輸出品は豆類を首位として、生糸繭類、獸皮、鶏卵及同製品、茶、食料品、棉花、金屬類石炭、毛髮羽毛羊毛、絹織物等である。

○貿易開市場 外國貿易のために開放してゐる市場は、開港場五十餘、開市場三十餘、寄航港二十餘で、合計百七ヶ所である。その内現に海關の設けられてゐるのは四十九ヶ所である。尙ほその内上海、大連、天津、廣東、漢口は一般に支那の五大港と稱せられてゐる。（括弧

百七ヶ所の開市場

内は省名)

○開港場及税關所在開市場 瓊瑋(黑龍江)、厦門(福建)、安東(遼寧)、廣東(廣東)、長沙(湖南)、芝罘(山東)、鎮江(江蘇)、秦皇島(河北)、重慶(四川)、大連(遼寧)、福州(福建)、杭州(浙江)、漢口(湖北)、哈爾濱(吉林)、琿春(吉林)、宜昌(湖北)、青島(山東)、九江(江西)、瓊州(廣東)、江門(同)、九龍(同)、拱北(同)、龍井村(吉林)、龍州(廣西)、龍口(山東)、滿洲里(黑龍江)、蒙自(雲南)、南京(江蘇)、南寧(廣西)、營口(遼寧)、寧波(浙江)、北海(廣東)、三水(同)、三姓(吉林)、三都澳(福建)、上海(江蘇)、沙市(湖北)、蘇州(江蘇)、綏芬河(吉林)、汕頭(廣東)、思茅(雲南)、大東溝(遼寧)、騰越(雲南)、天津(河北)、温州(浙江)、梧州(廣西)、蕪湖(安徽)、西東(西藏)、岳州(湖南)、

○開市場及寄航港 大沽(河北)、葫蘆島(同)、登州(山東)、濟南(同)、周村鎮(同)、濰縣(同)、吳淞(江蘇)、通州(同)、海州(同)、安慶(安徽)、湘潭(湖南)、萬縣(四川)、公益埠(廣東)、甘竹灘(同)、惠州(同)、桂林(江西)、河口(雲南)、雲南(同)、洛陽(河南)、鄭州(同)、彰德(同)、嘉峪關(甘肅)、奉天(遼寧)、鳳凰城(同)、遼陽(同)、新民屯(同)、通化(同)、鄭家屯(同)、通遼鎮(同)、洮南(同)、鐵嶺(同)、通江口(同)、法庫門(同)、吉林(吉林)、長春(同)、

寧古塔(同)、局子街(同)、頭道溝(同)、百草溝(同)、齊々哈爾(黑龍江)、海拉爾(同)張家口(察哈爾)、多倫諾兒(同)、赤峰(熱河)、綏遠(綏遠)、江孜(西藏)、噶爾渡(同)、恰克圖(蒙古)、庫倫(同)、烏里雅蘇臺(同)、科布多(同)、伊犁(新疆)、塔爾巴哈臺(同)、喀什噶爾(同)、烏魯齊(同)、吐魯番(同)、古城(同)、哈密(同)、

鐵道

支那の鐵道は其の大部分が國有で、外に民有、官民合有、並に外國所有のものがある。しかし國有鐵道といつても大抵は外國の資本と技術とに依つたもので、所謂借款鐵道である。由來、支那の鐵道は列國の對支活動乃至は國際資本戰の目標となり、列國は鐵道敷設權を得て、その開通により、沿線一帶に自國の勢力を扶植するに努め、支那政府の敷設せんとする鐵道に對しても、之に資金を貸付けて其鐵道を擔保に提供せしめ、管理經營の權利も名目だけを支那に與へて、實權は外國人が掌握するといふ有様であつた。世界大戰は支那に於ける列國活動の狀態に著しき影響を及ぼし、戰前に比して現在は餘程變化を呈してゐるけれども、支那の鐵道は常に斯うした見地から特に注意して觀察する必要がある。國有、民營、國際の三種に區別して既

支那の鐵道と國際資本戰



設及び工事中の鐵道名を列擧すると左の通りである。

(一) 國有鐵道 北寧鐵道、京漢鐵道、津浦鐵道、滬寧鐵道、滬杭甬鐵道、道津鐵道、正太鐵道、廣九鐵道、粵漢鐵道、京綏鐵道、隴海鐵道、廣三鐵道、吉長鐵道、四洮鐵道、洮齊鐵道、漳廈鐵道、株萍鐵道、山東鐵道、奉海鐵道、打通鐵道、吉敦鐵道、

(二) 民營鐵道 南潯鐵道、齊昂鐵道、新寧鐵道、潮仙鐵道、汕漳輕便鐵道、大冶鐵道、粵漢鐵道(廣東線)、溪城輕便鐵道、廟兒溝輕便鐵道、大窩溝運炭鐵道、棗臺鐵道、賈汪運炭鐵道、桃冲山鐵道、柳江運炭鐵道、安陽鐵道、箇舊鐵道、天圖輕便鐵道、金福鐵道、此外に短距離間を往復する小鐵道三十餘あれど略す。

(三) 國際鐵道 東支鐵道(露支兩國合辦鐵道)、南滿洲鐵道(日本南滿洲鐵道株式會社經營)、雲南鐵道(一名滇越鐵道)(佛國滇越鐵路公司經營)、廣九鐵道中の一部(英國)、

以上列記の外に、豫定鐵道として擧ぐべきものが甚だ多い。就中、外蒙古鐵道、川漢鐵道、英國が敷設權を有する滇緬鐵道(一名巴大鐵道)佛國資本に依る欽渝鐵道、白耳義財團が敷設權を有する同成鐵道を始め、米國の鐵道借款によりて計畫せる湖南株州より廣東省欽州に至る鐵道等は政治的にも經濟的にも重視すべき大豫定線である。尙ほ支那の鐵道は國際鐵道は暫く別と

して國有鐵道の大部分は、近年内亂が繰返された爲め、恰も軍閥の私有物視され、その収入は擧げて軍資に流用し、軍隊及び軍需品の輸送にのみ用ひて完全なる修理を加へぬ結果、現在では甚しく荒廢の狀を呈し、將來の復興的施設には多大の努力を要するものと觀られてゐる。

日本との通商關係

日本との通商條約が締結されたのは明治四年(一八七一年)であるが、日露戰爭の頃までは貿易額も少く兩國の經濟關係は稀薄であつた。日露戰後、日本が滿洲方面に特殊の地歩を占むるに及び、日本の對支投資殊に滿洲方面に對する事業が起り、それより貿易額も逐年著しき増進を示し、次で世界大戰時代に至るや、兩國の貿易は未曾有の盛況を呈し、我國の對支投資も大に行はれた。歐洲大戰後は支那の内亂の絶間なきと、各國の投資事業も殆ど行はれず、それがためにいさゝか沈衰の狀を呈し來りしのみならず、激烈なる排日運動の影響を受ける等、陰鬱なる状態を辿り來りしが、近時滿洲事變の勃發以來、日貨排斥運動が一層猛烈となつたから兩國の通商關係に一大障礙を來たさんとしてゐる。近年日貨排斥の激烈なりし時代に於ても、兩國貿易狀態が打撃を受けること比較的大ならざりし一事は、偶々以て兩國が如何に密接なる

經濟關係を以て結付けられてゐるかを示す證左とするに足るのである。最近二年間の對支貿易



漢口の埠頭 昭和六年の水災で漢口は長い間、埠頭の地味を失つた。揚子江の口を通過する船舶の交通は、この大國の支那の各地に及ぶ。昭和六年の水災で漢口は長い間、埠頭の地味を失つた。揚子江の口を通過する船舶の交通は、この大國の支那の各地に及ぶ。

表を掲ぐれば左の通りである。(單位千圓)

| 輸出入 | 昭 和 四 年 | | 五 年 | |
|-------|---------|---------|---------|---------|
| | 支 那 | 關 東 州 | 支 那 | 關 東 州 |
| 輸 入 | 三四六、五五三 | 一二四、四七六 | 二〇六、八二六 | 八六、八一四 |
| 輸 出 | 六二、〇六五 | 五三二、〇九四 | 五五、六四六 | 三四九、二八六 |
| 合 計 | 二六九、九七四 | 一六六、三二二 | 一六一、六六七 | 一一一、四〇五 |
| 支 那 | 二六九、九七四 | 一六六、三二二 | 一六一、六六七 | 一一一、四〇五 |
| 關 東 州 | 六〇八 | 六〇八 | 五三八 | 五三八 |
| 香 港 | 六〇八 | 六〇八 | 五三八 | 五三八 |
| 合 計 | 四三六、九〇四 | 二八三、六一〇 | 二八三、六一〇 | 二八三、六一〇 |

我國より輸出する重なるものは、小麦粉、砂

糖、絹織物、綿織物、莫大小類、帽子、紙類、陶磁器、硝子及同製品、鐵、銅、機械類等で支那

から我國への輸入品の重なるものは、豆類、小麦、胡麻子、菜子、牛肉、鶏卵、食鹽、煙草、皮類、獸毛、棉花、苧麻、鐵礦、銑鐵、豆粕、油粕、麩、包蓆等である。

○在留邦人 支那本部に五萬五千七百〇八人、關東州に十萬七千三百六十四人、滿洲に十萬八千八百三人、香港に千六百三十人、澳門に二人、總計二十七萬三千五百〇七人で、在留者の數は年々約一千人内外づゝ増加してゐる。此の外に支那全土を通じ、朝鮮人が五十九萬九千九百四人、臺灣人が九千五百三十六人在留してゐる。因に外國人の支那在留數は、昭和四年末に於て十七萬三千六百三十三人であつた。

尙ほ支那本部に在留する邦人の職業別を見ると、會社銀行商店の事務員店員等が最も多數を占めて八一〇二人を算し、次は物品販賣業二〇一五人、官公吏及び雇員一二〇九人、貿易商六七〇人(この中には店員社員を含まない)、教育關係者八一一人、漁業製鹽業者一八〇人、新聞記者通信員著述者二二八人、陸海軍人一一四人等が中堅をなし、その他の主なる職業は次のやうな數字を示してゐる。

- 農耕園藝畜産業二七、森林々産物業一六、窯業二〇、金屬工業八九、機械機具製造業三二、化學工業三九、織維工業二八、洗張染色洗濯業九二、紙工業一一、皮革骨角羽毛品類製造業

在支日本
人數

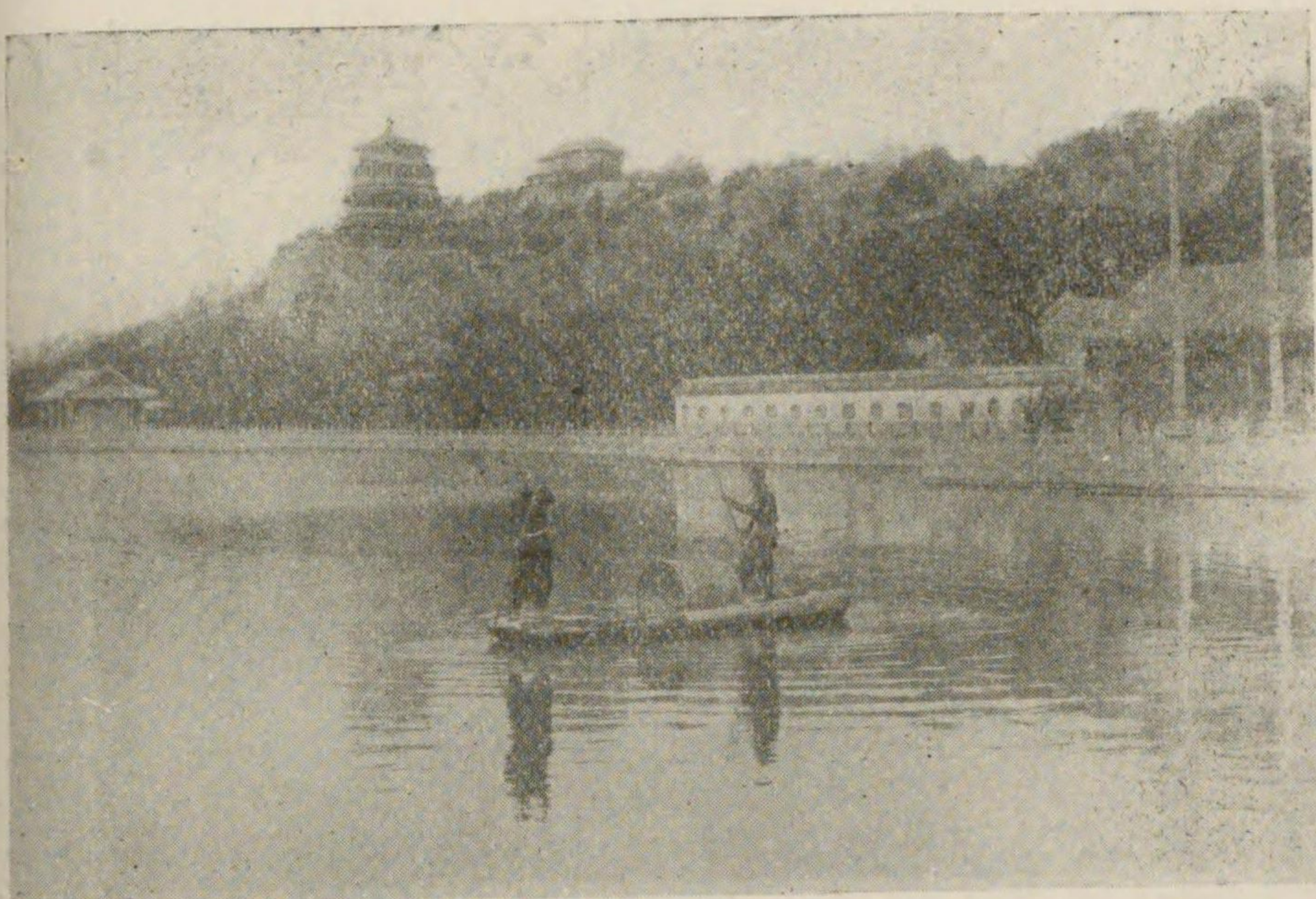
三六、木竹類工業三八、飲食嗜好品製造一九二、被服裝身具製造二四三、土木建築業一三七、大工左官ペンキ職一二五、製版印刷製本業七四、瓦斯電氣業四六、其他の工業五四、金融保險業九一、媒介周旋業八八、旅館料理貸席及藝妓業四八九、藝娼妓酌婦一六五六、理髮業浴場業二七八、其他の商業八八〇、船舶從業者二八五、運輸業一〇〇、宗教關係者一〇七、醫務に關する業八〇九、法務に關する業三〇、美術家音樂家寫眞業一四三、其他の自由業二五二、其他有業者八〇一、學生練習生九〇六。

○在留邦人分布狀態 支那本部在留邦人は五萬五千七百〇八人にして、其の地方別分布狀態は天津領事館管内七千二百四十二人、青島總領事館管内一萬四千五百二十一人、同總領事館坊子出張所管内三百十六人、濟南總領事館管内一千七百二十八人、同博山出張所受持管内五百十五人、同張店出張所受持管内三百五十四人、芝罘領事館管内三百二十九人、上海總領事館管内二萬六千四百八十人、南京領事館管内四百七十二人、蘇州領事館管内百七十七人、蕪湖領事館管内九十三人、杭州領事館管内三十一人、九江領事館管内六十八人、成都總領事館管内二十三人、漢口總領事館管内二千〇八十六人、重慶領事館管内九十人、沙市領事館管内二十人、宜昌領事館管内六十八人、長沙領事館管内百二十五人、福州總領事館管内三百三十九人、廣東總領事館管内三百九十六人、厦門領事館管内三百四十七人、汕頭領事館管内百九十一人、雲南領事館管内二十七人、香港總領事館管内千六百二十二である。

主なる會社商店

○主なる會社商店 主要の都市に於ける主なる我國の會社、商店及支店、出張所は○北平に大倉洋行、橫濱正金銀行、三井物産會社、三菱合資會社、滿鐵支店あり、○天津には白河船會社本店、日本棉花會社支店、東洋棉花會社支店、中華燐寸會社本店、朝鮮銀行、大倉洋行、大阪商船、日清汽船會社、橫濱正金銀行、大連汽船會社、國際運輸會社、近海郵船會社、三井物産會社、三菱商會社等の支店又は出張所、海運業の東興洋行、紡績業の大福公司、貿易業の三昌洋行及三陽洋行、藥業仁丹公司、煙草業清善洋行等を始め大小の邦商が多い、○青島には青島輸出牛取引會社、華祥燐寸會社、日華蠶糸會社、山東窯業會社、膠澳電氣公司、魯大鑛業公司、青島製粉會社等の各本店、日本郵船、日本棉花、東洋棉花、朝鮮銀行、正金銀行、大日本麥酒會社、三井物産、三菱商會等の支店又は出張所がある、○上海には日清汽船會社、日華紡績會社、寶山玻璃廠會社、東亞製麻會社、東方製氷會社、東華紡績會社、豐田紡績會社、同興紡績會社、中華企業會社、菱華倉庫會社、大日本紡績會社大康紗廠、内外綿會社、公大第一紗廠、同第二紗廠、公興鐵廠會社、裕豐紡績會社、明華糖廠、上海印刷會社、上海紡績會社

上海製造絹糸會社、上海倉庫信託會社、上海銀行、等の各本店、住友銀行、住友合資會社、精



北平の萬壽山、湖明と稱し、山上の塔は佛香閣である。乾隆帝の時、天然の地形を利用して建築した。昆明湖は北平の名所として、世界的に有名な湖である。

版印刷會社、三菱銀行、三菱商事會社、三井銀行、三井物産會社、滿鐵、富士製紙會社、山下汽船會社、山下鑛業會社、臺灣銀行、大連汽船會社、大日本麥酒會社、橫濱正金銀行、大倉洋行、東京電氣會社、東京海上火災保險會社、東亞興業會社、日本棉花會社、日本郵船會社等の支店がある、○漢口には漢口銀行、日華製油會社、泰安紡績會社の各本社、正金銀行、三井物産、三菱商事、臺灣銀行、日清汽船、日本棉花會社等の支店がある。

○大連は滿蒙に於ける門戸たる關係上、日本の會社商店が多く、南滿洲鐵道株式會社を始めとし、滿洲正隆、大連商業、大連庶民、大連興信

滿洲諸都市に於ける日本の主なる會社商店

各銀行本店、橫濱正金、朝鮮、三井、臺灣、各銀行支店出張所、南滿洲瓦斯、昌光硝子、大連窯業、滿洲棉花、滿洲船渠、福昌革工、日清製油、大連汽船、金福鐵路、國際運輸の各會社本店、三井物産、三菱商事、東洋拓殖、日本棉花、東洋棉花、大阪商船、第一生命保險各會社支店、三越吳服店支店、大倉商事、日本郵船、山下汽船、日本生命、帝國火災各會社出張所等がある、○奉天には奉天取引所、正金、朝鮮、滿洲正隆各銀行支店、東亞勸業、東省實業、奉天製麻、南滿洲製糖、滿蒙毛織、奉天窯業各會社の本店、東洋拓殖、國際運輸、東亞煙草各社支店、三井物産、東津棉花、大連火災、日本生命の各社出張所等がある、○哈爾濱には哈爾濱銀行本店、正隆、正金、朝鮮各銀行支店、北滿製油、北滿興業の各社本店、國際運輸、東洋拓殖三井物産各出張所がある、○長春には長春實業銀行、日華金融、長春窯業、長春取引所の各本社、滿洲正隆、朝鮮、正金各銀行支店、國際運輸、北滿電氣、南滿瓦斯、吉林燐寸の各支店がある。

○日本人商工會議所 支那に在留する日本商工業者によつて組織されてゐる商工會議所は左の各地にある。

哈爾濱、長春、鐵嶺、奉天、安東、大連、營口、天津、青島、上海、漢口

○人材養成機關 上海に東亞同文會經營の同文書院、哈爾濱に日露協會經營の日露協會學校があつて將來東亞方面に活動すべき人材の養成に努めてゐる。

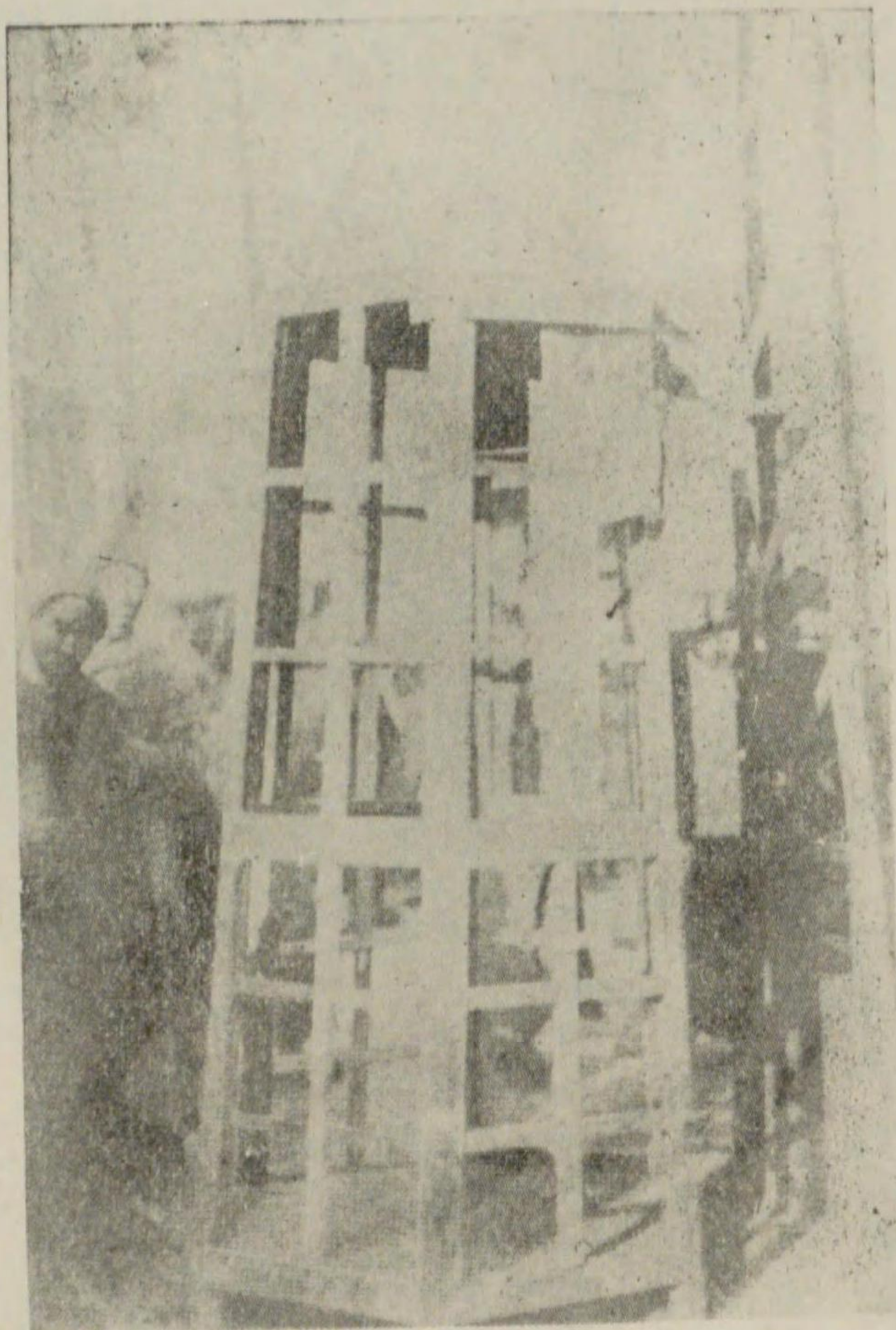
支那の排日運動

日支の國際關係に於て、支那の國民は、何かといへば直ぐ排日運動を起して、日本を威迫するものが、近年の常套手段となつてゐる。排日運動は其の以前も無いでもなかつたけれど、特に著しくなつて來たのは、民國四年（一九一五年）我が大隈内閣の當時所謂二十一箇條の締結された際で、當時條約締結の日たる五月七日を國恥記念日として激烈なる排日運動を試みて以來、漸次その運動は支那の民衆運動たる形を取るに至り、民國八年五月四日北京大學の學生を中心とする排日運動者が所謂五四運動の端を開いて亂暴狼藉を働き、曹汝霖の邸に闖入して前の駐日支那公使章宗祥に負傷せしめたり、市中の商民の店頭にある日本製の商品を街頭に持出して焼棄するに至り、この運動は甚しく狂暴性を帯ぶるやうになつた。それ以來、支那の政府當局は、對日關係に於てこの排日運動を利用して日本の對支態度を牽制せんとする方策を執るやうになり、又學生其他の遊民仲間には、排日運動を職業として「日貨排斥」「提唱國貨」をスロー

執拗にし
て無法な
る排日運
動

運動の擴
大

ガンに、或は救國基金を商工業者から出捐せしめて、自己の懷を肥やす手段とするやうな者をも多數に生ずるに至つた。この運動は單に支那内地に止らず、南洋方面の所謂華僑をも動かすに至り、日本の對外貿易に



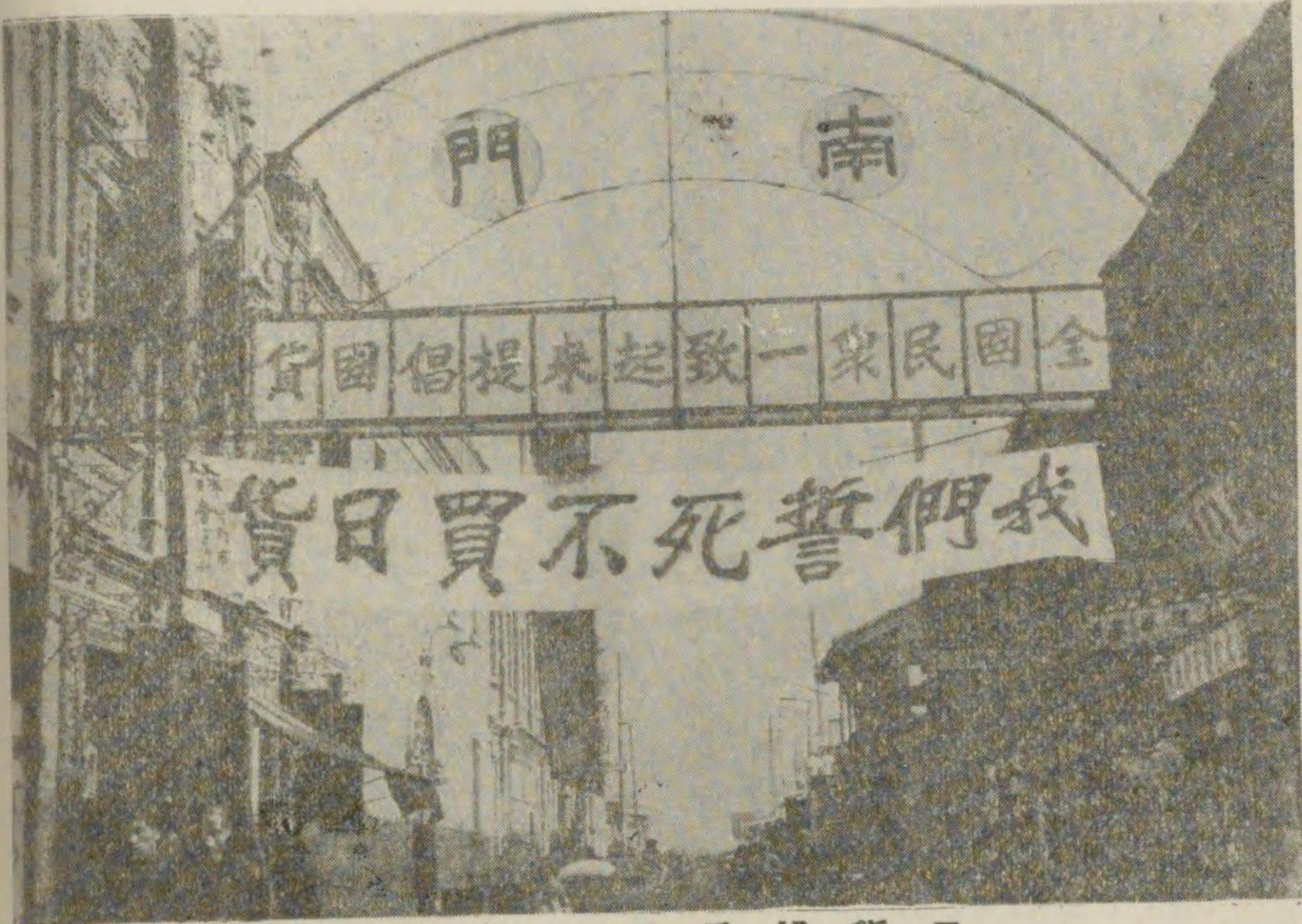
日貨排斥の用ゆる刑具 支那人は國民の公敵としてこのことを購せ入に

に至り、日本の對外貿易には尠なからざる影響を與へたのである。田中内閣の時代所謂對支積極方針が唱へらるゝや、支那の排日運動は反射的に一層險惡の度を加へ、これによつて我が國の對支交渉は暗礁に乗上げたやうな状態になつたこと

もある。排日運動の初期に於ては、支那にある英米の宣教師等が背後より煽動し、運動資金の提供に努め、救國熱禱會、國恥記念禮拜など、稱する集會を催し、英米の親善すべきを説くと共に、日本の排斥すべきことを叫ぶといふ有様で、其後彼等も稍反省する所があつたけれども

支那全體に擴がる排日氣分は、小學校用の教科書其他あらゆる手段を用ひて鼓吹され、東洋平

暴虐鑿く
なき支那
の行動

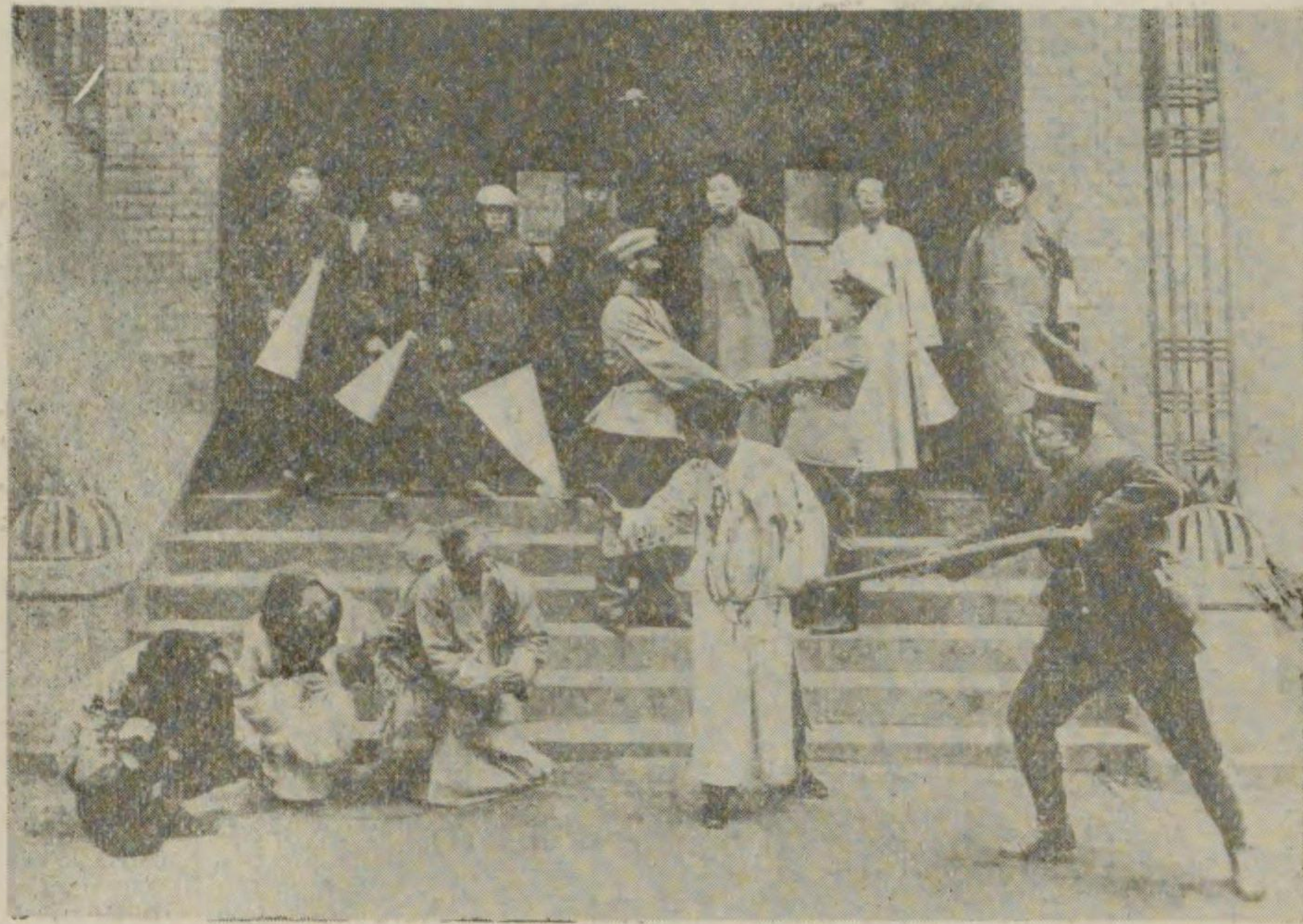


日排貨排斥ポタス

和の大局よりする日本の對支政策は全く歪められた形に於て、支那國民の心に映することゝなつたのである。而して日支親善を基調として進むところの日本の對支政策は、近年却つて支那官民の侮日的態度を増長せしめ、支那本部は勿論、滿洲方面に於ても事毎に悪性なる排日行動となりて現はれ、日本の權益、在留邦人の安全は脅されて、事態は甚だ憂慮すべき形勢を呈するに至つたのである。

遂に昭和六年に至つては滿洲の萬寶山に於ける在留鮮農に對する無法なる排斥に端を發して、朝鮮に於ける支那人排斥騒ぎとなり、或は滿蒙視察の途にある我が參謀本部の中村少佐の一行が、支那の正規兵に虐殺せらるゝ如き暴虐極まる事件を發生し、更

中村少佐
一行虐殺
さる



日排貨排斥組だん劇 支那では日貨排斥の宣傳に凡ゆる
段手を用ひ、これには芝居によつて民衆に排日を吹き込
めんとするもの

に奉天の支那軍隊が我が滿洲鐵道の破壊を企つるに至り、隱忍自重、日支の親善に努め來れる我が國をして自衛權の行使を餘儀なくせしむることゝなつたのである。

斯の如き事態を發生するに至るまでの排日運動を一瞥すると、萬寶山の鮮農排斥事件が起つて以來、支那の排日運動者は、國民黨々部と合流して各地に反日會を組織し、辛辣なる日貨處分法を定め、検査隊なるものを設けて頻々と日本貨物を差押へ、之を沒收せしめ、五千元以上の日貨輸入者はその面上に賣國奴の刺青を施され、二千五百元以上は捕縛して檻の中に監禁し一千元以上は三日間街頭に曝すといふ如き制裁を加へ、一切の日貨取引を禁止する方針に出でゝゐるのである。南京政府は我國の抗議に對し

表面この運動を取締るべきことを言明し乍ら、事實はこれを黙認し又は暗に使喚しつゝあるのは諸般の事情に徴し争ひ難き所であつて、何等反省の状が認められないのである。

凡そ國際間の通商關係に於て、一國の官民が策應して對手國と經濟的斷交を企てる如きは、その不法なるはいふまでもなく、政府の意を受けて國民が不法なる商品排斥を行ふは、その性質上兵力を以て對手國を脅迫すると何等異なる所はなく、對手國は抗議によつて解決を見ざる以上、斷乎として實力に訴へ、その不法を膺懲する當然の權利を有するのである。

山東と日本の關係

明治三十年、獨逸は一人の獨逸宣教師が、支那の暴徒に殺害されたのを口實として、山東省の膠州灣を占領し、その翌三十一年、支那を強要してその地方の租借權(期間九十九ケ年間)及び山東省内の鐵道敷設權、鑛山採掘權を得た。而して世界大戰起るに及び、獨逸は膠州灣に軍備を整へ、こゝを根據地として盛んに艦艇を出沒せしめ、英國の商船を脅し或は我が海上權を妨害した。よつて我國は日英同盟の誼と東洋平和の見地より、軍艦を日本及び支那の海洋より退けること、膠州灣租借地を支那に還付する目的を以て我國に交付することを要求したが、獨

獨逸の山東
東經略と
日本の義
戰

逸が之を肯かざる故、遂に宣戰を布告して攻撃を開始し、大正三年十一月占領したのである。

而してベルサイユ媾和會議に於て、支那は世界大戰中獨逸に宣戰したとの理由の下に、獨逸から直接山東の還付を受けんとしたが目的を達せず、我國は膠州灣及び其他山東省に於ける獨逸の有する一切の權利を繼承したのである。其後大正十年華盛頓會議開かるゝに及び、我國は前の宣言に基き、山東を支那に還付し、支那は膠州灣を開放し、山東鐵道を我國より讓受け、鑛山は兩國で經營することになつた。明治二十八年日清媾和の後、露獨佛の三國は我國に干渉して遼東半島を支那に還付せしめ乍ら幾程もなくして此等の三國は相率ゐて支那の要地に占據するの暴舉を敢てしたもので、山東は即ち斯の如き經緯の下に支那の手に復することゝなつたのである。

歴史

(一)

支那の歴史は今より五千餘年前、漢族が葱嶺附近の地より興つて黄河沿岸に移住した頃から始まる、それより前、黄河、揚子江の間には苗と稱する種族が占據してゐたが、漢族の興るに

五千年の
古國

及んで南方に驅逐され、漢族によつて國家の形體が成り、文字が作られ、舟車が製せられて支那文明の基を開いた。この古代文明を建設した最初の王を黃帝と稱し、黃帝より二代を経て聖王堯が出で、民治に力を致し、次で賢明なる舜が王位を承け、中央地方の官制を確立して政治



明陵の石人 明成祖の陵は荒れ、北の城縣に傳へずとんへて昔くしがみ
明の陵は荒れ、北の城縣に傳へずとんへて昔くしがみ
明成祖の陵は荒れ、北の城縣に傳へずとんへて昔くしがみ

組織を整へ、舜は更に治水に大功を擧げた禹に位を譲り、禹は都を安邑(山西)に奠めて國號を夏と稱した。禹王死するや、國民その徳を慕ひて王子の啓に位を繼がしめたのが、王位を子孫が世襲する慣例を開いた發端である。後四百餘年にし

王位世襲の發端

て桀王の代となり、政亂れて商の湯王に滅ぼされ、湯王は都を河南に遷して子孫王位を相傳へ九世の孫盤庚が都を殷に遷したので、それ以來國號を呼んで殷といつた。盤庚の後十代を経て

春秋戰國時代

紂王に至り、暴政を極めたので、周の武王が起つて之を滅ぼした。(西曆紀元前一二二〇年頃) 周の武王の後長く泰平を保つたが、幽王の時代に至つて政衰へ、犬戎の侵略を受けて遂にその弑する所となつた。幽王の子平王は犬戎の勢に抗しかねて、都を洛邑(河南)に遷したので、それより後を東周の時代と稱する。その頃より群雄諸所に割據して覇を争ひ、所謂春秋五霸の時代となり、凡そ三百年の間、齊、晋、楚、吳、越の諸公迭みに勢を張つて支那史上に興味ある波紋を描いた。春秋時代に次いで所謂戰國の時代となり、二百年の間天下大いに亂れ、秦、楚、燕、齊、韓、魏、趙の七國が互ひに割據して勢ひを競ふた。後人の能く口にする合従の策連衡の策、或は遠交近攻の策といふ如きものは、即ちこの時代に應用された策略で、この間に於ける政治乃至軍事の事蹟は後代の支那國民に著しい影響を與へてゐる。當時秦は遠交近攻の策によつて周の王室を滅ぼし、更に反間の計によつて六國の君臣を離間し、順次に諸國を滅ぼして遂に天下を統一したのである。この統一の大業を成したのが始皇帝で、封建制度を廢して郡縣制度となす等、政治上の改革をしたが、新政を誹謗する者あるを憤つて、政治に關する書籍を焼き捨て、書生を坑殺する等の暴政をも敢てした。

始皇崩じて天下は再び亂れ、項羽、劉邦の如き英雄が現はれて秦は僅に三代十五年にして滅

併呑し、空前の大帝國たる元の時代となつたが、元の諸王諸汗の相争へるに乘じ、明の太祖朱元璋が支那本部から蒙古族の勢力を驅逐し、明の時代となつた。

明の神宗の時に當り、愛親覺羅部の弩爾哈赤が、長白山の麓から興つて先づ滿洲に勢を振ひ、次いで明の征討軍を撃破して滿洲から支那本土に侵入し、都を北京に奠め、遂に明を滅ぼして支那全土を統一し、國號を清と稱した。時に我が紀元二千三百年代である。

(一)

清の初めは國威隆々、臺灣、蒙古、西藏を併せ、暹羅、安南、緬甸に朝貢させ、頗る強大の國となつたが、十八世紀の頃より歐洲の勢力は漸次東洋に及び、天保十年(一八三九年)阿片問題で英國と戦ひ、遂に香港を割讓したのを發端として、長髮賊の亂には英佛と戦端を構へて天津北京を攻陥せられ、媾和條約によりて牛莊、漢口、芝罘等の七港を開き、且つ償金を出して局を結び、一方北より來れる露西亞のために黒龍江左岸及び沿海州を奪はれ、且つ中央亞細亞方面に於ける勢力をも露西亞のために一掃されてしまつた。又明治十七年には東京事件で佛蘭西と戦つて敗れ、佛の東京占領を承認してこの方面に於ける宗主權を失つた。

明治廿七八年には日本と戦つて大敗し、賠償として遼東半島を日本に割讓したが、獨露佛の三

清朝の盛
衰

滿洲に於
ける日露
の交戦

國干涉により之が還付を受け、其後國際關係は益々多事多端となつて、英佛露獨の勢力は滔々として支那に流入し、各種の利權並に土地の租借權を此等諸國に與へ、更に明治三十三年には義和團と稱する匪徒が起つて北京に侵入し清軍と合流して列國の公使館を攻撃し、日、英、米、露、佛、獨、諸國は聯合軍を北京に進めて之を撃攘し、支那より償金四億五千萬兩を出さしめて媾和條約を結んだ。

越えて明治三十七八年には、日露兩國が滿洲に於て戦ひ、日本の義戦により清國は露國の滿洲侵略より免るゝことを得た(これについては滿洲の歴史參照)。清國はこの頃に至り漸く多年の迷夢より覺め内政の改革に志したが、病既に膏肓に入つて改革の目的を達し得ず、殊に各國互ひに利權を争つて支那を牽制するため、國歩益々困難に陥るのみであつた。しかし新に憲政を施かんとして準備する裡に明治四十一年西太后崩じ、且つ日を同ふして光緒帝も毒弑され、幼年の宣統帝が位に即き、攝政醇親王は國論に鑑み五年後に國會を開くことを約した。然るに明治四十四年十月湖北省武昌に革命の亂が起り、所在これに響應し、頻りに官軍を破つたのみならず、同年十二月共和政府を南京に組織し、中華民國と號し、孫文を擧げて臨時大總統とした。清廷は袁世凱をして時局を處理せしめたが、大勢の赴く所如何ともし難く、遂に宣統帝は共

清朝の覆
滅、中華
民國の出
現

勢力が増大し、段が再び總理の地位に復することゝなつた。

(三)

段祺瑞一派の政權獲得

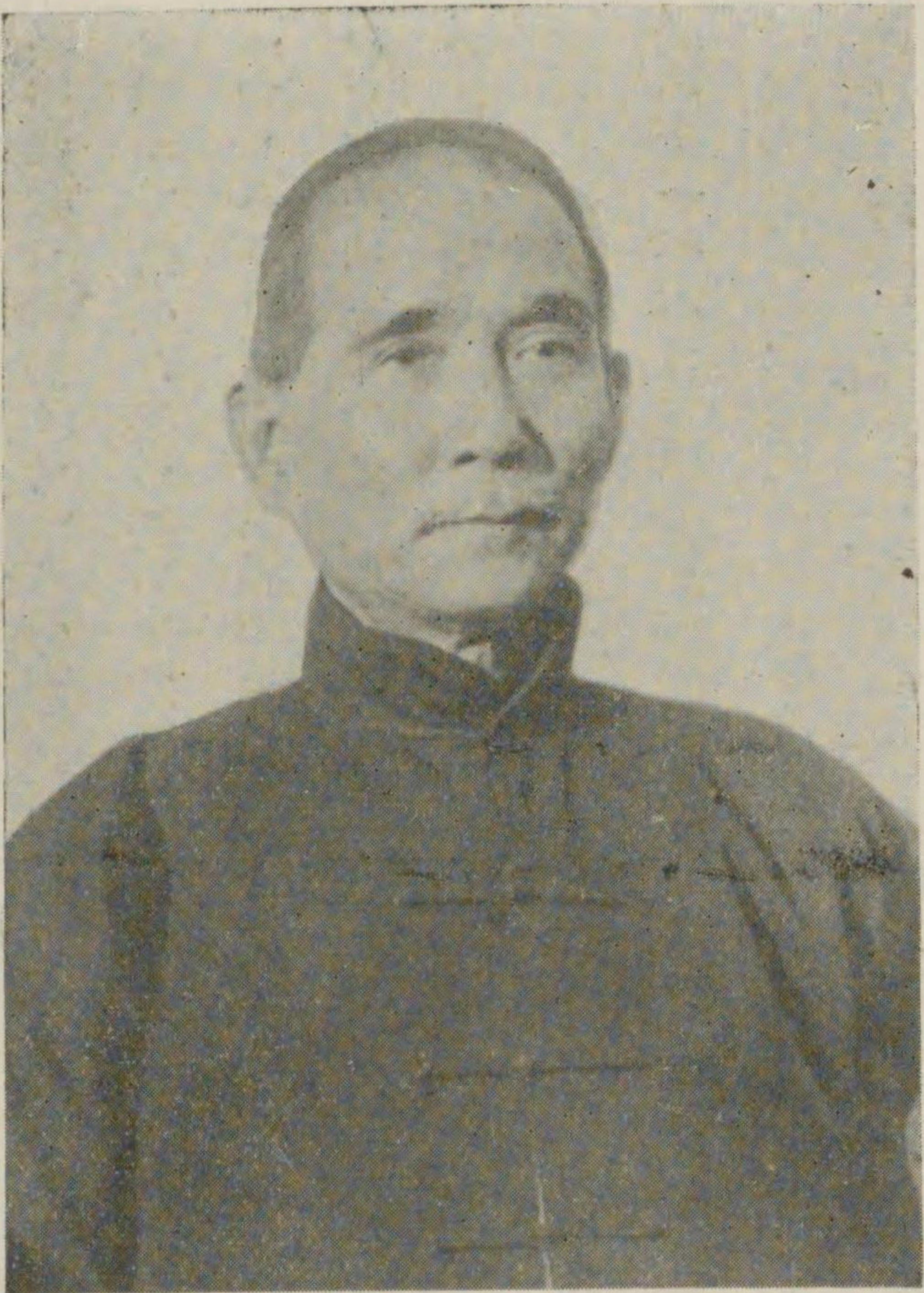
段祺瑞が再び總理の地位を獲得するに至るまでの間、彼の股肱として隱に陽に最も活動したのは徐樹錚であつた。徐樹錚は奉天の張作霖の武力漸く強大となれるを利用し、之を自派の勢力と併せて大總統馮國璋に壓迫を加へ、馮がその地位を保ち難くなつて野に下るや、自派の勢力を代表せる徐世昌を立て、大總統の地位に就かした。しかも政治の實權は段祺瑞の手中に收め、舊約法と國會とを無視し段をして思ふ儘に獨裁權を揮はせたのである。此時に當り最初段等一味の安福派に好意を寄せてゐた張作霖は、徐樹錚のいふがまゝになつて居れば徒らに利用されるだけであるのを悟つて、遂に手兵を收めて奉天に歸り、名を北滿防備に借りて全く徐樹錚と手を切つてしまつた。馮國璋の下野によつて勢力を失墜してゐた直隸派の曹錕や、吳佩孚は、段の勢力日に盛んなるを見て心平かならず、再び天下を自派の手中に奪回すべく用意おさくゝ怠らなかつたが、北京政界から直隸系の分子を排斥せんとする段派の策動漸く顯著となるや、遂にたまり兼ねて民國九年七月兵を擧げて安福派に戦ひを挑み、所謂安直戦の開始となつた。戦ひは毎に直隸派に有利に展開して安福派は遂に慘敗の憂目を見、さしも勢威を揮つた

直隸派の反抗

南方國民黨の動靜

段祺瑞一派は北京政界を失脚して、曹錕、吳佩孚が勢威を揮ふ時代が出現した。

之より前、南方に於ける國民黨は民國六年八月廣東に非常國會を組織し、同年九月一日廣東



孫文 孫文は前日に於て、北京から南に遷り、廣州に居る。其の革命の理想は、中山の革命の理想と同一である。孫文は、廣州に居る。其の革命の理想は、中山の革命の理想と同一である。

軍政府組織、官制元帥府會等を發布して孫文を大元帥に推戴し約法と國會の擁護をスローガンに段派の獨裁政治を非難攻撃しつゝあつたが、

之に對して廣西の陸榮廷が反對の態度を取り、反孫分子を糾合して軍政府を乗取らんとし、南方の結束が亂れて容易に收拾し難き情勢に陥つたので、孫文も一時日本に亡命するの餘儀なきに至つた。しかし北方に於て安直戦の演ぜられつゝある間に形勢も漸く變化し、廣東の陳炯明

張作霖の
野望吳佩孚の
賄選

は福建方面から軍を進めて陸榮廷を攻め、民國十年九月廣西を攻略した。茲に於て日本亡命中の孫文は急遽廣東に歸り、廣東新政府を組織し、國民黨を更生せしめて、民國十一年四月北方討伐の旗幟を高く掲げ、自ら軍を督して湖南を收め江西へと進撃した。又奉天に蟠居してゐた張作霖も、北方の戦亂を望み見て中央に力を伸ばさんとする野望を起し、機會もあらば吳佩孚を屠つて北京の政權を獲得せんと待ち構へてゐたが、吳佩孚が南方軍を邀へ撃つべき準備を整へつゝある折柄、張作霖は果してその背後を襲ふべく直隸の野を指して軍隊を繰出して來たので、吳佩孚は兵を轉じて之に立向ひ、茲に第一次奉直戦が開始された。吳佩孚軍は張作霖の軍を迎へて善く戦ひ、忽ちにして之を撃破し、張作霖をして再び奉天に退却するの餘儀なきに至らしめ、勢に乗じて軍を南方に進め、河南の洛陽に據つて天下に號令し、その餘威を驅つて民國十一年六月大總統徐世昌を追ひ、黎元洪を再び大總統の地位に就かせ、更に幾程もなくして武力を以て大總統の印璽を黎の手から奪ひ、國會議員に黃白を散じて民國十二年十月十日豫定の筋書通り曹錕を大總統に祭り上げた。これが有名なる吳佩孚の賄選である。

だが曹錕、吳佩孚が斯る無理押の方法によつて天下の權を握り、自ら直隸派の黄金時代を謳歌してゐる間に、天下の輿論は翕然として賄選批難の烽火を擧げるに至り、特に反直隸派たる奉

第二次奉
直戦と馮
玉祥の裏
切

天派、國民黨、浙江派等の諸勢力は之を動因として頓に結合の機運を促進し、賄選反對、直隸派排撃といふ同一旗幟の下に歩調を同ふして動き出した。偶々民國十三年九月江蘇浙江に戰亂起るや、豫て直隸派に對する雪辱の機會を待つてゐた奉天の張作霖は、浙江の盧永祥を援助すると稱して兵を山海關に進め、内實は直隸軍に向つて敵對行動を執るに至つた。吳佩孚もその意を察して之に當るべく戰備を整へ、同年十月初旬には山海關の要害を挾んで愈よ第二次奉直戦の砲火が交へられることゝなつた。戰機漸く熟して兩軍が雌雄を決すべき大激戦が開始さるべく見えた瀬戸際に、直隸軍の第三軍總司令たる馮玉祥は突然反旗を翻へし、十月二十二日の黎明北京でクーデターを行ひ、大總統曹錕を監禁し、自己の軍隊を以て北京を占領してしまつた。吳佩孚に取つては實に寢耳に水の急變である。彼はその飛報に接するや、奉天軍と對峙せる兵力を割いて馮玉祥討伐に向はしめたが、形勢の急變に驚いた軍隊は忽ち士氣を沮喪し、殊に腹背に敵を受けて苦戦に陥り、到底如何ともし難き壊滅狀態を呈して來たので、吳佩孚は戦ひを斷念し天津から漢口へと落ち延び、直隸派は忽ち没落してしまつた。

直隸派が没落して次ぎに現はれたのが張作霖、段祺瑞、孫文の三角同盟である、之に直隸派覆滅の功勞者たる馮玉祥が加はつて政局を收拾することゝなり、三派聯携善後會議を開いた結

臨時執政
政府の成
立

果、大總統に代るべき臨時執政を置くに決し、十一月二十四日段祺瑞が臨時執政に任せられ、北京に臨時執政々府が成立した。

當時支那の局面は、孫傳芳が江蘇浙江を根據として勢力を養ひ、唐繼堯が雲南にあつて軍閥的の勢力を扶植し、四川廣西方面は無政府状態であつた。而して對外關係に於ては臨城土匪事件、鐵道列國管理問題、對露外交問題等幾多の國際的難問題が紛糾してゐた。この時に當り、北京臨時執政々府をめぐる各巨頭は時局の重大なることを悟り、兄弟牆に闘ぐの秋にあらずとなし、努めて協調の態度を守らうとするの風があつたが、何分にも孫文は遠く廣東にあつて北京に出でず、舊式政治家段祺瑞を中心として北方軍閥の雄たる張作霖と露國系の梟雄馮玉祥と對立してゐるのでは、所詮圓滿なる調和を保つことが不可能であつた。流石の段も思案に窮して、廣東に在る孫文に北上を促した。招電に接して孫は北上の途中、我が神戸に立寄り、十一月二十四日神戸高等女學校で「大亞細亞主義に就て」と題する一世一代の大獅子吼をした上、天津に入つたが、同地で病遽かに革り、そのまゝ北京に入つて善後會議に臨まんとしたが容體次第に増悪し、民國十四年三月十二日北京の旅舎で所謂「總理の遺囑」を同志に遺して永き眠りに就いた。時に年六十であつた。

革命の父
孫文逝く

(四)

張作霖の
擡頭

北京で開かれる筈であつた段、張、孫、馮四巨頭の善後會議は孫の死によつて自然消滅となつた、殊に孫文の死は南方國民黨が中心人物を失ひ一時結束を弱められる形となり、一方段祺瑞は昔日の如き勢力を有してゐない爲め、中央兵馬の權はおのづから張作霖の手中に歸するこゝとなつた、張に取つては實に待ち構へてゐた絶好の機會が到來したのである。斯く張作霖の目覺ましき擡頭を眼前に眺めては、南方國民黨も亦之に對抗して天下を争はなければならぬ。南北對抗の勢はこゝにおいて忽ち激化することゝなつた。その活舞臺へ國民黨を代表して躍り出でたのが蔣介石である。

孫文の遺囑には「革命尙未成功、同志仍須努力」とあり、國民黨の同志はこの遺囑に基づき、黨軍結束一致の下に北伐に死力を盡すことゝなつた。「打倒軍閥」「打倒帝國主義」はその標語であり、「以黨治國」「以黨救民」はその標識であつた。而してその思想的根柢をなすものは孫文の革命理論たる所謂三民主義である。三民主義とは民族主義、民權主義、民生主義を併稱したもので、民族主義といふのは支那民族の自主獨立に關する實行方法を指示したもの、民權主義とは人民の政治的平等を基本とする人民の直接政治管理の方法を指示したもの、民生主

孫文の三
民主義

陸海軍大元帥就任式を舉行し、爾來儀禮萬端帝王の如く振舞ふに至つた。

之より前、南方の廣東では國民革命軍が出師の準備を整へ、民國十五年七月には三萬の先進部隊が衝天の意氣を示しつゝ、廣東を出發して北伐の途に上り、到る處北軍を壓迫して忽ち揚子江沿岸に進出し、九月には漢口を占領し、十月には武昌を乗取り、翌十六年早々には江南諸省を收め、三月二十四日北伐第一軍と第二軍とは南京に入つたが、節制を缺いた軍隊は我が民留民に對し、掠奪慘虐の暴舉を演じて所謂南京事件を勃發した。

之より前、廣東國民政府内の共產黨系統である徐謙、宋子文、宋慶齡(孫文未亡人)及び顧問ボロチン(露人)等は南方軍進出の後を追ふて武昌に來り、ボロチン等が中心となつて武漢政府を作り、蔣介石を中心として作つた南京政府とは對立的の状態にあつた、共產系が民國革命の指導權を國民黨から奪取せんとする計畫あるを察知した蔣介石は、先づ上海に於て共產黨彈壓のクーデターを行ひ、共產系と全然手を切つてしまつたが、しかも尙ほ共產系の策動によつて後方が攪亂されさうな兆候があつたので、一時北伐軍の進撃を中止して之に備へる必要があつた。北方でも張作霖が赤賊討滅を高唱し、四月六日北京ロシア大使館に手入をして共產黨の鼻祖李大釗を始め鄧文輝、謝伯命、姚彥等二十名を捕へて死刑に處し、北京天津を中心とする

南京事件

共產黨に對する彈壓

共產黨を根絶しようとしてゐたから、共產黨は南北兩地に於て益々不利の状態となり、遂に同年夏武漢政府部内に内訌を生じ、共產黨系が没落して國民黨左派の者が之に代るに及び、やがて南京政府との合體運動を起し、當時南京政府が北伐のために多大の經費を注ぎ込んで財政難に苦んでゐた上に、南京事件の如き外交問題をも惹起し、蔣介石の立場の頗る苦しくなつてゐるに乘じ、蔣介石排斥の火の手を煽り立てた。この作戰が奏功して八月中旬蔣介石は國民革命軍總司令の職を辭し、野に下つて日本へ渡つた。蔣の下野につれて國民黨の領袖も下野したので、南京政府は事實に於て解體した有様となつた。

南京の結束亂れたるに乘じ、張作霖は張宗昌の山東軍と褚玉璞の直隸軍及孫傳芳軍を聯合して南方征服の陣容を整へ、南方軍退却の後を追ふて長江方面へひた／＼と攻め下らせた。京漢線方面で閻錫山の軍が北方軍と戦つたが忽ち敗北して、北方軍は潮の如く南下して來る形勢となつた。一たび蔣介石を排斥した國民黨の面々も今更狼狽して再び蔣を起たしむべしとの意見が有力となり、民國十六年末、蔣は日本から歸り翌十七年二月、河南省開封で蔣、馮及び閻錫山の三巨頭會議を開き、蔣を國民革命軍總司令の職に復せしめ、愈々北伐の軍を進めて北方軍と戦ふことゝなつた。南下せんとする北方軍の兵力は五十萬と稱せられ、蔣の號令する南方軍

張の南方討伐

は四十二萬と號し、兩軍は一千里に亘る戦線を展開して天下分け目の大合戦を開いたが、北軍は脆くも南軍のために撃破され、勝ち誇つた南方軍は、五月一日濟南へ續々と入城した。然るに不節制な南軍は、こゝでも亦南京に於けるが如く我が居留民に對して掠奪暴虐を恣にし、遂に我が軍隊と交戦するに至つた。

我軍のために撃攘された南軍は一大打撃を受けたが、黄河南岸に集結して再び陣形を整理した後、天津を目ざして忽ち北進を開始した。北京にあつて全軍に指揮してゐた張作霖は形勢の遂に不利なるを悟つて、六月三日北京を發し、奉天に向つて退いたが、翌四日午前五時半將に奉天に入らんとする際、何者か線路に仕掛けてゐた爆破装置のために列車を爆破されて致命の重傷を負ひ、吳俊陞と共に敢なき最期を遂げてしまつた。馬賊の群から身を起して支那の大立物となつた風雲兒張作霖の五十六年の生涯は斯くして終つた。

北京に踏み留つてゐた張學良、楊宇霆は、同月十日山海關に退き、最後まで反抗した張宗昌も瀋州で撃破され、奉天軍は落日の如く東三省に引揚げてしまつた。

青天白日旗を翻した國民革命軍は、威風堂々として北京に入城し、七月六日蔣介石以下文武諸雄は北京西郊碧雲寺に集り、孫文の靈前に於て北伐完成の報告祭を舉行し、蔣は國民黨及革

命軍を代表して報告祭文を朗讀し、「軍政期終つてこゝに訓政期に入つた」旨を宣明した。

(五)

國民革命軍の北京乗込により北伐は完成し、國民政府は北京を北平と改稱し、首都は南京に奠めることゝなつた。奉天の張學良は大勢順應主義を奉じ、蔣介石一派との妥協合流が成立し、東三省にも青天白日旗が翻つて表面は國民政府大成功の形であつた。しかし大小の軍閥は各地に割據して自己の地盤を守るに餘念なく、國民政府の命令は事實上蔣介石の直轄する浙江、江蘇、安徽、江西、福建の諸省に行はれるだけで未だ眞の和平統一が完成した譯ではなかつた。茲に於て蔣介石は地盤割據の弊風を打破し中央集權の實を收めんとして、民國十八年春、裁兵に名を藉りて國軍編遣會議を開いた處、各地方の將領は自己の實權を剝奪さるゝを厭ひ、殆ど一致して蔣介石に反感を向けることゝなり、更に同年三月北伐完成後の根本方針を議定するたに開いた國民黨全國代表大會に於ても、代表者の選出方法が蔣介石一派の露骨なる御手盛主義であつたといふので、激烈なる反對運動が國民黨左派の汪兆銘等によつて起され、この二つの反蔣熱が昂じて、支那は又もや動亂の渦卷の中へ投げ込まれた。蔣介石に對する反抗の火蓋は先づ李宗仁、李濟琛等の廣西派によつて切られ、次で馮玉祥が反旗を翻し、各地に蜂起する

兵變のために蒋介石は鎮壓に疲れるといふ姿であつたが、兎にも角にも之を平定して民國十九年を迎へた。同年には閻錫山が各方面の實力者を糾合して反蔣戦を試みやうとし、張學良の和平勸告の通電に阻止せられて一應思ひ止つた様子であつたが、更に志を齎して反蔣各派と語らひ、推されて中華民國陸海空軍總司令となり、馮玉祥、李宗仁を副司令となし、四月頃から軍事行動に移り、中央軍と各地に戦ひ、一時破竹の勢を以て乗出したが、八月中旬中央軍のために濟南を奪回されてから形勢不利に傾いた。是れより先、反蔣各派は南京政府に對抗するため、北平に中心機關を作るに決し、蒋介石の獨裁政治排撃を標榜して、國民會議の召集、約法の制定に着手し、黨部と政府、及び中央と地方との關係を改善すべき旨の宣言を發表するなど、着々準備を進めて九月初旬には國民政府組織大綱を決定し、國民政府主席に閻錫山を、政府委員に汪兆銘、馮玉祥、李宗仁、謝持、唐紹儀、張學良の六名を推薦したのであるが、張學良も唐紹儀も就任を諾せざるため行惱みとなつた。一方蒋介石は濟南奪回後、兵を隴海、平漢兩方面の戦線に進め、馮玉祥の軍を撃滅すべき作戰に出で、ゝゝ折柄、豫て中立的態度を持してゐた張學良が、九月十八日突如として「國家國民のため各方面に於て速に停戦し、民苦を安んじ、今後の國是解決の方策に就ては國民齊しく中央の措置を俟つべし」との通電を發し、中央支持の

北平の新
政府樹立
計畫

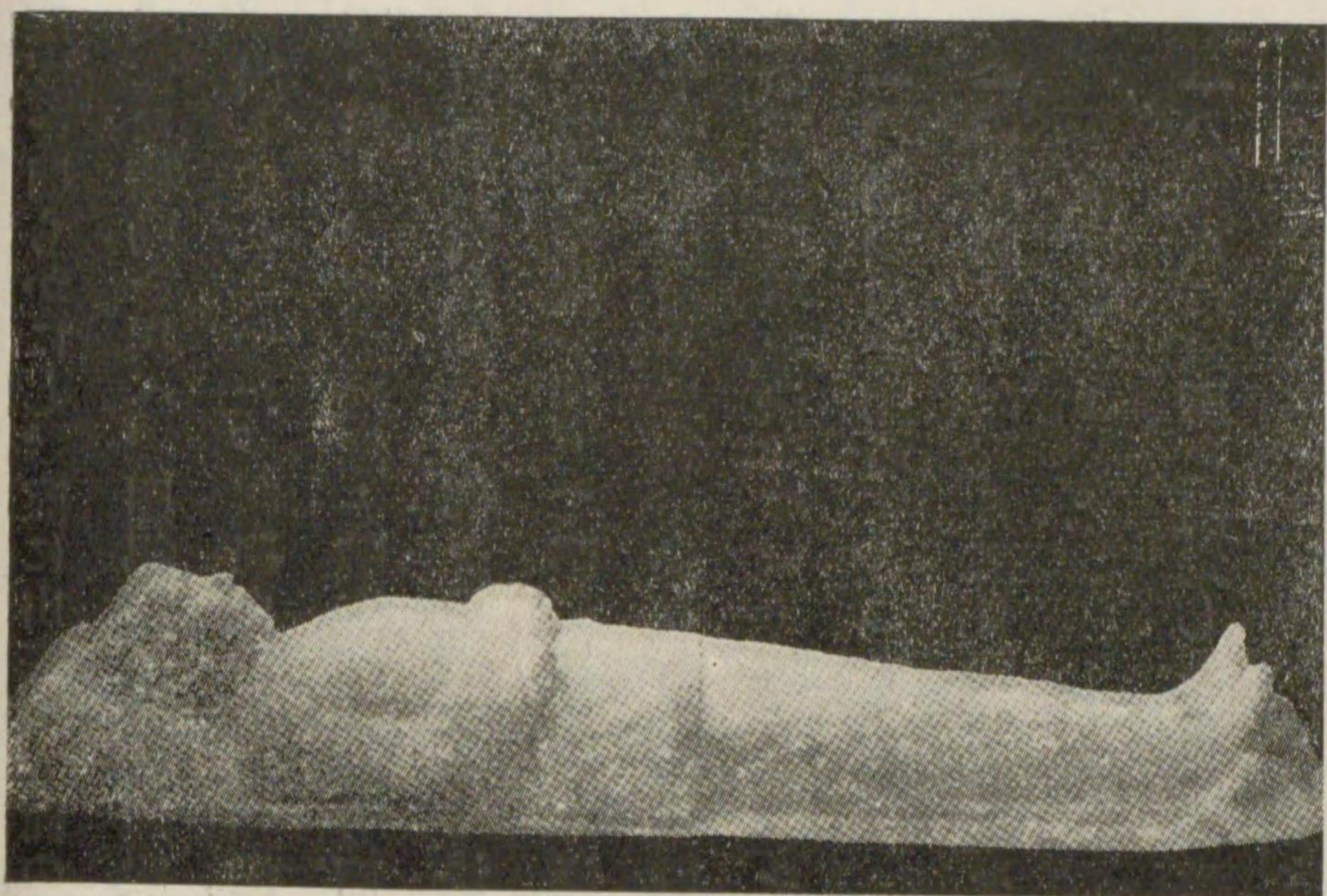
態度を明らかにし、直に山海關方面の東北軍を北平天津方面に出動させたので、之が各方面に異常な衝動を與へ、閻錫山は忽ち屈服的態度を示すに至り、汪兆銘等は倉皇として北京から逃げ出してしまつた。張學良の中央加擔が實現するや、蒋介石は反中央各軍に對し歸順勸告の通電を發し、次で猛然と隴海平漢兩方面の戦線で總攻撃を開始し、十月四日開封を、同六日鄭州を占領し西北軍の一部を降伏させて決定的の大捷を博した。斯くなると北方軍に味方した將領も、忽ち態度を變じて張學良の和平通電に賛成するといふ有様で、時局は漸く收まつた。よつて十一月中國々民黨中央執行委員全體會議を南京で開き、反蔣戦の跡始末を決裁し、併せて諸般の重要事項を決定すべく連日會合を重ね、左の如き重要決議をなして發表した。

反蔣戦の
後始末

一、閻錫山を除名すること。
一、民國二十年五月五日國民會議を召集す、召集立法は常務委員會制定し國民政府より公布施行すること。

一、南京に地所を制定し各國公使館建築の用に供すること。
一、國軍編遣委員會を取消し陸軍整理事宜は國民政府最高軍事機關で辨理すること。
右の決議に基き國民政府は、國民會議組織法、國民會議代表選舉法及び同選舉施行法を公布

し、着々準備を進め、豫定の如く民國二十年五月五日南京中央大學大講堂を會場として國民會



孫文遺骸 此遺骸は藥で固め永久保存せしめられ、つなつて居り、初め北京に祭られ、つがは、今は南京中の山陵に安置せられ、あつて居る。

議を開いた。全國各省から出席した代表三百七十餘名が一堂に會し、國民政府主席蔣介石、副司令張學良以下政府幹部出席して、會議を繼續すること十餘日、約法原案を始め不平等條約廢棄聲明書、新支那の建設を強調した經濟六年計畫案等を可決して同月十七日閉會した。これによりて國民政府の主義政策は國民の贊助を得、政府の基礎愈々鞏固を加ふべき重大な意義を有する會議であつたが、恰も南京に向つて國民代表の集りつゝある折柄、蔣介石彈劾の聲は、先づ廣東廣西の方面で揚げられ、四月二十八日廣東廣西の兩省が獨立を宣言したのを皮切りに、北方では韓復榘、石友三等が國民會議反對の通電を發し、剩へ國民政府部内に重

要な椅子を占むる司法院長王寵惠、鐵道部長孫科、交通部長王伯群等は國民會議を餘所に上海に集まり、各地の反蔣派と聯絡を取りつゝ、暗躍を試みるといふ有様で、甚しく國民會議の權威を傷けたのである。一方、江西方面の共產軍は、其頃から勢力を増して討伐軍が散々に打破られ、官軍の一部は共產軍と妥協して曖昧の態度に出づるものさへあり、暫く雌伏してゐた閻錫山、馮玉祥等も此機に乗じて活動を起さんとする氣配が見え、特に石友三の軍は河北から南下して軍事行動を起し、四圍の形勢は南京政府に取つて甚しく不利なるものとなつた。

廣東に於ては五月二十八日廣東國民政府が正式に成立し、中央統治權は國民政府(廣東)に屬する旨を宣言し、南京政府同様五院制度を採用して汪精衛、唐紹儀、孫科、古應芬、鄒魯の五名が常務委員として之に据り、南京政府の政權を否認して天下に號令せんとする態度を明白にした。之に對し南京政府は急に武力討伐を行ふ様子もなく、蔣介石は自ら軍を督して共產軍の討伐に従事し、討滅の目的を遂げた曉には下野すべき意を天下に表明し、軍旅の間に勞して政治を顧る遑なく、その隙に乗じて石友三軍は西北軍、山西軍の將領と聯絡を取つて北平を衝かんとし、七月には蔣介石及び張學良に對する彈劾の通電を發すると共に、京津線方面を目掛けて進撃を始め、最初非常な優勢を示したが、味方と頼みし山西の商震が奉天軍に加擔して反噬

を試むるに及び形勢逆轉して大敗を喫し、石友三は亡命の餘儀なき運命に陥り、一應は事平ぎたる形となつた。併し石友三の活動と關聯して再起を圖りつゝたつた閻錫山、馮玉祥、孫殿英等が再び反蔣戦を起さんとする計畫は引續いて行はれてゐるらしく、北支那の戦雲は未だ全く收まつたものとは見られない。殊に廣東方面と策應するに於てはその影響は一層大である。走馬燈の如く變轉する大支那の形勢は果して何れの時に至つて定まるか、殆ど豫測を許さない。

昭和六年夏には揚子江上流地方に降雨が續いて七月下旬より沿岸一帯を浸し、漢口、武昌方面はその害を受けること最も甚しく、流域各地方に亘りて家屋、耕地の流失するもの算なく、生靈の河底に葬らるゝ者亦數十萬人に及ぶと傳へられ、洵に史上稀なる大慘害を受けた。殊に地勢平坦なる土地のことゝて減水までに多くの日子を費し、數千萬人に及ぶ罹災者の窮狀は言語に絶するも、國民政府の力を以てしては容易に救恤の手が行届かず、剩へこの災害に乗じて共產黨系の匪賊が出沒し、社會的にも政治的にも非常に不安の状態に陥らしめた。しかも斯る折柄、支那各地には無法なる排日運動が起つて、遂に滿洲では支那の正規兵が滿鐵の破壊を企つる如き狂態を演ずるに至り、日支の關係を俄然險惡ならしめて、不統一なる支那の國狀を益々不利に導き、日本に對する關係に於ては自ら自己の非を蔽ふて國際聯盟に絶らんとし、その

揚子江氾
濫の大慘
害

目的を達するを得ず、豫て國民黨の要部並に政府當局が使曠しつゝあつた排日運動のために、今や却つて彼等自身が苦境に陥らざるを得ない事情に遭遇してゐる。尙ほ水害の報に接するや我國では畏くも皇室から十萬圓の御救恤金を賜はり、民間では同仁會からは醫藥の救護班を出し、又た同情會を組織して約六十萬圓の寄附金が集り、第一回救護品を天城丸に滿載して上海に到つたが、財政總長宋子文から其の受取を拒絶され、折角の同情を水泡に歸した。

政治上の地位

支那は革命の父孫文の衣鉢を襲ぐ國民黨の手によつて一應平定され、その政權を執る所の南京政府は所謂三民主義の下に漸次内治外交を齊へて、輝やかしき新支那を建設すべき道程にあるが、早くも國民黨内に分裂を生じて、南京と廣東とに、同じく國民政府と名乗る政府が存在するやうな事態を現はす等、前途尙ほ波瀾曲折の容易に治り難きを示してゐる。立國以來の歴史が長く、その上非常に廣大な國土を有し、多數の民衆を包容してゐる上に、人種的にも複雑であり、國民性、社會組織、思想、風俗等すべて單純ならざるのみならず、政客、軍閥何れも自己の勢力を張るに専らにして、翻雲覆雨、離合常なく、建設に對する犠牲的精神に乏しいから、

和平統一
の困難

却々容易に堅固なる統一と安定とが保たれないのである。五百萬方哩に近い支那の國土は、以てその面積の大なることを世界に誇るに足るが、この國土の中に抱藏する國民の文化は多數の段階に分れて、今尙封建的の遺習が多く殘存し、新しい思想に裏付けられた新形式の政治形態の下に立派に纏めあげて行くことが困難なのである、いはゞ支那は一つの國家であつて、同時に又一つの世界でもある。中央政府の權力を確立して微動だにせざる統一國家を形式するためには政客軍閥の徒がすべて私心を去つて、協同戮力、内治外交に努力しなければならぬ筈であるのに、彼等は小理小情に囚はれて内紛を繰返すを常習とし、常に國家民生を誤らせるのである。國際關係の複雑なことも現代支那に取つて大きな悩みの一つたるに相違はないが、支那が能く内を齊へて固有の力を完全に發揮することが出来るやうになれば、外患を排除するにはおのづからその道があり、當面の急務は實にその國家的統一の完成に存する。

三民主義
の對外的
表現

孫文が鼓吹した三民主義の一たる民族主義は、支那民族の自主獨立に關する實行方法に就て對内對外兩方面に亘る民族解放を高調したもので、それが完全に達成されるれば鞏固なる民族的國家が形成される譯であるが、この民族主義が對外的に表現されたものが彼の反帝國主義、不平等條約撤廢、利權回收のスローガンとなり、著しく外交關係を尖鋭化して支那の外交政策を

全く小兒病的の狂態にまで脱線せしめつゝある。彼の關稅自主權の回復に就ては、その問題の性質上、支那は成功を収むることを得たけれども、治外法權撤廢問題に至つてはおのづから性質を異にし、支那の法制や司法官訓練の實際に徴しても列國の信頼を受くるに足らざるは明らかで、従つて急速に列國の承認を得べき見込はない。然るに支那は無理押に之を撤廢すべく一方的宣言によつて目的を遂げんとする態度を示してゐる。斯の如きは甚しく國際的信義に悖る行動たるのみならず、列國民の反感を挑發する結果となり、特殊な國際環境にある支那自體の運命を謬らしむる危険さへあるのである。國民革命を遂行せんとするに當り、國民黨の一派が國權回復を標榜して國民に對し來つた關係から、對内的の責任上、斯かる態度に出で、人心を繋かうとするのは一應諒解し得るところであるけれど、建設途上に於て國際的狂態を演ずることとは決してその前途を安泰ならしむる所以ではない。

曩に孫文が國民革命を唱道して起つや、革命遂行の手段として、聯俄、容共、農工の三政策を採用した。聯俄とは勞農露國との提携を意味するもので、露國から直接間接の援助を受けて國民革命の達成に資したのである。又容共とは國民黨と共產黨との合流により、共同戦線を布き社會革命を達成せんと企てたものであり、農工とは即ち無産者に階級意識を植付けて階級闘

孫文の革
命政策

共產系分
子の興へ
る脅威

争を誘發し、革命への展開に資する政策の謂ひであつたのである。これらの政策は革命運動に相當役立つところがあつたとしても、共產思想を支那に流入せしめて將來の禍根を培つた弊害は大である。孫文が採用した共產黨との提携は、其後蔣介石等によつて打切られたけれど、これによつて露西亞の赤化運動の手は支那の國內に伸ばされ、共產主義の政客は一時鎮壓されても、所在に落ちた種子はやがて芽を吹き根を張らんとしてゐる。則ち今も尙止まざる廣東、上海方面に於ける過激分子の暗躍や、湖南、湖北、江西、福建、廣東の諸省に於ける農民運動及び共產黨は支那の將來に於ける一大脅威でなければならぬ。露西亞のブハーリンは「支那の共產黨は即時の暴動躍起に焦慮するよりも、之が準備行動即ち必勝の機會に暴動を惹起せしむるための民衆的準備に移ることが必要である。支那の農民運動は支那革命の中心問題であつて、その價値は重要である」と公言してゐるが、前記諸省の野から野へと燃え擴がつてゐる農民運動の將來を想ひ、更に翻つて外蒙古が既に完全に赤露化してこゝを根據に赤色露西亞の魔手が北滿洲方面に伸びつゝあるのと對照すれば、支那が赤化といふ大なる禍に侵されて行かうとする危険の深刻なるを感せぬ譯には行かない。殊に南京政府が四十餘師の兵力を以て江西、湖南、湖北、三省の共產軍討伐に努力しながら、容易にその目的を遂げ得ないところを見ると、共產

軍の力の輕視し難いことは明に知られ得る。

次に考察すべきは中央と地方の關係であつて、國民政府の政治組織が中央集權主義に則るものである以上、この問題は決して輕視することが出来ぬ、中央集權主義の建前からすれば、必然、軍制税制等の整理統一を必要とし、若し之を成し遂げなければ、國家統一は名のみであつてその實は擧がらず、依然として地方軍閥の割據により、再び國內を亂離の状態に陥らしむる危険があるのである。由來支那は國土が餘りに廣大である上に、國內の交通機關が發達してゐない爲め、中央政府の威令が十分に地方に徹底せず、軍閥の徒が地方に據つて自己の勢力を養ふに都合よいやうに出來てゐる國柄である。國民政府はこれらの點に鑑み、地方行政については從來の督軍制度を廢し、各省に省政府を設け委員制度によつて治めることにしてゐるけれど軍制、税制等の整理に就ては、手を著けんとして未だ著け兼ねてゐる形である。則ち地方税たる釐金制度などは關稅自主權回收の條件として、夙くに廢止すべき筈となつてゐるに拘らず、實現不能となつてゐるのは、中央政府の思ふまゝに地方問題を片付けられぬといふ事實を明に證據立てゝゐるものである。又地方の軍權について見るも、既に蔣介石は國軍編遣會議に手を焼いて居り、中央政府に叛旗を翻へせる閻錫山や馮玉祥も、地方に於ては餘力を維持して、風

中央と地
方の關係

雲の起るに乘じ忽ち出て中央を脅かさんとする状態であり、奉天の張學良に至つては、曩に國民黨全體會議に列して陸軍整理事宜は、國民政府の最高軍事機關に於て辨理するといふ決議に加はりながら「東北四省の軍政權は中央の命を聽くとの諒解の下に張學良に委任す」といふ申合せの下に、事實上東北軍の軍事權を確保してゐるのである。かうした状態に照らし、今後各地方の軍事權を軍閥の手から取り上げるといふことになれば、奉天派を始め各派の將領が反抗して、中央移管を肯んじないは勿論、手兵を提げて反噬の態度に出で、却つて戦亂を捲き起すの端となるかも知れない。特別の國體に基いて行はれた、我國の王政維新の如き改革と支那の革命とは、決して同一視すべからざるは勿論、現在の程度の全國統一によつて中央の權力を樂觀するは勿論早計である。又假に中央の權力が非常に優勢なものとなり、高壓的に事が進められるとしても、南北人の傳統的な地方觀念に基づく相互排斥の精神を融和することは困難であり、且又中央集權主義の政治が徹底せんとすればするだけ、地方分權の要求が燃えあがつて、却つて反中央運動を盛んならしめる虞れさへあるのである。

更に外から働き掛けやうとする國際的の勢力を考察すると、列國の支那に對する政策は最初露骨なる侵略主義の強行として現はれ、露國は既に我が元祿二年(西曆一六八九年)ネルチンス

ク條約によつて露支の國境を劃定した時代に侵略の鋒銜を現はし、安政五年(西曆一八五八年)愛琿條約によつて黒龍江の左岸を奪取し、萬延元年(西曆一八六〇年)には北京條約を締結して沿海州の過半と共に浦潮を手中に收め、英國は印度を侵略した餘勢を以て支那に臨み、天保十三年(西曆一八四二年)南京條約によつて香港を割取し、佛國は明治十六年(西曆一八八三年)支那が宗主權を有する安南を占領して保護國とした。其後露國が蒙古を窺ひ更に滿洲から朝鮮にまで侵略の手を伸ばさんとするに及び、日露戦争によつて南下の勢を挫かれたが、露國が南下の野心を逞くしつゝあると前後して、英國は西藏を窺ひ、片馬を略し、遂に中原に出で、威海衛及び九龍半島一帯の地を租借し、獨逸は膠州灣を占領してその地方に租借權を得、佛國も亦廣州灣及びその附近一帯の地に租借權を獲得するといふ有様で、支那は恰も悪性の腫癰が発生するやうに領土内に外國勢力の侵入を見、あはや分割の運命に陥るべき形勢を示してゐたのである。この間我が國は東亞永遠の平和を確立するに専念し、滿洲より露國の勢力を驅逐し、其後更に青島を獨逸の手より奪回して之を支那に還付し、獨逸の山東侵略の禍心を芟除し去つたのである。斯かる間に世界最大の富を擁する米國が支那に經濟的霸權を確立せんとして、勢力範圍の撤廢、門戶開放、機會均等主義等を高唱しつゝ進出し來り、支那を中心とする國際關係は

政治的に將た經濟的に益々複雑化し、その前途は彌々多事多端ならんとする情勢を加ふるに至つたのである。

今日の情勢から見れば、支那を中心とする國際的諸勢力は、個々に分立して各々自國の利害に専念して進みつゝある形である。その中において最も明瞭に吾人の認識に上るのは外蒙古及北滿洲方面から働き掛けてゐる露國の侵略的態度と、西藏方面から伸ばされつゝある英國の侵略政策である。それから更に太平洋の波濤と共に支那全土を搖がすべく押寄せてゐる英國と米國との政治的經濟的の力である。つまり英國は背後から劍を以て脅かしつゝ、前面からは別の假面を被つて微笑を湛へつゝ支那に臨んでゐるのである。英露が支那の背後から中原を衝かうとする野心に關しては、後章「滿蒙回の政治上の地位」及び「西藏の政治上の地位」の項下に於て述べるが、兩國の侵略的態度は今日まで甚しく大膽露骨であつた。唯だ彼等が急激に進出し得ないのは東洋平和の監視者としての日本を憚り、徐々に進出すべき機會を待つてゐるに過ぎない。顧るに日本は常に日支兩國の共存共榮を念とし、之を基調として支那に對し來つたのであつて、未だ曾て何等の不法なる侵略的行動を敢てしたることなきは勿論、支那分割の大勢を阻止するために絶大なる犠牲を拂ひ、單に日露戰役に際し、露國から繼承したる滿蒙の特權

英露と支那

滿蒙と日本

及び支那内水汽船航行權を持つてゐるに過ぎない。しかも滿蒙の現状たるや、日本は南滿洲鐵道に對して既に六億五千萬圓の巨資を投じて經濟的開發の用に供し、又關東廳及び滿鐵沿線の守備駐屯に對しても年々莫大なる國費を投じてその安寧を維持し、滿蒙をして内亂の渦中より脱せしめ、嘗て荒涼たりし滿蒙の野をして驚くべき經濟的發展をなさしめたのである。若し日本無かりせば、滿蒙の天地は夙に異なる色を以てその地圖を塗られたるは勿論、支那本部の運命も如何に成り行きたるか測り知られないのである。支那國民としても充分に之を認識して我國に感謝の念を捧げなければならぬ筈なるに、近時の支那は露國の外蒙古經路及び東支鐵道を中心とする北滿經營の實情や、英國の西藏經路等を閉却して我國の滿蒙に於ける立場に對してのみ抗爭を試みつゝあるは洵に驚くべき過誤といはなければならぬ。

眼を轉じて米國の對支態度を見ると、常に日本の對支策を抑制し、且つ英國をも牽制して極東一帯に自國の商權網を擴張し、金融市場の支配權並に原料の獲得による經濟的霸權を掌握せんことに腐心し、前には滿鐵及び東支鐵道の買収を企て、その成らざるや滿鐵及び東支鐵道に並行する新鐵道の敷設を策し、之にも失敗するや更に滿洲鐵道の中立を提議する等畫策到らざるなく、やがて借款團を組織して自國の政治的經濟的勢力を支那に扶植するに努め、或は華盛

米國の對支態度

組織的な
米國禮
讃の宣傳

頓會議倫敦會議等を連續的に開きて日本の國力に制限を加へんとし、或は滿蒙に於ける日本の特殊權益を薄弱なるものたらしめんとして干涉を試み、一面支那に對しては自ら「傳統的友情」を標榜して絶えず嬌態を示し、日支の間を疎隔するに餘念もないのである。米國は他の何れの國よりも先んじて南京政府を承認し、通商條約改訂ではその根本として相互平等主義を認め、治外法權徹廢の原則を承認し、關稅自主の原則を承認する覺書を與へ、米國軍隊軍艦の個別的撤退を敢行し、支那の意を迎ふるに努め、裏面からは反日本主義の運動を尻押してゐる如き事實が一再ならず發見されてゐる。是れ如何に米國が日本の既得勢力を失墜せしめて已れが取つて代らうとする野心の猛烈なるかを物語るものである。殊に米國は支那に多數の大學を設立して所謂大學網を張りめぐらし、且又多數の似而非牧師を支那内地に入込ませ、それらの機關を通じて組織的計畫的に米國禮讃の思想を支那國民に吹き込み、併せて日本及び英國の如き既得勢力を有する國に對する不利なる宣傳を撒き散らす機關としてゐるのは周知の事實である。

英國の鐵
道政策

英國の政治的經濟的の對支活動は鐵道を中心としてなされ、一は英領印度及び緬甸から支那本部に出でんとするもので、緬甸から雲南に入る滇緬鐵道、長江下流湖南を経て揚子江岸湖北の長沙に至る沙興鐵道、揚子江上流の富源四川に入る廣重鐵道、及び印度から西藏を経て長江

表裏ある
寬大性

上流に出づる鐵道の計畫がそれである。今一つは支那の經濟中心地たる長江を中心に張り廻らした鐵道網で、英國はこの鐵道網によつて揚子江一帶を自己の勢力圏と稱し、他國勢力の侵入するのを極力排除してゐるのである。則ち長江流域の既成鐵道としては、滬寧、滬杭甬、津浦南線があり、豫定線としては長江北岸江蘇、安徽、湖北の最富饒地を東西に列ねる浦信鐵道、南京から湖南に至る長江南岸の寧湖線があり、武漢下流の長江一帶は英國の鐵道網で覆はれ、此の地帯と緬甸境と上述の諸鐵道によつて連絡しやうとしてゐる。近年英國は支那に對して威海衛を還付するなど能ふ限りの寬大性を表示してゐるけれど、印度及び緬甸方面に連絡する豫定鐵道の敷設によつて支那の中原に向ひ積極的に進出せんとする野心の滿々たるは、曩に西藏の國境問題に就て英支交渉を試るに當り甘肅、青海、新疆、四川の諸省に互り驚くべき廣大の地域を割取して西藏自治領に加へんとした一事によつても推測される。畢竟英國が表示せる寬大性は、支那の國權回復運動に逆行して俄に野望を遂ぐる事の難きを知り、支那に一應の安心を與へて他日の機會を待たんとするものに外ならない。

記して茲に至れば支那が外力の侵入によつて受けつゝある憂患は甚だ大である。若しこの外力侵入の勢が益々尖鋭化する曉には支那大陸の平和は保ち難くなるのであつて、世界の識者が

第二の世界大戦は支那に於て捲起さるべしと豫測するも決して理由なきことではない。この間に處して最も緊要な一事は日支兩國國民が相互の立場を充分に理解し、共同生存の基礎を確立すべく一路邁進するにある。夫れ唇亡びて齒寒し、日本が支那の領土を保全して永く東亞の平和を保たんとするは元より自衛の必要に出で、歐米列強が鴟梟の慾を恣にする態度とは、全然其の立脚點を異にしてゐる。日本が侵略的野心を以て支那に臨める如く解するは支那が日本を歐米列國と同一視する錯覺より出で、その錯覺のために支那は唯一無二の友邦に猜疑の眼を向けて自己の運命を謬らうとしてゐるのである。日本の國是は日支兩國の密接なる地理的關係に鑑み支那と提携することによつて彼我の人口食糧問題を解決し、經濟的產業的自給自足の資源を得て海陸共に有事の際に應じ、以て日支共存の道を完うせんとするにある。此の意味よりして支那が完全に和平統一の業を遂げ、鞏固なる中央政府を確立して、善美なる國家を建設するを祈ること日本國民の如く切なる者はない。新支那の建設とその將來の繁榮は日支の協力一致によつてのみ庶幾することが出来る。この協力一致の道を一片の美辭麗句を以て形容せらるゝものたるに終らしめず、現實的なる共通の政策施設によつて具體化し、兩國親善の堅き楔たらしむるに至ることを肝要とする。鐵道事業の如きはたしかにその重要な一眼目であつて

支那人の
錯覺

日支合辦による支那鐵道の統一策は、日支兩國の識者が最も眞摯に攻究すべき好箇の題目であり、且つ最も妥當なる實現性を有する日支提携の方法である。共通せる利害關係によつて兩國が緊密に結合し、彼此相扶け相補ふことによつて、兩國は世界に濶歩し得ると共に、長く東亞の平和を確保する役目を果し得るのである。

華府會議に於ける九箇國條約は、支那に於ける機會均等、主權尊重、内政不干涉の根本原則を定め、支那の獨立は之に依り關係諸國共同の力を以て擁護せられることとなつてゐる。支那は本條約を頼みとして大いに氣を強くする譯であるけれども、一面からいへばこれは弱者に對する庇護であつて、支那自身に取り決して名譽を意味する條文ではない。斯る條約が存在せずとも、支那は自ら確乎たる獨立を誇り得る國家とならなければならない。それを思はずして外には國際的信義を無視し、内には内争を繰返して底止する所なしとすれば、眞に健全なる國家的統一を成就するは果して何れの日か、支那のために甚だ慨かざるを得ないのである。單純なる樂觀論者は、支那の統一が容易に實現し、支那が忽ち健全なる獨立國家たる實を示すに至るものと解釋するけれども、既に述べたる如く支那の統一には種々の障礙が存し、内政不干涉といふ舞臺の上に踊る支那の政客軍閥の態度を見れば、統一の前途未だ必しも近からざるを思は

九箇國條
約

ざるを得ないのである。而して元來唇齒輔車の關係にある隣國日本としては、これ誠に遺憾なる事態といはなければならぬ。

要するに國內事情から見ても、國際事情から見ても、新支那建設の前途には尙ほ多くの試練が横はつてゐる。その試練に耐へて民國肇造の大業を成就するためには、支那國民は深く反省して自己を批判し、慎重にして穩健なる態度を守ると共に、一方に日本と提携して、その援助を得つゝ列國の束縛から脱するに足る實力を養ふことが肝要である。支那にしてこの自覺が生ずる以上、日本には豫てそれに應ずべき善隣としての用意の存するは勿論である。

風俗

男女の服装

○服装 支那人の服装は筒袖で、衿丈が長くて指が全部隠れる程である。働く時には袖を捲くり上げる。丈は臀の處まで達する位になつて居り、前は肋骨形の飾釦で止める。足は股引を穿いて、鬮の處で括つて、靴足袋を穿き、其上に袴を穿く。上衣は袴と摺り拂ひになる位の長さで衿丈は着物と同じである。女の着物は男のよりも更に長く、丈が膝の少し上まであつて、衿丈は男のよりは長い。股引は洋服のズボンのやうで袴を穿かない。之は西洋や日本の女の着物と



支那南方の住む族は一隻の舟を以て終生の居住とす。是は支那の建福族の集居する所である。是は支那の建福族の集居する所である。是は支那の建福族の集居する所である。

反對である。帽子は色々ある。

着物の前後には刺繡を施し、清朝時代にはこの刺繡によつて身分の高下を示したが、今日ではそんな風は廢れた。しかし支那人は刺繡に巧みで、巧妙なる刺繡は支那の服飾に於ける一つの著しい特徴である。近年は帽子、靴等に至るまで一般に歐米風のものゝ勢力を有し、都會地に於ける知識階級は競ふて洋服を着用する風が盛んになつて來た。

男の頭は清朝が支那を征服した時に法律で滿洲風にさせた。即ち俗にいふ豚尾で、周りを剃つて、天邊の髪を長く編んで臀の邊まで垂らすのである。然し革命以來辮髪を剪る者がだんだ

ん殖えて、今では殆ど散髪になつた。

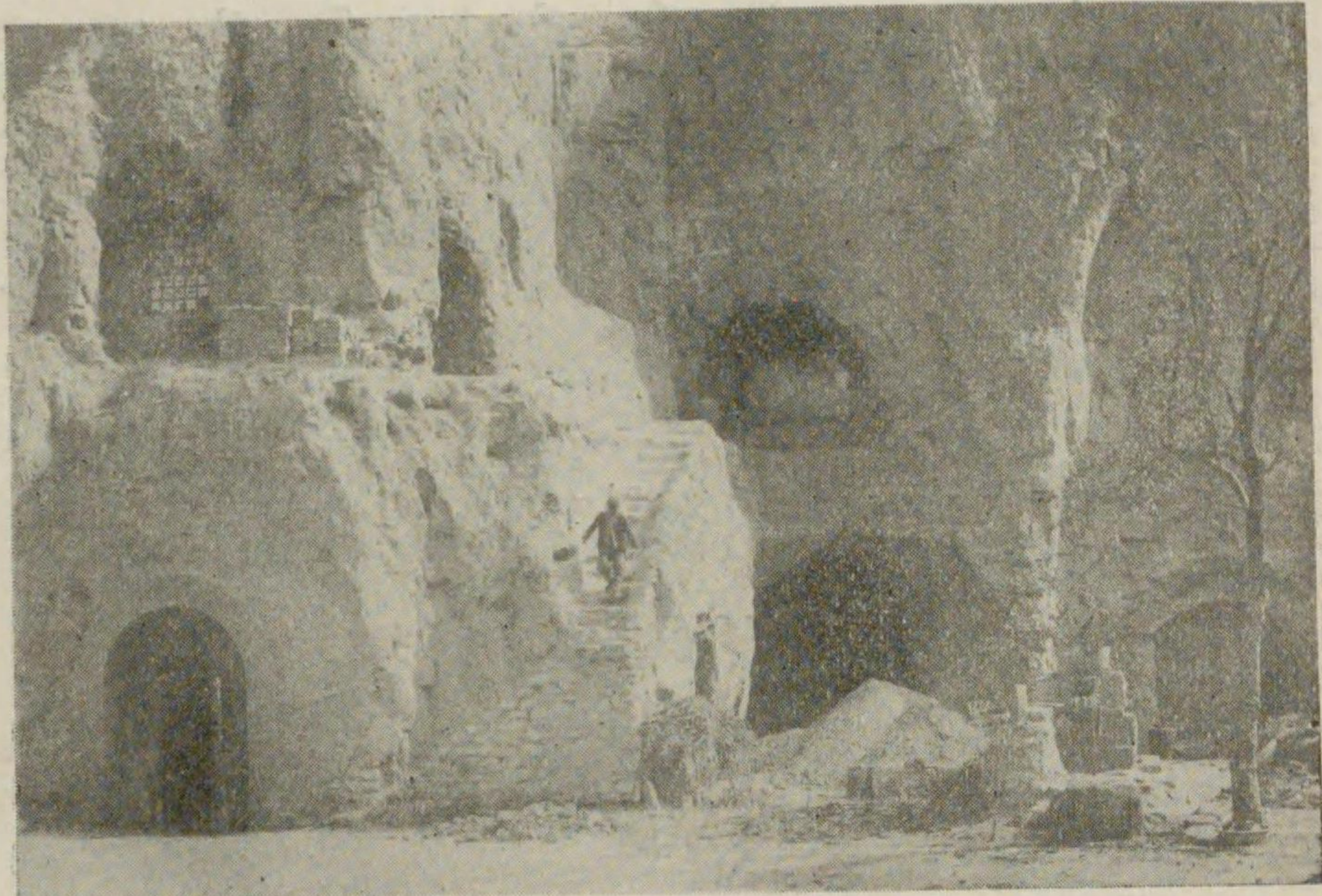
同穴の生活に入るのである。

以上は上流社會の風習であるが、それより以下の階級の家では、親が息子のために女の兒を買つて來たり、或は無償で貰つて來てめあはすといふやうな風習がある。こんな階級では息子が家に居ても居なくても嫁として連れて來た娘は、一家の嫁として家事に使役し随分残酷に取扱ふのが例である。許嫁のことを支那では定親といひ、双方幼少の頃兩家で婚約を結ぶ風もあるが、若し結婚前に良人たるべき者が死ぬると、娘は年頃になつた頃、その家に入つて終生獨身を守る風習となつてゐる。しかし、現代ではこんな風習は漸次少くなつてゐる。尙ほ支那人の家庭生活について述べると、今でも婦人は閨房に蟄居し、終日閑居、ひたすら粉黛と梳髪を事としてゐるやうなのが多いが、上流社會では概して主婦が良人よりも年上で、却々強い女權を有し、良人を傾使し、甚しきは良人を打擲するといふやうな舉に出るものもある。年上の妻を持つ良人が子孫繁昌を名目に妾を蓄へる風があるので、怨恨、嫉妬の風波を沸かすのは殆どそれらの家庭の常態である。

○誕生 子供の生れる時は、妖精が澤山集つて來ると信じてゐるから、婚禮の晩と同じやうに赤燈を産室に點する。人々は目出度い言葉の外は決していはない。男の兒が生れると、二十八

強い女權

出産の祝賀



民居穴の省西山 何千の昔から支那の山西、南河、西陝の黄
土地に帯はる窟を穿てつ居るものが多い。明文の今日も全
支那を通じてかうした居穴を生活する者が一萬人以上に及ぶ
は嘘やうな事實である。

の衣を雛形にして造る。之は佛の保護を受けることが出来ると思つてゐるからである。其外赤

日目に頭を剃る。この儀式には饗宴を張るが、やはり目出度い言葉ばかりいつて色々な祝物がくる。三十日目に母親は、娘々ニヤンクミヤサ廟に參詣して香を焚く。それから後は勝手に友達を訪問してもよいのである。女の兒の時は、三十日か四十日目に廟に參詣するのである。三月經つと老人の友達か祝物を持つて來る。それから赤子の周りに書物だの銀だの色々な物を置く。そして赤子が最先に手をつけた物が彼の運命を示すと思つてゐる。誕生後一年經つとまた饗宴を張るが、男の子には殊に立派な饗宴を張り、更に十年毎に誕生日を大祝ひに祝ふのである。出産の時の赤子の着物は僧侶

子の身體の周りには、護符や、目出度い文字や、善神の肖像を附けて置く。御經の文句を赤子の頸や腰に附けて置くものもある。母親は赤子が悪魔に取付かれはしないかと非常に心配する、で鍵や鎖を赤子の頸や腰の周りにつけて、赤子の魂が悪魔の爲に連れて行かれるのを防いでゐる。時として女の子を男装させ、男の子を女装させて、悪魔を迷はさうとしてゐる。

○宗教 現在の支那の宗教は佛教と儒教と道教と回教とで、基督教も少しある。

儒教 儒教は孔子の教へた人倫の大道で、宗教といふよりは寧ろ道德教といふべきものである。孔子は春秋の末に魯に生れた人で、名は丘、字は仲尼といつて、修身齊家治國平天下の道を説いた。其主とする所は孝悌を以て身を修め、仁を以て國を治めるといふのである。孔子は此道を諸侯に説いたが用ひられなかつた。

孔子の孫の子思は中庸を著し、子思の弟子に孟子が出て性善説を唱へ、其後に荀子が出て性惡説を唱へ、皆孔子の道を祖述した。爾來之を儒教と稱し、今日に至るまで支那政教の基礎となつた。

道教 道教は老子の教へた道德經を基礎とし、之に幾多の迷信を附會したものである。老子は孔子と同時代に生れた大哲人で、無爲自然の道を説いて、道德五千言を著した。後列子と

フーチーの豫言

莊子とが出て、其道を擴張した。之を老莊の學といふ。其から後、時代が經つに従つて、色々なことを附會して今日のやうな道教となつたのだが、今でも中々澤山の信者をもつてゐる。

紅卍教 紅卍教は道教から出たもので老祖神を主神とし、特に北支那から滿洲方面に信者が多い。扶乩といつて筆先に書き顯はされた神示は、訓言や豫言などで、日本の關東大震災や滿洲事變などは皆な此の豫言にあつたといふ事で、滿洲と日本との將來に就ても或る神示があつてゐると一般信者間に堅く信じられて居るさうである。

回教 甘肅、陝西、河南から山西、直隸にかけて、多數の信者を有つてゐる。

基督教 も歐米人が熱心に傳道するので、信者がだん／＼増加してゐる。

其の外太古の宗教も幾分か残つて居る。即ち皇帝が天を祭つて萬民の爲に自分の身を犠牲にしたといふやうな行事の名残を留めてゐる。之は禹の時代から傳はる儀式である。廟の周りは大木大樹が澤山あるが、之は昔支那人が木を拜んだ宗教の遺物である。其外風神、水神、土地神等を祭つたり、先祖を祭つたりするが、之は佛教や道教よりは遙かに支那の人心を支配してゐる。悪魔を拂ふ爲に綺麗な龍舟を流す祭もある。此等は總て太古の宗教の遺物である。殊に見逃すべからざることば、支那人が悪魔は眞直に歩くと信じ、之を防ぐ爲に家毎に玄關に衝

古來の宗教

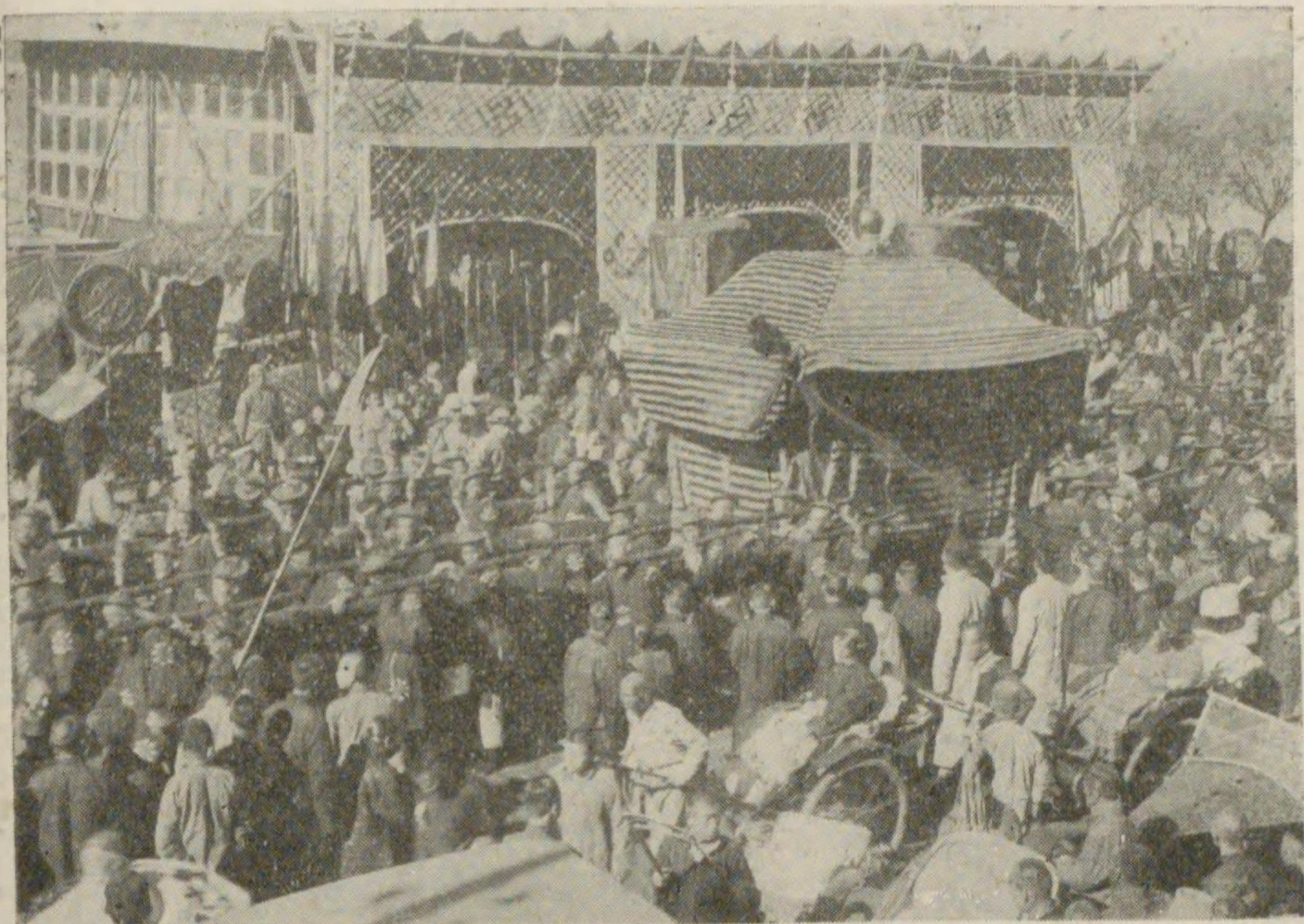
立を樹て、置くといふことである。若し玄關に衝立を置かないなら、玄關へ行く通路を或る角

度に曲げなければならぬ。さうでないといふと悪魔が始終出たり入つたりすると信じてゐる。然し孔子は怪力亂心を語らずと教へてゐるが、今の支那人は此の教を忘れたらしい。

支那人の祭つてゐる神は澤山ある。關帝廟、文廟、城隍廟、龍王廟、瘟神廟、鬼王廟、火神廟、土地廟、河神廟、娘々廟、竈神、門神、祖廟、歲德神、其他色々な神様がある。之は皆五行崇拜から起つたものであらう。

佛・教 は昔の華嚴、天台、法相、禪などの八宗は微々として甚だ振はない。唯喇嘛教だけは到る處大勢力である。喇嘛教の儀式は頗る面白いが、之は蒙古又は西藏の部で説明しやう。回

支那人の祭る神



支那の葬式 式儀を盛大にするのは支那の國民の唯一の特徴であつて、この圖によつても支那の葬式が如何に大掛かりに行はれるかは窺はう。

教は清真寺といふ寺を各處に置いてゐて色々な儀式があるが、之は中央亞細亞の回教の儀式と同じであるから此には略する。

○葬式 支那人は生きてゐる時に經帷衣や、墓や、棺桶や、其他色々な葬式の道具を準備して置く。葬式の時には出来るだけ大きな聲で泣かなければならぬ。それから泣男を雇はなければならぬ。

子供は小さい箱のやうな棺に入れて葬るのである、貧乏人は菰に巻いて墓場の土饅頭の上へ載せて置く。未だ齒の生えない赤子は人間として取扱はない。金持は赤子をもなか／＼鄭重に葬り、塔を建て、入口を二つ付け、一方は女の子の墓とし、一方は男の子の墓とする。子供の墓場は其家の墓場の端に設ける。それは子供は成人した者と一處に葬つてはならないからである。女の屍體は男の靴を穿かして葬る。其譯は來世は男となつて生れ變つて來る爲である。

墓所の選定は最も重大である。風水師(觀五行師)に見て貰つて、墓所の定るまで死骸は大きな棺に入れて、數年間家に飾つて置く。然し高貴な人は生前必ず墓地を造つて置く。秦の始皇帝などは七十萬の人夫を出して、三十年かゝつて驪山に高さ五十丈の墓を造つた。之を見ても支那人が最も墓所に力を入れることが分る。最も變つた風習は母親が子供の魂を索すことであ

最も變つた風習

る。母親の聲は十萬億土まで届くと思はれて居るから、母親は手に提灯を持って、大きな聲で子供の名を呼びながら彷徨ふ。尤も魂を索すことは子供には限らない。白樂天の長恨歌で有名な彼の玄宗皇帝は楊貴妃のことが忘れられないで、方士をやつて楊貴妃の魂を索させたら、其魂は海上の仙山に居つた。それで方士は貴妃の魂と話をして、玄宗皇帝が貴妃に與へて約束した花鈿の一股を持つて歸つて來た。所謂『七月七日長生殿。夜半人無く私語する時』の悲劇は是れである。それで母親は提灯を上下前後左右に振り舞して、『歸つて來い。歸つて來い。』と叫ぶと、他の女が『今歸る所です』と答へる。此呼び聲は夕闇を破つて如何にも悲みの極に聞える。終に魂が歸つて來たものと信せられる。

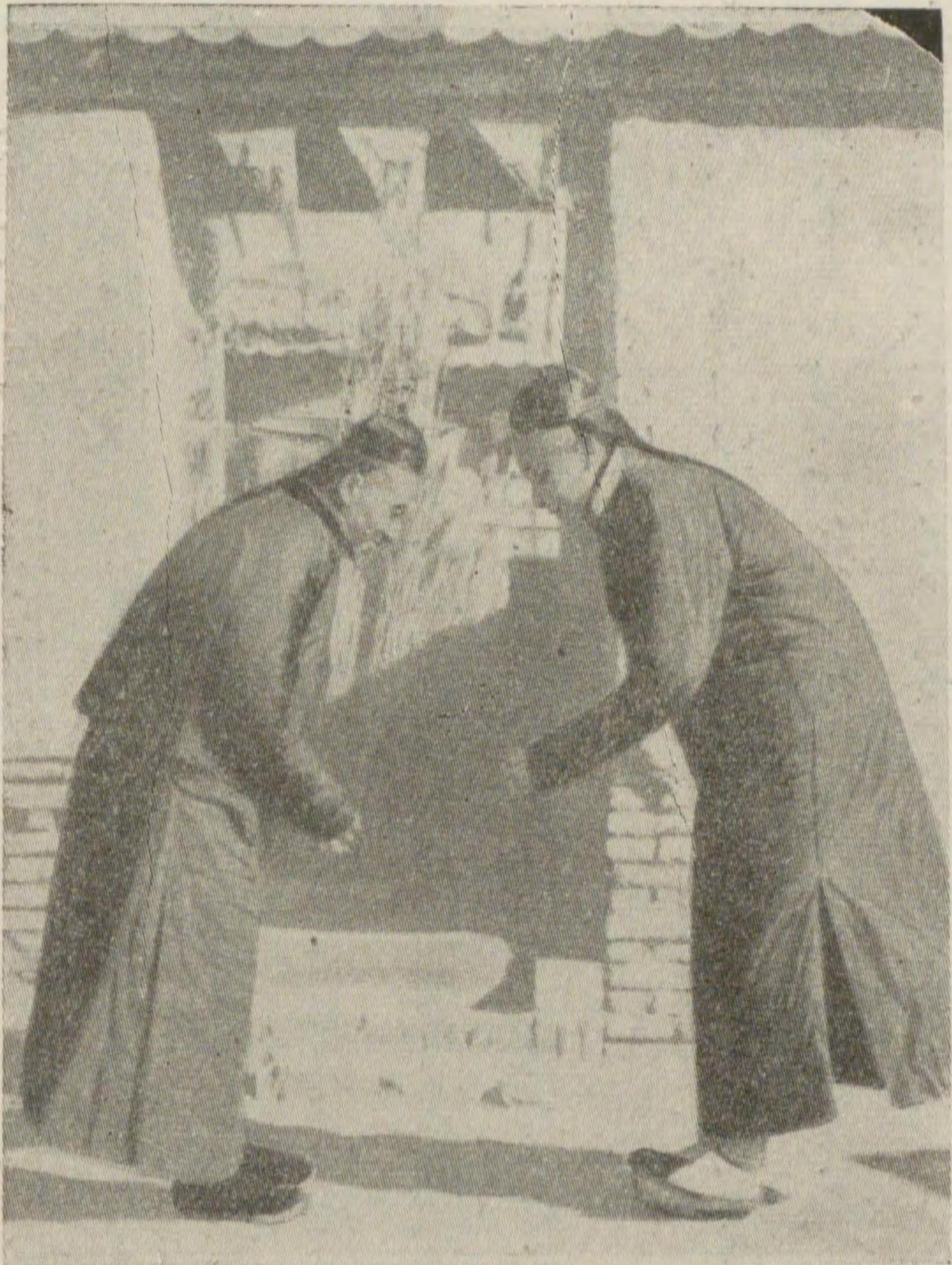
昔は葬式に犠牲を供した。特に天子の葬式には犠牲ばかりでない殉死もあつたが、明時代から殉死や犠牲を廢して、石で妻や召使や馬や駱駝などを刻んで之に代用した。南京や北平郊外の明の陵を見るとよく之が分る。其後だん／＼變化して紙に書いて墓に持つて行くやうになつた。

○學生社會 支那では政治運動と學生とが離るべからざる密接な關係を有し、政黨各派が競ふて學生を自己の黨派に引入れ、對内對外運動の實行には學生を利用するので、學生團の勢力は

勃然として強くなり、それだけ學生の風氣は狂激粗暴の傾向を帯びてゐる。殊に勞働組合の組織、農民運動の宣傳等も學生が主動者となり、各地各所に學生會なるものがあつて、事ある毎に悲歌慷慨して實際運動に油を注ぐのである。近年女子教育が盛んになり多數の女學校が開設されたので所謂女學生なる群が増加し、婦人問題を中心としてこれらは勃然と活氣を帯び、學生運動が起る毎に跳つ返りの女學生が参加し、男學生を瞠若たらしめるやうな大膽の行動を取つてゐる。共產黨に参加してゐる女學生などは、腰に軍刀を帯び手にピストルを携へ、慘虐なる殺傷沙汰を演ずるといふ有様で、その勇敢さと狂氣染みた行動とは想像の外である。斷髮厚化粧のモダンガール型の女學生は上海、廣東あたりに多く、風紀上からも鼻つまみの行動に出づるものが少くない。

○人凌ひ 常習的の婦人誘拐者、即ち人凌ひ又は人買ひを業とする者の多いのも、支那の社會に於ける特異の現象である。これら不逞の輩にも數種あつて、上海に於ける人凌ひは富豪の主人又は主要な家族の外出を窺つて不意に拉致し、祕密の場所に監禁して大金を出さないと放還せず、其他、人買ひと婦人誘拐者は地方の饑饉等に際して、美貌の兒女を三元乃至十元位で買入れ、北平、天津、上海等で恰も品物を取引するやうに賣却するのである。昭和五年の陝西省

の饑饉では上海を根城とする人買ひや婦人誘拐者が數千人も押寄せ、女兒五歳のもの三元、十歳前後のもの五元、十七歳前後のもの十元といふ安い値段で買取り、それを前記大市場に運んで、花柳界や富豪社會へ



支那人の挨拶は握手を合はせ、手を交はすは、その意を度へ、如何に敬ぶるに依りて、支那人の挨拶は、握手を合はせ、手を交はすは、その意を度へ、如何に敬ぶるに依りて、支那人の挨拶は、握手を合はせ、手を交はすは、その意を度へ、如何に敬ぶるに依りて、

で、花柳界や富豪社會へ賣込んだといふことである。人凌ひは農村で行はれ、婦人の外出を窺つて凌ふものと甘言を以て誘ふものとあり、いづれも都會地の花柳界に連れて行つて賣却するのである國民政府もその害の甚しいのを憂ひ、懲治綁匪條

土匪海賊は支那の名物

例を設け嚴罰に處することにしてゐる。

○土匪と海賊 支那には土匪と海賊の被害が多い。殊に土匪横行の被害は四川省から貴州、雲

徹底的の掠奪

南、河南、山東の諸省、萬里長城外の張家口あたりが最も甚しく、近年の如く戰亂が打續いては、戰時は軍隊に入り平時には土匪に變るといふ有様で、獍猛慄悍、神出鬼没、行人を脅かし豪家を襲ひ、時には河川を航行中の船を襲ふて掠奪をする。土地によつては一部落を擧げて土匪の巢窟となり、平素は鋤鍬を持つて農耕の業を勤め、全く良民の風を装ひ乍ら時に大擧して掠奪を敢てし、その後では何喰はぬ顔をして、田圃に出で、働いてゐるといふやうな種類のもある。物を奪ふために人を殺すのは平氣なもので、鐵砲を突然に撃ちかけて一物残さず奪つて行くのである。中には山寨に籠つてゐて人を拉致し、身の代金と交換にそれを釋放するといふやうなものもある。海賊は中部支那の沿海から臺灣海峽、福建、廣東の沿岸地方にかけて跳梁し、民船を襲撃するは勿論、乗組員の少い外國貨物船なども襲ひ、徹底的な掠奪を行ふ。若し海難に遭ふて航行不能に陥つた汽船などを發見すると、數千百人といふ大集團を成した海賊が押寄せて船員を虐殺し、積荷は勿論船内の設備品まで残らず奪つて行くのである。廣東から海馬島あたり、又は汕頭方面の島嶼には、常に海賊船が游弋して獲物を覗つて居るのみならず、同地方の群島中には全然海賊の根據地となつてゐる島さへあるが、支那の官憲の取締りは殆ど無効な程彼等は自由自在に横行し、且つ壓倒的な暴威を揮つてゐる。南支那を運航する小汽船へ

船客として乗込んで来た支那人が、解纜後沖合で忽ち海賊と化し船員を襲撃して掠奪を行ふやうな場合もある。又海上だけでなく、湖水の上でも發動機船を操つて剽掠を行ふやうな匪賊がある。

第三節 滿洲

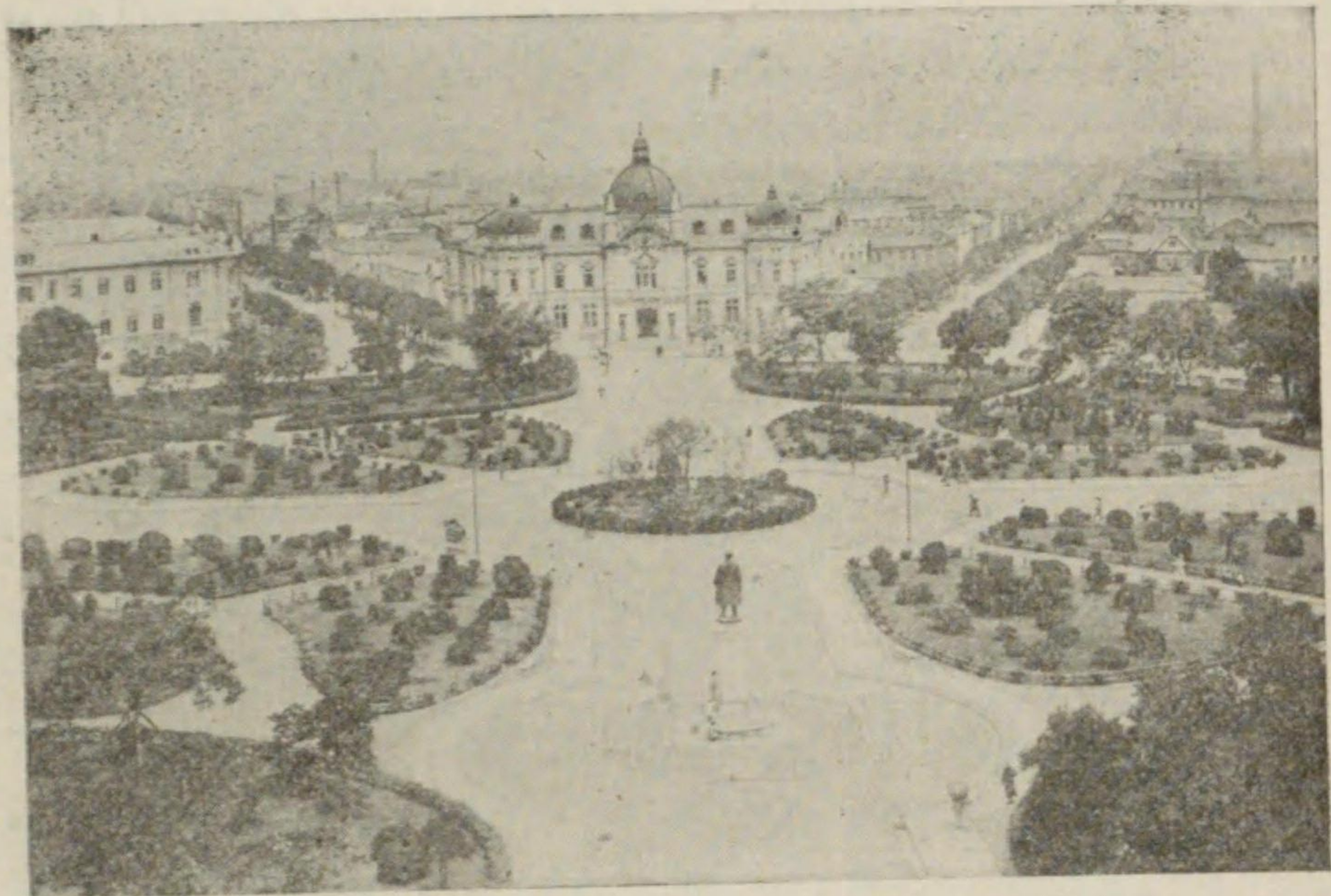
歴史

滿洲に最も古く住んでゐた種族で歴史に現はれたものは、烏夷、息惟、崑夷、山戎の諸族である。周の時代に肅慎は今の間島から沿海州にかけて蕃殖し、濊貉は伯都納から吉林にかけて生息し、東胡は西遼河の附近に住んでゐた。當時遼東は箕子の朝鮮國であつた。漢の時代には沿海州の地に故扶餘が住んでゐて、其南大小長白山の間に挹婁が、又咸鏡道に沃沮が、吉林から東蒙へかけて扶餘が居り、其南に貉、西遼河の南に鮮卑、更に其の南の内蒙古に烏桓がゐた。鮮卑と烏桓は東胡の分れたものである。扶餘族の傳説には日本の神話と甚だ似通つた點があるので、或は我日本民族と扶餘族とを同族であると論ずるものがある。

秦漢の時代には匈奴の勢が強く、滿洲東蒙の地に住める諸族は皆その威風に屈服したが、匈

上古の滿洲

契丹の興起



大連廣場の式則に、大連の市都代近は街市連大、關玄大の洲滿、場廣の大、れき設建てを大壯が樓高廈大し射放が路街大十らか場廣大のこ、るゐてふ競のる見えに左のそ、ルテホトマヤは物建の面正中圖。るゐてふ競で將大昌義島大督都東關の代一第は像銅の央中、店支行銀鮮朝が。るあ

稱し都を臨潢に奠めた。斯くて遼は南方支那を撃ち、東方高麗を征服し、聖宗の時には、東は

日本海に臨み西は天山に至り、朝貢するもの六十餘國を算する亞細亞の最強國となつた。當時支那には宋が興つて南北を統一し、遼と相争ひつゝあつた隙に乘じ、靺鞨の一部たる女眞の族が勢を得、阿骨打なるものが出で、大いに遼を破り、國號を金と稱した。阿骨打は即ち金の太祖である。金は宋と同盟して遼を滅し、遼の皇族耶律大石は中央亞細亞に逃れて其地に西遼國を建てた。

金の太宗は更に宋を侵略して國都汴京を陥れ、後都を燕京に移したが、世宗以後國勢衰へ遂に蒙古の滅す所となつた。それより滿洲は蒙古の版圖に歸したが、明が興つて元が滅ぶるに及び、南滿洲は明の領有に歸した。

明の末に長白山下興京附近に努爾哈赤なるものが出で、次第に滿洲族を統一し、國號を滿洲と稱し自ら皇帝となつた。これが滿洲の太祖である。明は朝鮮と協力して之を攻撃したが大敗し、太祖は明の瀋陽(奉天)を占領して此處に都を奠め、太宗の時、西の方漠南蒙古部を征服して國號を清と改め、次で世祖の時、明が内亂のため自滅せるに乘じ、支那の北部を占領して都を北京に遷し、辮髮の令を下して滿洲の風俗に従はしめた。斯くして明の諸王の江南に據れるものを擊滅して遂に悉く支那本部を領有するに至つた。聖祖(康熙帝)は又西に向つて親征し、

滿洲族の
統一

準噶爾部を降し、外蒙古及び新疆を收め、更に西藏を征服し、青海地方をも占領して、今日の大支那の統一を見るに至つた。時に我が紀元二千三百八十年頃即ち西洋紀元十八世紀の初頭である。

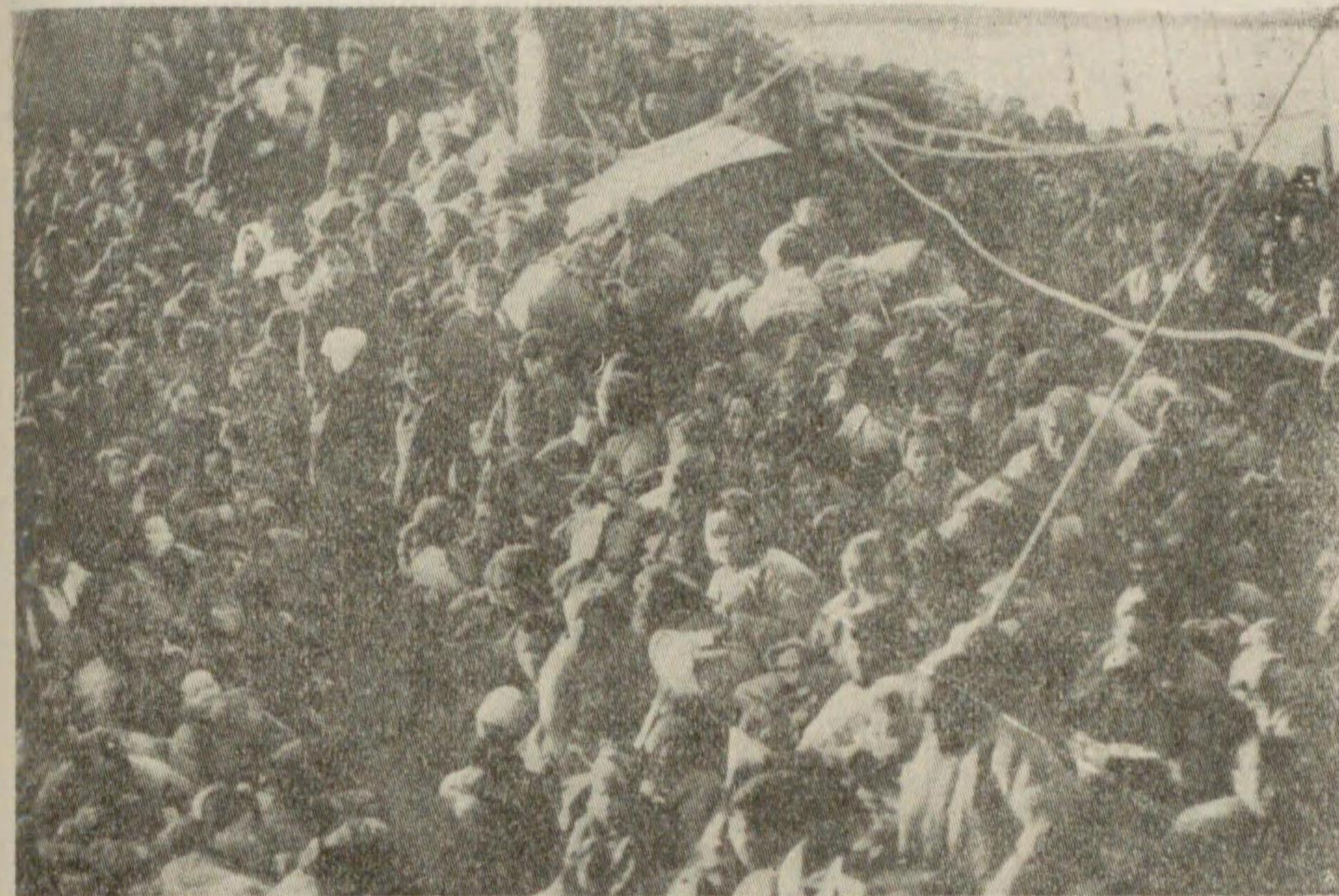
日清戦争

明治二十七年清が朝鮮を併呑せんとするに端を發して日清戦争となり、日本軍は遼東に出兵して大いに清軍を破り、清國は勢窮して遂に和を請ふに至つた。之より前、露國は頻りに南下の野心を抱き精力を極東經略に傾注して、歐亞の兩大陸を連結する西伯利亞鐵道の敷設を計畫し、その工事の漸く進捗するや、虎視眈々、只管機會の至るを窺ひつゝあつたが、日清戦争の結果遼東半島の我が版圖に歸せんとするを見て、佛獨二國と相結び、遼東還付の干渉を試み、恩を支那に賣つて置き、我が兵の滿洲を撤退するや、明治三十年支那政府を強要して旅順大連を租借し、翌々年には英露協商を結んで揚子江流域を英國の勢力範圍と認むると同時に關外を擧げて自國の勢力範圍に收め、當時支那の代表的政治家たる李鴻章と通謀して日本に對する露支攻守同盟を締結する等、政治的軍事的の準備を整へて滿洲占領の野心を遂ぐべく爪牙を磨いたのであつた。

やがて明治三十三年(一九〇〇年)支那に義和團事件起るや、之を利用して事實上に滿洲を占

露西亞の
南進

領し、明治三十四年には廣軌式の大鐵道を滿洲に敷き、大連を商港として大規模の經濟的立脚



大連港の移民群 山東あたりに出た支那移民の民は、滿洲に目をかけ船の甲板から落ちるおぼろげな光景を望む。大連港に汽船の甲板で移民群が陸上を刻する時を待つてゐる。

滿洲露國の領土化す

地となし、旅順には堅固なる要塞を築きて傍若無人の振舞をなすに至つた。支那は唯だその暴威に壓せられて只だ露國の意を迎へるのみであつたから、あはや我が對岸の朝鮮半島もその呑噬に委せらるべき危殆の情勢となつた。蓋し露國は義和團事件の起るに際し、黒龍江南岸の支那人が義和團に策應する危険ありとして、ブラゴエシチエンスク市在留の支那人に急遽退去を迫り江を渡るを得ざりし支那人五千人を虐殺する暴舉を敢てしたので、滿洲に於ける支那人がこの報を聞いて激昂し、全滿に動搖を生ぜるを奇貨とし、北滿の匪亂を鎮定するて

日本國民の悲憤

ふ名目の下に東西北の三方國境より滿洲に出兵し、愛琿、哈爾濱、三姓、琿春等北滿洲の要地を占領し、更に南滿洲に兵を進め、海城、營口、金州等まで露兵の蹂躪する所となつたのである。しかも露國の滿洲經略は益々歩武を進め、第二、第三、第四の露清密約締結せられ、滿洲は遂に全く露國の軍政民政の統治下に歸した。列國も之に對し抗議をなしたけれど、露國は一時的に駐兵の移動を行ふだけで撤兵を行はず、永久的占領の意圖を益々明にしたのである。義和團事件の解決は夙くに終へて、やがて明治三十六年となるや、露國は新に東亞太守府を旅順に置き、海軍大將アレキシーフを太守に任じ、後黒龍江守備隊司令官、黒龍江總督をもその隸下に屬せしめ、旅順は全く名實ともに極東露領の首府となつた。

思へ、遼東半島は日清媾和條約によつて一旦日本の版圖に歸したものである。之を東洋の平和に害ありとして干渉を試み、遂に日本をして支那に還付せしめたのは露國である。然るに今や傲然として露國自ら之を強奪して憚らないのである。當時日本に於て「同胞が屍をさらし血を流し、たまく取りたる遼東も、今はロシアに横取りされし無念さよ、臥薪嘗膽し、怨み重なるロシアをば、討つがよいぞ」といふ俗謠が流行した。これ實に悲憤の涙に曇る日本國民の聲だつたのである。國民が切齒憤激しつゝある裡に撤兵の交渉が頻りに試みられ、且つ支那に

日露戰役

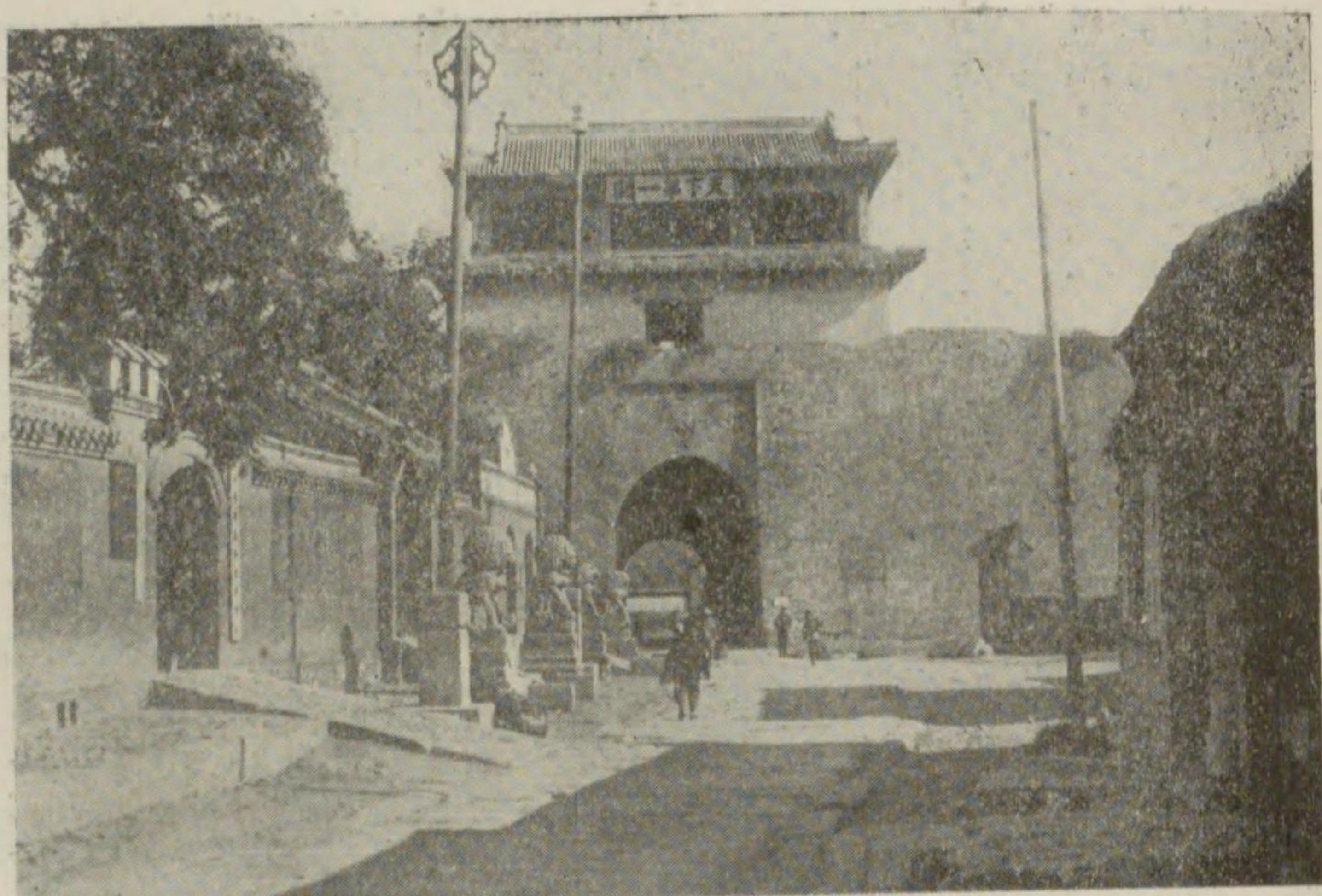
向つて警告を發したけれど、支那は何等施す所なく、露國も亦頑として應せざるを以て、遂に明治天皇赫怒あらせられ宣戰の詔勅茲に煥發し、忠勇義烈の將士は滿洲に向つて進撃したのである。一戰又一戰、海に陸に光榮ある勝利は皇軍の上にあつて、露軍は先づ朝鮮に於て敗れ、次で滿洲各地より撃退され、連戰一年有半にして我軍は決定的の勝利を占め、遂にポーツマスの日露媾和條約となつた。當時日本なかりせば滿洲の運命はおろか、應ては支那本土の前途も果して如何。いはずして知るべきのみである。

ポーツマス條約

日本はポーツマス條約によつて(一)韓國に於ける日本の宗主權を承認させ(二)遼東半島の租借權を日本に譲り、又長春以南の鐵道及び樺太島の南半部を我が國に割讓し、(三)露國が滿洲より撤兵することを約さしめたのである。日本は此の條約によつて定められた所に基き、支那と協定を結びて、爾來滿洲に文明を扶植し、その富源を開發すると共に東亞の平和を確保する使命を負ふて立つことゝなつた。

明治四十四年支那に革命が起つて翌年清朝が滅び、中華民國が起り滿洲は民國の三省となつた。支那本部が絶えず政争と兵亂とに悩まされてゐる間にも、滿洲のみは日本の勢力圏たる關係上、逐年文化の進展と經濟的發達とを遂げ、且つ戰亂の波及より免れることを得た。而して

張作霖の擡頭



關海山 關海山は萬里長城の終る所に在り、支那本部から滿洲の要地たる此の地は戰略的に極めて重要な地位を占めて居る。關海山の東に遼東省の第一關あり、支那の要地たる此の地は戰略的に極めて重要な地位を占めて居る。

この特殊地帯に根據を占めて勢力を伸ばしたのが張作霖である。張は奉天省海城縣の産で最初遼西の馬賊の群に身を投じ漸次頭角を擡げて遂に段祺瑞に認められ、第二十七師長となり、次で奉天督軍に擧げられ、更に累進して東三省巡閱使となり、牢乎として抜くべからざる地盤を滿洲に植え付け、遂に關外王の名を恣にするに至つた。支那の内亂が打續いて統一が付かぬため、滿洲は自然に地方の一勢力として獨立したやうな形態を成し殊に日本と利害關係の深い地方だけに、此の地に據つて自家の安全を守るには都合がよかつたのでその隱然たる勢力は北京政界を脅かすに足りた。茲に於て張は支那の中央に驥足を伸ばさんとする

野望を起し、屢々兵を關外に出して一時權威を北京政界に振ふに至つた。張の中央進出につい

鐵礦としては鞍山、廟兒溝、弓張嶺、干西溝、八盤嶺、歪頭山、大栗子溝、七道溝、鞍子河、



撫順炭坑の露天掘 撫順炭坑の炭石の質は十八フイ
ト乃至四百二十フイの層をなしてをる。それをして露天掘で採る。満洲の經濟的價値の大なる。掘り直して貨車で搬送する光景は、満洲の經濟的價値の大なる。掘り直して貨車で搬送する光景は、満洲の經濟的價値の大なる。

鑛洞子等、有名なるもの十指を屈するに餘るが、現在稼行中のものは廟兒溝（日支合辦本溪湖煤鐵公司）鞍山（日支合辦鞍山振興鐵鑛公司）の二ヶ所に過ぎない。金鑛は杜家屯、隨家屯、袁家屯（以上普蘭店）、老鐵山（旅順）、梅家屯（卅里堡）、分水（滿鐵沿線）、五鳳樓（安東寬甸間）其他數ヶ所に發見されてゐるが、これ又分水の金鑛が稼行計畫中だけで、その他は調査又は試掘のまゝになつてゐる。銅、鉛、硫化鐵、滿俺等の鑛物も諸所に發見されてゐる。非金屬工業原料用鑛物たるマグネサイト、ドロマイト、石灰石、方解石、硅石、石綿、螢石、滑石、長石、天然曹達、オイル

工業

シエール等が各地に産出する。鹽も滿洲三大物産の一として知られ、主として關東州内から産出し年産出額は四億斤に達する。關東州の黃海及渤海沿岸の沿海地方では、水産業が行はれ相當の成績を擧げてはゐるが、漁法の不備と運送上の缺點とで、未だ特筆する程の漁獲高には達しない。

各種製造工業は天然資源の豊富なため甚だ有利の地位に立つてゐるが、滿洲内部に於ける販路獲得難等により、經營上盛大を致せるものは、未だ比較的稀である。但し油脂工業は大連、安東、開原、長春、公主嶺、營口等に大規模工場があつて盛況を示し、製粉工業も南滿に於て邦人により經營さるゝもの少からず、其他醸造業、纖維工業、各種化學工業、食料品工業、製鐵、電氣、瓦斯、毛織物、皮革業、製材業、セメント業等が漸次發達すべき趨勢を示してゐる。

滿洲の鐵道

滿洲の鐵道は、南滿洲、東支、北寧（舊名京奉）の三大幹線を中心として網の目の如く敷設され、無盡藏なる滿蒙の富源を開發すべき重要な役割を勤めてゐる。經營の系統からいへば、日本（南滿洲）露西亞（東支）支那（北寧）の三系統に分れ、更に英米等の諸國がその間に割込みを

鐵道利權の爭奪

策し、鐵道利權を中心として列國の競争が激甚を極めやうとしてゐる。現在敷設されてゐる既成鐵道を列舉すると次ぎの通りである。

| 鐵道名 | 經營系統 | 竣工時期 | 區間 | 哩數 |
|------------|--------|---------|--------|---------|
| 南滿洲鐵道 | 日本經營 | 明治四四、一一 | 長春—大連 | 六九五、〇 |
| 東支鐵道 | 露支合辦 | 明治三四、一一 | 滿洲里—博多 | 一、〇七九、〇 |
| 北寧鐵道(舊名京奉) | 借款官辦 | 明治四〇、〇 | 山海關—奉天 | 二六〇、七 |
| 京綏鐵道 | 支那官辦 | 大正一〇、四 | 張家口—綏遠 | 三八二、〇 |
| 四洮鐵道 | 借款官辦 | 大正一二、一一 | 四平街—洮南 | 二六六、〇 |
| 打通鐵道 | 支那官辦 | 昭和二、六 | 鄭家屯—通遼 | 一五六、三 |
| 吉長鐵道 | 借款官辦 | 大正元 | 長春—吉林 | 七九、〇 |
| 洮昂鐵道 | 同 | 大正一五、七 | 洮南—昂々溪 | 一四三、〇 |
| 金福鐵道 | 日支合辦 | 昭和二、九 | 金州—城子疃 | 六三、四 |
| 瀋海鐵道 | 支那官辦 | 昭和二、九 | 奉天—朝陽鎮 | 一五二、〇 |
| 呼海鐵道 | 支那官商合辦 | 昭和二、一二 | 松浦鎮—海倫 | 一三四、六 |
| 吉海鐵道 | 支那官辦 | 昭和四、三 | 吉林—朝陽鎮 | 一一四、四 |
| 吉敦鐵道 | 借款官辦 | 昭和三、一〇 | 吉林—敦化 | 一三〇、〇 |

支那の背信

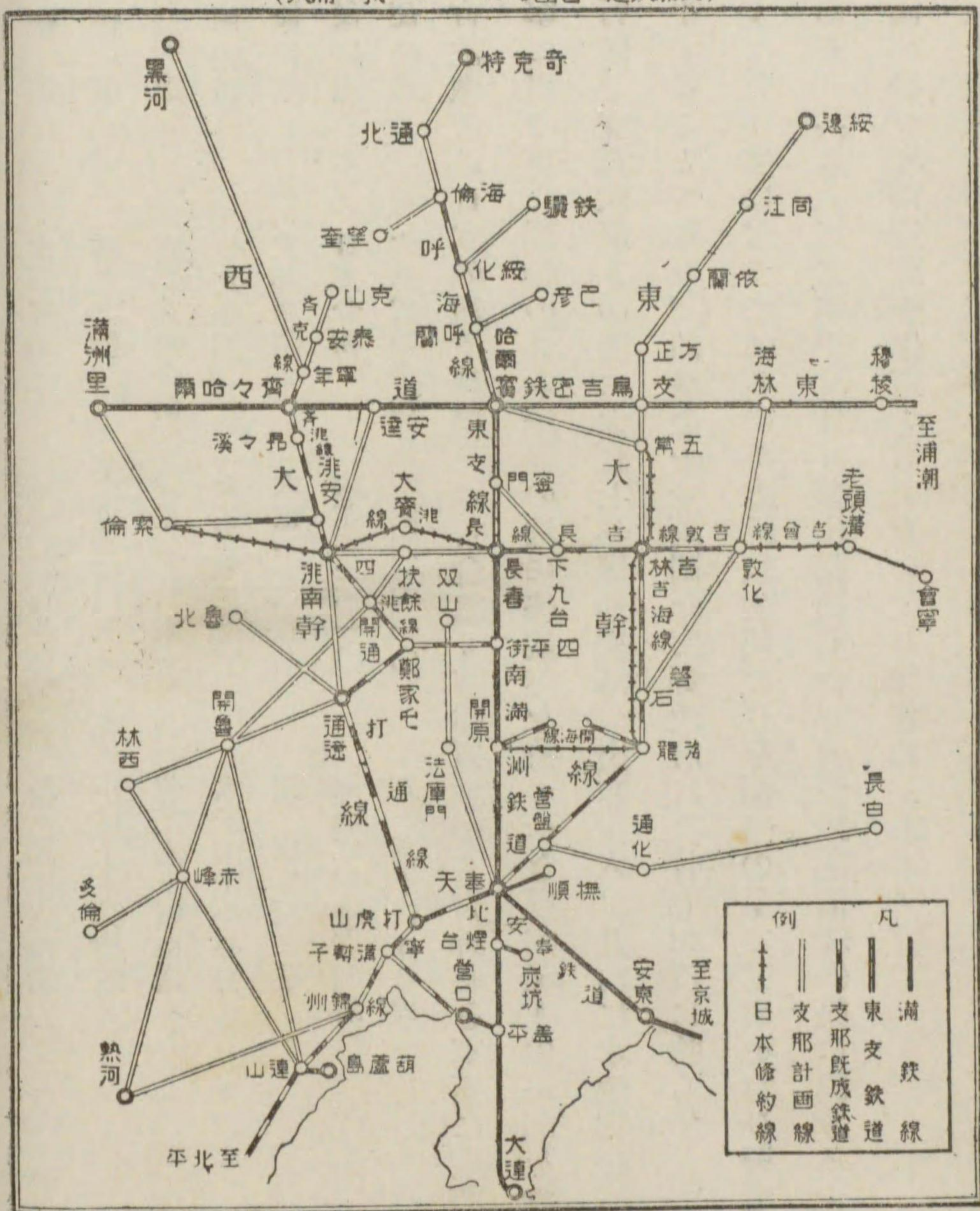
右の内、吉敦鐵道は日本の鐵道利權たる吉會線、吉林省城から吉林省を東西に横斷して朝鮮咸鏡北道會寧に出で更に朝鮮の日本海岸の港に終端港を持つべき豫定線の一部を成すもので日本特殊銀行團と支那政府との間に大正七年豫備交渉が出来、六ヶ月内に本契約を締結して直に工事に着手することとなり、前渡金一千萬圓を支那政府に交付したるに拘らず、支那側は契約を履行せず、その儘になつてゐるので吉林敦化間だけを滿鐵の手で工事を行ひ開通せしめてゐる鐵道である。其他大正二年十月日支間に締結した「滿蒙鐵道借款修築に關する大綱協定」によつて我國が得た所謂滿蒙五鐵道として左の如き豫定線がある。

一、開原—海龍間の開海鐵道

| | | | | |
|--------|--------|------------|----------|-------|
| 齊克鐵道 | 支那官辦 | 昭和三年着手一部竣工 | 昂々溪—克山鎮 | 一三八、〇 |
| 穆稜鐵道 | 露支合辦 | 大正一四、三 | 小城子—梨樹溝 | 三七、〇 |
| 鶴立崗鐵道 | 支那官商合辦 | 大正一五、末 | 蓮花泡—興山鎮 | 三四、八 |
| 溪城輕便鐵道 | 日支合辦 | 大正三、一一 | 太子河—牛心台 | 一四、〇 |
| 開豐輕便鐵道 | 支那商辦 | 大正一五、五 | 開原—西豐 | 三八、〇 |
| 天圖輕便鐵道 | 日支合辦 | 大正一三、一〇 | 圖們江岸—老頭溝 | 六二、八 |
| 齊昂輕便鐵道 | 支那官商合辦 | 明治四三、一〇 | 昂々溪—齊々哈爾 | 一九、四 |

滿蒙鐵道系統圖

(支那鐵道に關する圖表、其の概略を以て示す)



- 二、四平街—洮南間の四洮鐵道(この分は完成、前掲の表に記せるもの)
- 三、長春—洮南間の長洮鐵道
- 四、吉林—海龍間の海吉鐵道
- 五、洮南—熱河間の洮熱鐵道

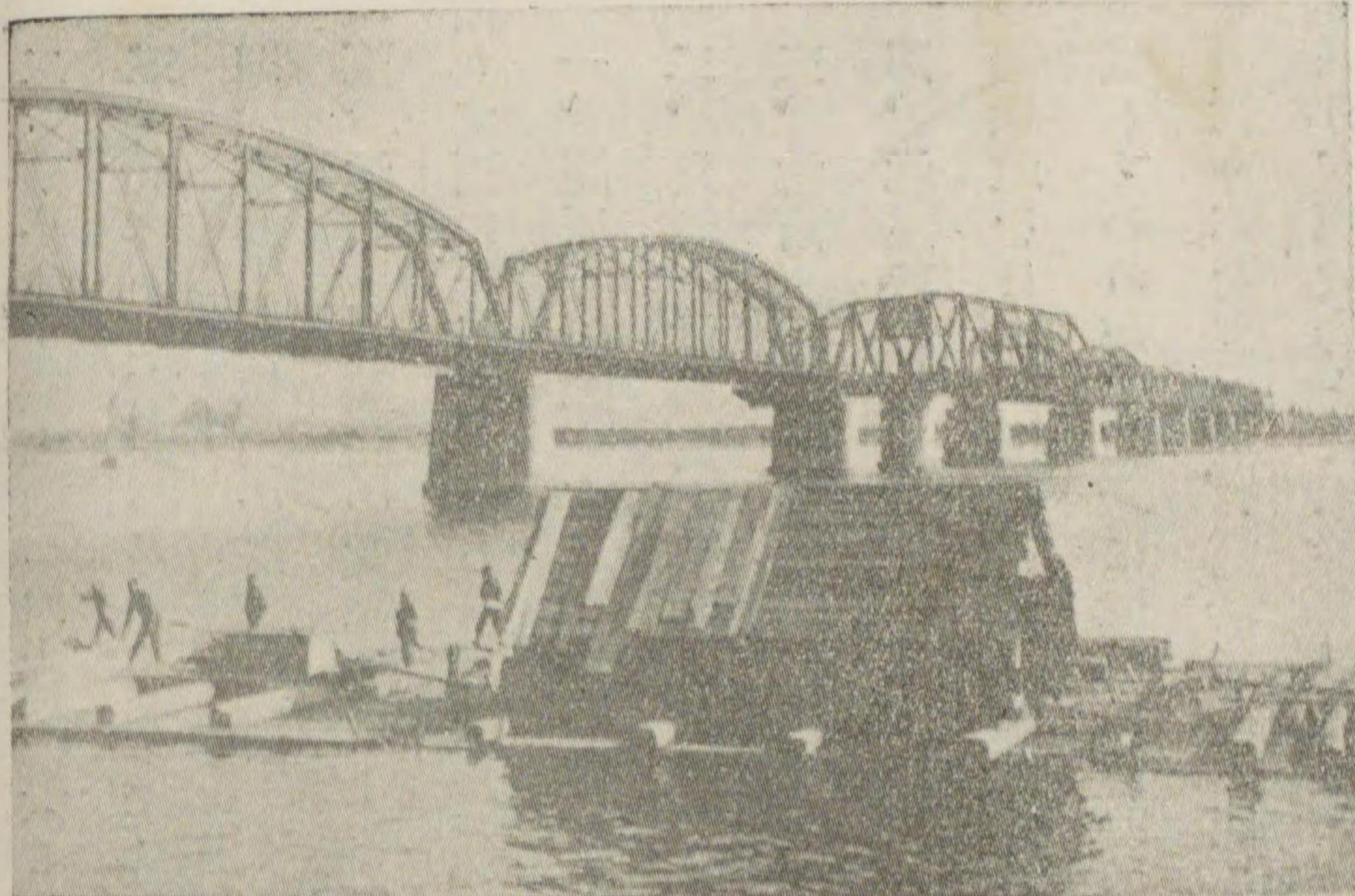
而して更に大正七年九月日支間の交渉により「滿蒙四鐵道建設に關する覺書」が交換されて

- 一、開原—海龍—吉林間の開吉鐵道
- 二、長春—洮南間の長洮鐵道
- 三、洮南—熱河間の洮熱鐵道
- 四、洮熱線の一地點より海港に至る鐵道

の四鐵道を日本の借款により建設することを約したのである。如上二種の協定は内容が大部分重複してゐるが、前者に就ては當時四洮鐵道の工事が開始されてゐたので後者では之を除外しその代り四を加へ更に前者の一と四とを合し一線として表示したものである。右借款は大正七年九月支那政府と日本特殊銀行團との間に豫備契約が成立し、四ヶ月以内に本契約を結び工事を速成するといふ條件の下に、前渡金として二千萬圓交付したが、其後支那側は態度を變じて

工事に着手する風なく、且つ洮熱線及び同線の一點から海港に至る鐵道の借款は大正九年十月

支那の無
法なる鐵
道計畫



朝鮮支那國境を繋ぐ鴨綠江鐵橋 朝鮮節でお馴染の鴨綠江を横斷する鐵橋は朝鮮と滿洲を繋ぐ。悠々たる江の下は筏の島間。方か伐り出されたる木材であらう。

成立した對支四國新借款團の手に移つたのである。然るに支那には國權回復熱と共に鐵道自營熱が擡頭し、既に締結されてゐる「滿洲善後條約に關する日清協定」及び前掲日支借款契約を無視して勝手な鐵道網を計畫し、打虎山通遼間の打通鐵道を始め、吉林朝陽鎮間の吉海鐵道、開原西豐間の開豐輕便鐵道、並に瀋海鐵道の一驛梅河口より西安に至る鐵道等を自ら敷設し、又四洮鐵道の開通驛から扶餘に至る鐵道を敷設せんとするなど全く國際的信義を蹂躪し、日本の既得權を有名無實に終らしめやうとしてゐるのである。我が外務省は滿鐵當局をして之に對する抗議をなさしめ、幾たびか交渉を試みてゐ

大規模な
支那の
計畫鐵道

るのであるが、支那側の眞意は連山灣の葫蘆島に築港を設け、之を自國鐵道に繋ぎて滿蒙の貨物を吸収し、滿鐵の經營を不利に陥らしむると共に、大連の繁榮を葫蘆島に奪はんとする計略に出で、ゐるので、平然として不法行爲を改めず、兎角不得要領の間に推移してゐる。尙ほ滿洲(蒙古を含む)に於て支那側が敷設せんとする計畫鐵道を擧げると大體次ぎのやうなものである。

安東—海龍線四二三杆。撫順—長白線四五七杆。海龍—延吉線三八九杆。吉林—同江線七二六杆。下九臺—張家灣線五八杆。呼海鐵道支線たる興龍鎮—東興鎮間、綏化—鐵驪間、綏化—富景間の三線二一四杆。綏化—望奎線三六杆。呼蘭—巴彥線六二杆。延吉—敦化線一三五杆。以上合計二千五百杆の線路を東大幹線とする計畫。

洮南—索倫線一八〇杆。洮南—滿洲里線四八九杆。洮南—長春線三四三杆。克山—黑河線三七八杆。寧年—訥河線八〇杆。通遼—開魯—魯北線二一二杆。開魯—林西線二二五杆。葫蘆島—多倫線四九八杆。奉天—遼中線六六杆。以上合計二千四百七十一杆の線路を西大幹線とする計畫。

右諸鐵道の建設費は二億二千七百萬を要するから、支那独自の財力を以てしては實現甚だ容易ならざるものがあるけれど、これらの諸線が漸次敷設されて兩大幹線の完成を見るに至れ

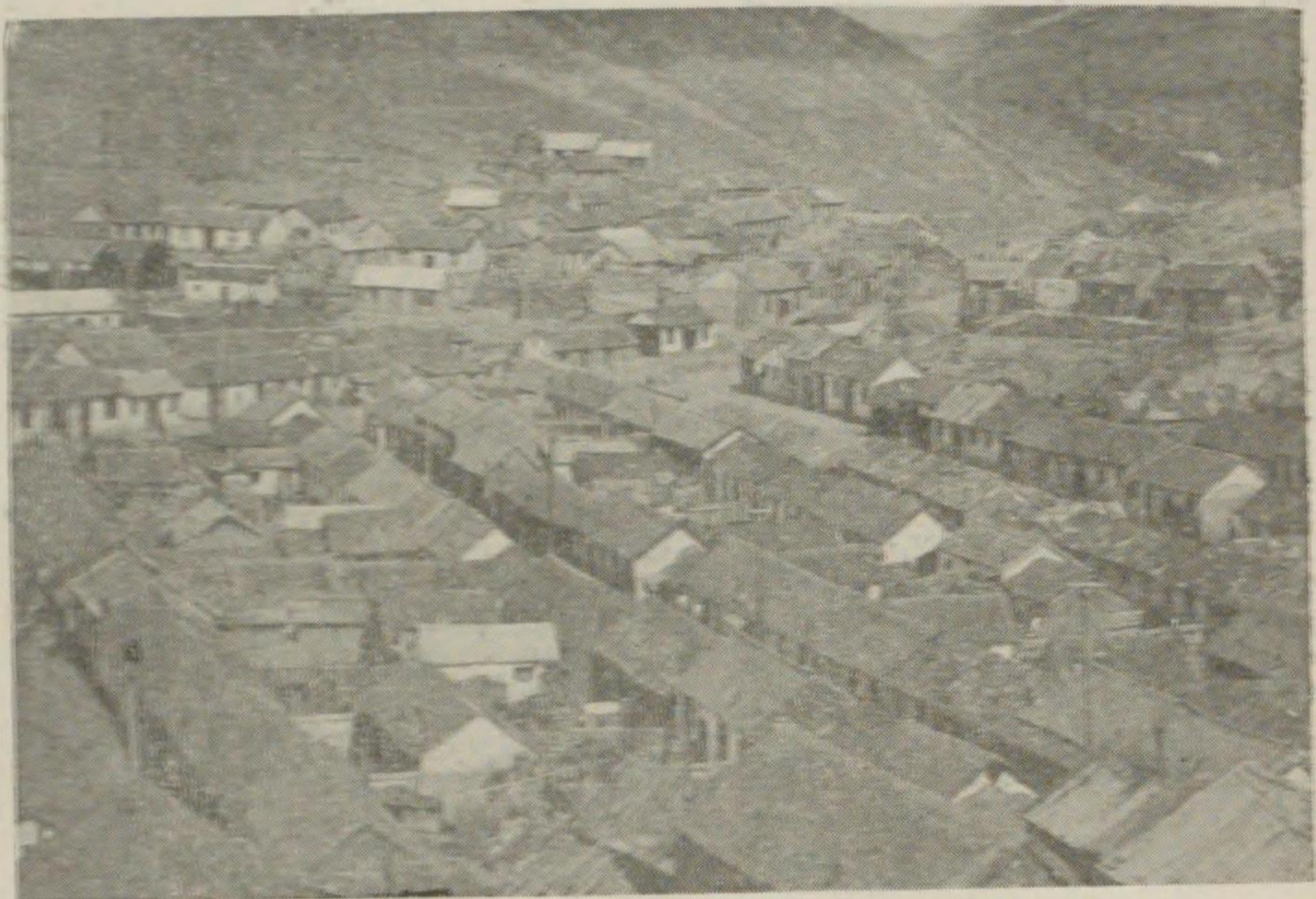
滿蒙の漢人化

移民群の
役割

支那本部から滿洲及び內蒙古方面への移民は、最初鐵道の開通に伴ふ自然的現象であつたが、近年は國民政府が一個の經濟政策として獎勵に努めてゐるので、益々その數を増加し、北滿及び內蒙古へは潮の如き移民群が押寄せ、荒野は忽ち耕地と化し、人家の點々として存在せる土地がやがて部落となり、更に變じて都市を形作るといふやうに目覺ましい發展振を示してゐる。従つて以前は朝鮮民族、蒙古人、滿洲人の滿蒙であつたものが、今や漢人種の滿蒙と化し、滿洲人は全く漢人種の中に没入してその存在を認め難くなり、蒙古人は漢人種に驅逐されて西へ西へと退却しつゝある。移民の最も多いのは哈爾濱地方であるが、吉林地方に入込む數も多く、それらの一部は松花江に沿ふて上流地方に入り其處に永住の地を求め、一部は吉敦鐵道の沿線方面に入つて農耕生活を始めてゐる。又四平街附近から通遼及び洮南地方にも續々漢人部落が出現し、先住民族たる蒙古人は牧畜を主としてゐる故、漢人の開墾した土地には牧草が乏しくなる結果、留まり得ないで次第に未墾地を求めて奥地へ奥地へと退却せざるを得ない立場にある。支那の官憲が蒙古王族を壓迫したり、巧みに籠絡したりして、土地を取上げる風も次第に

蒙古人の
後退

水田として
適當な
可耕地



滿洲移民部落の流へては、支那本部から移るに由り、各地方の地に新しい部落が出現し、その結果として、大々的に可耕地があらわされる。この圖は王家の移民部落のありさまを示してゐる。

甚しく蒙古王の權力も漸く衰へつゝあるから今後數年ならずして蒙漢接觸地帯は完全に漢人化されることになるであらう。

滿蒙地方の水田可耕地

我が農林省技師の調査に據れば滿蒙地方に於ける水田可耕地面積は左の如くである。

| | |
|-------|----------|
| 遼河平原 | 一八〇、〇〇〇町 |
| 松河江平原 | 一三五、〇〇〇 |
| 太平河平原 | 三六、〇〇〇 |
| 渾河平原 | 二九、〇〇〇 |
| 鴨綠江平原 | 五六、〇〇〇 |
| 合計 | 四三六、〇〇〇 |

又開田工事の難易を調査せし結果は。

最も容易なるもの

一二〇、八五五_町

稍困難なるもの

二一〇、七〇〇

困難なるもの

二五五、二九〇

即ち水田可能の耕地は約四十四萬町歩を存し、既墾の六萬四千町歩と合せて約五十萬町歩の水田から七百萬石の米を得る可能性を有して居る。

滿蒙に於ける日本の特殊權益

日露戦争は露西亞が極東侵略の目的を以て南下し來るに對し、我國が極東の安全と平和を確保するために國運を賭して戦つた一大義戦であつた。その結果我が皇軍は連戦連捷して露軍を滿洲の野から驅逐し、ポーツマスの媾和會議に於て、露國が滿蒙で占有してゐた權益を我國に繼承し東洋永遠の平和を確保すべき礎石となしたのである。則ち我國は露國の侵略的行動を阻止し、之に代つて安全保障の地位に立つべく滿蒙に特殊權益を有することゝなつたもので、世界列國も滿蒙と我國との接壤關係、國防の安全、經濟生活の安全等の諸點からして我國が自衛的の特殊權益を主張すべき當然の立場にあることを認めてゐるのである。更に翻つて日露戦争以

滿蒙權益
の由來

露清同盟
密約

前に於ける露支關係を顧ると、其處には日本に取つて極めて寒心すべき露支密約が結ばれてゐたのであつて、この事實の明なる以上、日本は自衛權の當然の發動として滿蒙に確乎たる保障的の權益を享有すべき有力なる理由を存するのである。一八九六年(明治二十九年)露國皇帝ニコラスの戴冠式が露都に舉行さるゝに際し、世界各国から皇族又は重臣大官が參列し、支那からは李鴻章が派遣されたが、その機會に於て露國外相ロバノフと李鴻章との國に露清同盟密約が締結され、露支兩國は一切の陸海軍を以て相互に支持し、日本に當ることを盟約したのである。之によつて支那は露西亞の南下を誘引し、遂に日露を相戦はしめ、この攻守同盟條約を應用して支那は滿洲に於て露國が軍事行動をなすことを認容し、又バルチック艦隊を福建方面の港に入れて戦闘準備を整へしめたのである。我國は之に對する反射的行動としても現在の如き權益を保持するは勿論、媾和當時に於て滿洲の占領地一切を我が領土とし、敢て支那に還付する必要もなかつたのである。(因に李鴻章ロバノフ露清同盟密約は、ワシントン會議の際要求によつて支那全權からその一部を提示し、又露國勞農政府も之を公表し、露國のウイッテもその回想録に當時の經緯を書いて居る)

斯く歴史的に見ても、將又地理的關係から見ても、滿蒙に於ける我が特殊權益は確乎不拔の

五、滿洲駐兵權　これも露支間の條約を引繼いだもので、兵數は一キロメートルに付平均十

五名を置くことを得、全體で約一萬七千の駐兵をなすことが出来る。

六、滿洲に於ける日本軍戦死者墳墓及忠魂碑の保護。

七、營口、安東、奉天に於ける日本居留地の設定。

八、鴨綠江右岸日支合辦採木公司の權利。

九、間島に關する權利　龍井村、局子街、頭道溝、百草溝の開放及領事館若くは分館を置く

ことを得、間島に朝鮮人の在住を承認し之が所有の土地家屋の保護及相互交通の自由。

十、新法鐵道優先權　新民屯—法庫門間の鐵道を敷設せんとする場合には豫め日本政府と商

議することを約したるもの。

十一、安奉線、南滿幹線沿線の鑛山の合辦權。

十二、滿蒙四鐵道優先權。

四平街—鄭家屯—洮南

熱河—洮南

開原—海龍

長春—洮南

海龍—吉林

右五鐵道に關する優先權を日本が有することになつてゐたが、其後四國借款團との交渉によりこの權利には一部變更を生じた、四洮鐵道については大正四年支那政府と日本正金銀行との間に借款が成立した。

十三 吉林鐵道の權利　明治四十年支那政府と滿鐵との間に借款成立

十四 洮齊鐵道の權利　本鐵道は支那に於て建設し滿鐵が工事及建設費を請負ひ竣工後一ケ年以内に建設費を支拂はざる場合は之を借款として契約し經營上に就ては滿鐵より一名の役員が入ることになつてゐる。

十五 吉會鐵道の權利　之が建設に就ては日本政府に商議すべく約したもので其後日本特殊銀行團との間に借款契約成立。

十六 撫順及煙臺炭坑に關する權利　即ち日本は兩炭坑採掘權を有す。

十七 南滿洲に於ける土地商租權、自由居住往來權、商工業其他の經營權、東部內蒙古に於ける農業及附屬事業の合辦權、東部內蒙古都市の開放。

十八、滿洲九鑛山の試掘採掘權、牛心臺、田什付溝、杉松崗、鐵敵、暖地塘、鞍山站、紅審、夾皮溝の諸鑛山を試掘採掘する權利。

滿蒙に於ける日本人の現状

竝に在滿朝鮮人に對する壓迫

昭和五年七月末現在の滿蒙現住日本人は、外務省の統計によると内地人男十一萬一千四百八十四人、女十萬三千七百三十四人、計二十一萬五千二百十八人で、此外に朝鮮人が五十一萬餘人在住してゐるが、内地人の多くは關東州内及び滿鐵附屬地に居住してゐる。日露戦争後既に二十餘年を経、その間支那本部から移住せる支那人が二千萬人にも及ばんとするに比し、日本人の滿蒙移住者は餘りにも少いといはねばならぬ。斯く數が少いのみならず、經濟的發展振りに於ても絶えず支那人に押され氣味で、滿鐵附屬地内に於ける日本商店なども支那人との競争に敗れ、折角の店舗をも支那人に譲り渡して内地に引揚げるといふやうな例が多く、日本商人が不況を啣ち居る間に、支那商人はドシ／＼發展して行く有様である。由來支那人は生活程度が低いから商品に多くの利潤を掛けずとも生活して行けるといふ強味あり、その上支那商人

日本人の
現住者統
計

日本人發
展の不振

支那商人
の仕入

は相當に儲けても日本人のやうに直に生活程度を高めるといふやうなことをせず、孜孜として業務に従ひ、物事に無駄をしないで廢物利用を巧みにし、一厘一毛も輕んぜずに利殖を圖るのであるから、何時の間にか實力を養つて日本商人を壓倒する結果となるのである。從來滿洲の日本人卸商店から商品を仕入れてゐた支那人が、現在では大阪に出張所を置き、大阪の各商店を歩き廻つて値段の安い品物を仕入れ、時には多少の傷物でも構はず格安に買入れて滿洲に送り、日本商人よりも廉價で販賣するといふやうな風潮が盛んになつて來たから、日本商人は一層甚しき打撃を受け、勢ひ日本商人は少數なる日本人をのみ相手として商賣をすることとなり活動範圍も甚だ狭くなつてゐる。又近年滿洲に入込む支那人中には相當富裕な階級の者も多く本國の争亂から脱して此處に安住の地を求め、土地を買入れ或は家を建て、不景氣風に煽られてゐる日本人の土地家屋をも踏倒して買ふといふ有様であるから、日本人の經濟的勢力は益々支那人のために侵蝕され勝である。在滿の朝鮮人も勞働者としては到底支那人の敵でなく、勞働能率が劣るのみならず、少しく金を得れば徒食して働かぬといふ風があるので、生活力の強い支那人のため自然に壓倒されてゐる。農業方面でも既に優越的の地歩を占めてゐる支那人が朝鮮人を壓迫する程度は甚しく、支那人地主は朝鮮人の小作人に對し不利な條件を強ひて搾取

朝鮮人の
農業

鮮農壓迫

を行ひ、北滿方面を目掛けて殺到する朝鮮人は散々に支那人から膏血を絞られてゐる。支那人と朝鮮人とは農法が異り、支那人は乾燥農法で粗笨な耕作により広い面積に作付するに反し、朝鮮人は狭い土地を集約的に耕作するのであつて、特に水田は支那人が水に入るのを厭ふため朝鮮人の獨占的な耕作となつてゐる。而して朝鮮人が獨立して水田耕作をなすに對しては、支那人が非常に嫉視し、事毎に朝鮮人の獨立企業を妨害し、滿洲の官吏と呼應して不法なる壓迫を加へ、或は不當に朝鮮人の立退を強要したり、或は水田の灌溉設備を妨害したりして滿洲から朝鮮人を驅逐しようとしてゐる。その著しい現はれば彼の萬寶山事件であつて、遂に朝鮮に於てあのやうな報復事件が起つたのである。斯の如き事件の頻發するのは無論支那人側に非があるのであるから、我國としては合法的な手段により朝鮮人の滿洲に於ける地位を安固ならしむるに努める必要がある。日本人の農業は關東州内で水田耕作が良好な成績を示し、果樹園も成功を収めてゐるが、果樹園の有利なことが知れると、早くも支那人が續々とそれに着手する有様である。滿鐵で研究した結果によれば、日本人の農業移民も十分見込があるといふ結論に達してゐる。從來失敗したのは日本人が土地の拂下げを受け乍ら、自ら耕さないで支那人にやらせ、其鞘を取るといふ遣方だつたからで、自ら耕作に當つた者は成功してゐる。しかし日本

内地人の農業

内地人の農業移民の前途

人が農業に従事するには、支那人と同じ方式では見込なく、米國式の大農制度に依るべきだとされてゐる。何れにしても右の如き現状に對し、日本人たるものは緊揮一番、滿蒙に向つての力強き經濟的發展を策する要がある。

○邦人の分布状態と職業別 在滿邦人の分布状態を見ると、關東州に十萬六千四百五人、奉天總領事館管内四萬三千六百八十五人、牛莊領事館管内九千七百五十二人、遼陽領事館管内一萬一千九百五十九人、長春領事館管内一萬六千六百八十七人、鐵嶺領事館管内六千二百九十三人、安東領事館管内一萬一千七百八十一人、哈爾濱領事館管内四千二百三十一人、齊々哈爾領事館管内三百三十二人、滿洲里領事館管内二百三十七人、鄭家屯領事館管内二百四十五人、赤峰領事館管内二百三十七人、張家口領事館管内二十四人、間島總領事館管内二千〇五十四人、吉林總領事館管内千〇三十五人といふ數字を示してゐる。それらがどんな職業に従事してゐるか、その總體に就き職業別を見ると鐵道従業者の五六九一人を筆頭に、銀行會社商店員の三三八六人、物品販賣業の二九一三人、官公吏及傭員の二四六〇人、採鑛冶金業の二四〇九人、金屬工業一、一九四人、土木建築業一〇四三人等が之に次ぐ。その他主要の者を列擧すると次のやうなものである。

在留邦人の職業

農耕園藝畜産四〇六、森林業及林産物業一三五、窯業一二四、機械機具製造業五七九、化學工業一九八、織維工業一六〇、紙工業九五、木竹類に關する製造業二七三、飲食料品嗜好品製造四四〇、被服裝身具製造三七九、大工左官ペンキ職四一七、瓦斯電氣其他天然力利用に關する職業四〇〇、工場労働者一六一、製版印刷及製本業一〇九、其他の工業一五六、貿易商一三八、金融保險業五〇一、媒介周旋業五五、旅館料理貸席及藝娼妓業遊戯興行場等の經營者一〇一〇、物品賃貸及預り業八一、理髮及び浴場業三七六、其他の商業者三七六、郵便電信電話従業者一二七二、鐵道労働者六〇三、車馬業及自動車運轉手一四六、船舶従業者六二、運輸取扱業四五〇、陸海軍人六三四、宗教關係者二五二、教育關係者九七五、醫師及醫務に關する業一三六三、法律事務に關する業一九、新聞雜誌記者、通信員、著述者一九五、美術家音楽家寫眞師一四〇、其他の自由業五八二。

この他に學生及練習生が一四四四人あり、藝娼妓酌婦等の所謂娘子軍は一九三五人の多數を算し、家事被傭者が六五一人であるが、以上は勿論本業者であつて、その家族はこの數字に含まれてゐない。又關東州に在住する者もこの中には含まれてゐない。

間島と國際關係

位置面積
間島は滿洲の東南部に位し、日、支、露三國の間に介在する面積千八百二十方里の地域である、東は露領沿海州ウスリー地方に接し、西及北は長白山の東北幹線山脈によつて吉林省地方と自然的の境界をなし、南は圖們江を隔て、朝鮮咸鏡北道に接してゐる。この地方は多年所屬不明の地域であつたが、明治四十二年九月、日清間に協定された「間島に關する協約」によつて清國の領土たることが確認されるに至つたものである。歴史上からいへば嘗て朝鮮に屬する領域であつたのみならず、地理的關係からして寧ろ朝鮮と密接な交渉を有するので、元來朝鮮人の居住者が多く、事實上間島地方の開拓は朝鮮人に依つて行はれ、現在間島地方住民約五十萬の内、その七割六分即ち三十八萬人は朝鮮人で、この地方の主要産業たる農業には多く朝鮮人が従事してゐる。然るに前述の如く日支露三國の間に介在し、三國と重大なる關係を有する地域であるために利害の衝突を免れず、露國は間島地方を浦潮港の有力なる培養地域として、將又極東進出の新たな立脚地として虎視眈々たる態度を執り、間島地方の治安の紊亂に乗じて鮮人共産匪賊を指嗾乃至利用するの途に出で、屢々共産匪の跳梁を呈し、支那は又滿洲一帯に

露西亞の
策謀

人口

日清協定

滿洲の戦蹟

壯烈なる
要塞戦の
跡

○旅順 日露戦争に、陸からする乃木軍と海からする聯合艦隊とで攻圍した壯烈なる要塞戦の跡で、白玉山上には表忠塔、納骨堂があり、東雞冠山北堡壘、二龍山堡壘、白礮隊奮戦の松樹山堡壘、乃木將軍の詠詩で名高い二〇三高地、乃木將軍とステツセル會見の水師營等がある。又攻圍戦の當時を偲ぶべき兵服戎具等二千五百餘點を蒐集陳列せる旅順要塞戦記念陳列場がある。又旅順港口は廣瀨武夫中佐等の海軍決死隊が、港口閉塞のため船を乗入れて自ら爆沈を敢行した壯烈なる戦蹟である。

金州

○金州 日清戦役には山路中將乃木少將(後の乃木大將)が勇戦攻略した地で、日露戦争には奥大將の第二軍が露軍を撃破した戦場である。激戦の地南山もこの附近である。乃木勝典少尉が戦死したのも此地で、有名な乃木大將の詩『征馬不前人不語、金州城外立斜陽』の賦はこゝでなされたのだ。

○普蘭店 こゝも日清日露兩役の戦蹟。

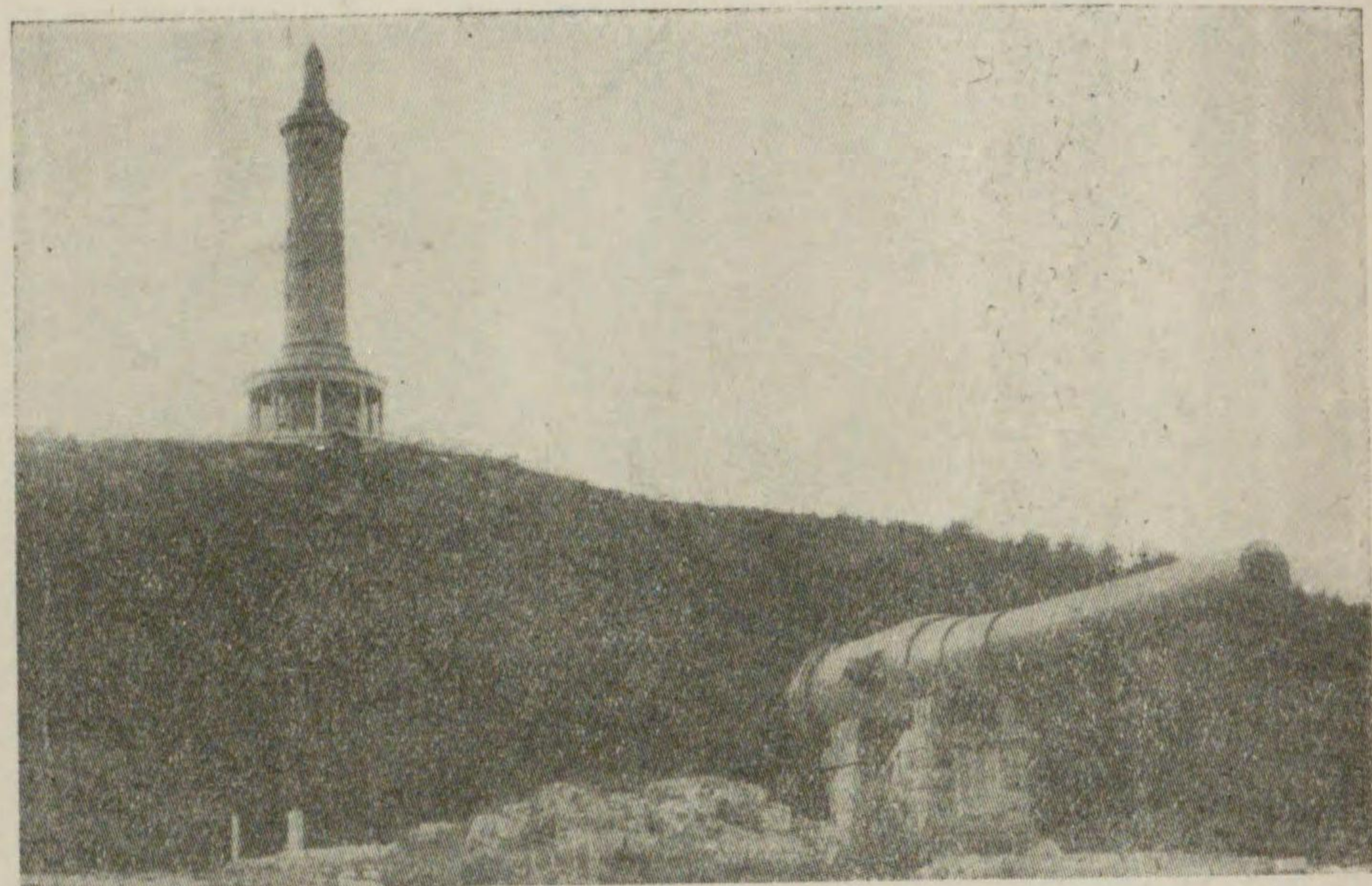
○營口 明治三十八年一月露將ミスチエンコが騎兵三千を提げて我が乃木軍の北進を妨げんと

海城大石橋方面の鐵道を破壊し、更に兵站部を置いた營口を奪取して日本軍の軍需品補給の道を絶たうと奇襲して來た地である。當時日本軍は、僅に一箇大隊の兵力で之を邀撃し遂に敵を退却せしめた。今防備記念碑が建つてゐて、附近には當時を偲ぶ塹壕が残つてゐる。

○海城 日清戦役に桂中將(桂太郎公)の率ゐる第三師團の健兒が勇戦した地。

○遼陽 露軍が半永久的の築城をして日本軍を撃退せんとした地で、我が野津大將の第四軍を中央に黒木大將の第一軍が右翼、奥大將の第二軍が左翼となりて進撃し、激戦猛闘、

遼陽

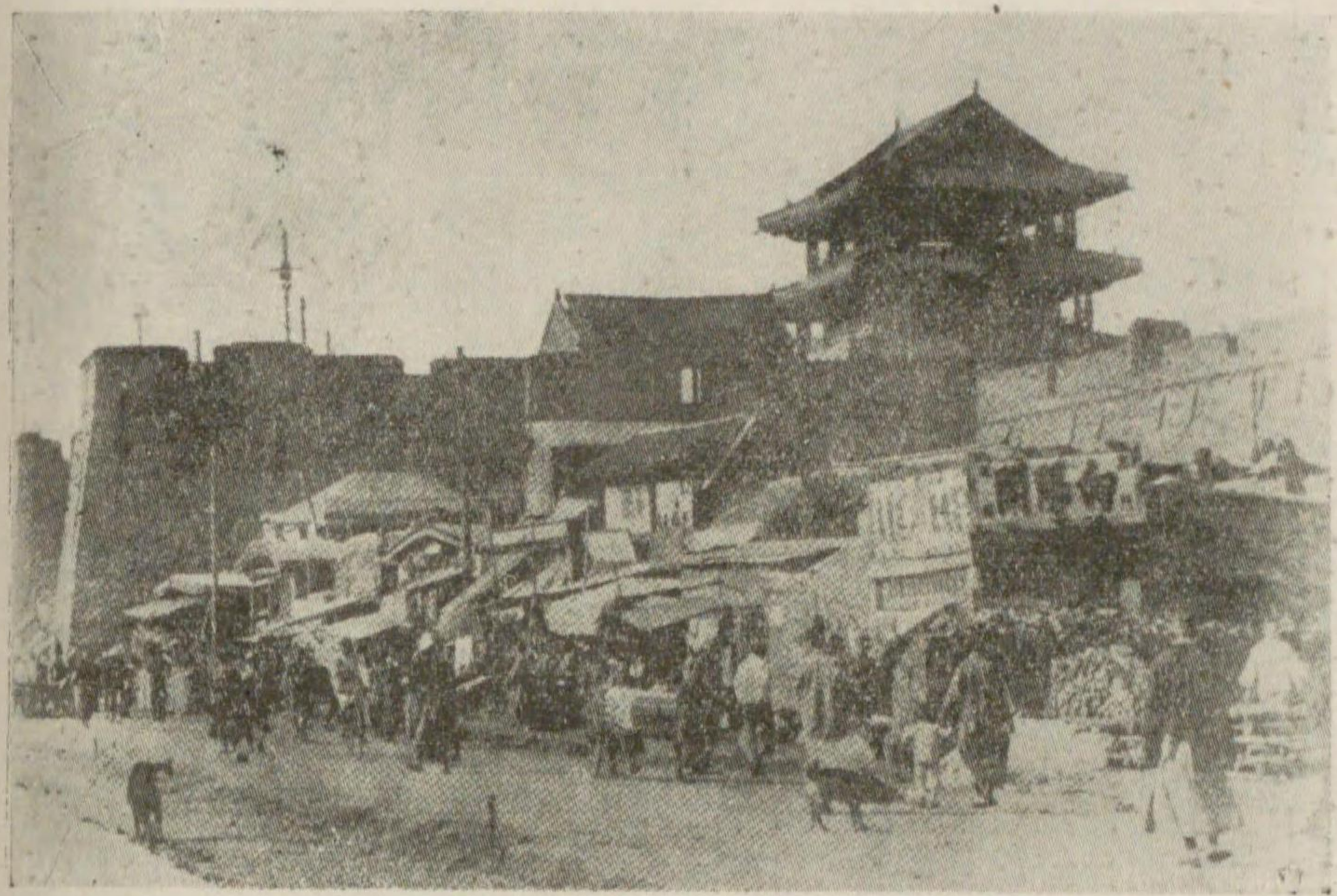


旅順白玉石の表忠塔 乃木大將の軍攻圍下の多犠牲をに於ける戦死者の英魂を慰むるに遠く、表忠塔のこゝに永く記す。此の地は、露軍に降服せしめしめたる比に、比無の要塞戦に於ける戦死者の英魂を慰むるに遠く、表忠塔のこゝに永く記す。

六日間に亘る總攻撃で多大の犠牲を拂つた後、三十七年九月三日の夜第四軍が遂に奪取した所

黑溝臺

である。こゝから西方八里餘の黑溝臺は三十八年一月廿五日露將グリツペンブルグの率ゆる百



奉天大西門

二十箇大隊の大軍が押寄せて、我が滿洲軍左翼の立見支隊を包圍し殆ど全滅の危殆に瀕せしめたが、立見支隊が苦戦の折柄、援軍が到着して遂に敵を撃退した地である。遼陽には日露役の蓋平沙河間に於ける戦死者一萬三千三百餘名の靈灰を納めた忠魂碑がある。

○沙河 三十七年十月露將クロバトキンが遼陽の敗辱を雪ぐべく二十萬の大兵を動かして南下せんとするを、それと知つた我が第一、第二、第四の三箇軍團が攻勢に出で、激戦を續けること五日の後遂に占領した所である。

○奉天 露軍のクロバトキンが十二個軍團約六十萬の大軍を擁して南下の準備を整へてゐるのに對

沙河

奉天の大捷

し、我が大山元帥の總司令官たる滿洲軍は第一、第二、第三、第四の四軍團及最右翼軍たる川村大將の鴨綠江軍の全力を擧げ、三十八年二月二十三日より攻撃を開始し、同二十六日より總攻撃に移り延長約五十里に亘る戦線を展開して用兵作戰の妙を發揮しつゝ、敵を壓迫し、約二週間の壯烈なる連續戦により、三月十日遂に奉天を占領して決定的の大捷を博し、同十五日入城式を行つたのである。この大戦を記念すべき記念碑は滿鐵附屬地廣場に建てられてあり別に千代田通に戦役忠魂碑及戦死者二萬二千八百四十八名の英靈を祀る壯麗なる六稜ピラミッド型の忠靈塔が建立されてゐる。

足一たび滿洲の地を踏む者、これらの戦蹟を訪ねて俯仰感慨に耽らざるを得ないのである。

滿蒙回の政治上の地位

支那研究家ウォルター・ヤングは滿洲に對する支那人の移住狀況に就て「如何なる人口の移動も現に萬里の長城内から滿洲に向つて注ぎ出されてゐる移民の實際的數字には比較することが出来ぬ」といつて驚歎の聲を放つてゐるが、げに支那本部の住民が滿洲の新天地を目指して押寄せる大勢は年と共に盛んである。何が故に斯く移民が増加したかといへば、一面支那本部

驚くべき支那人の滿洲移住

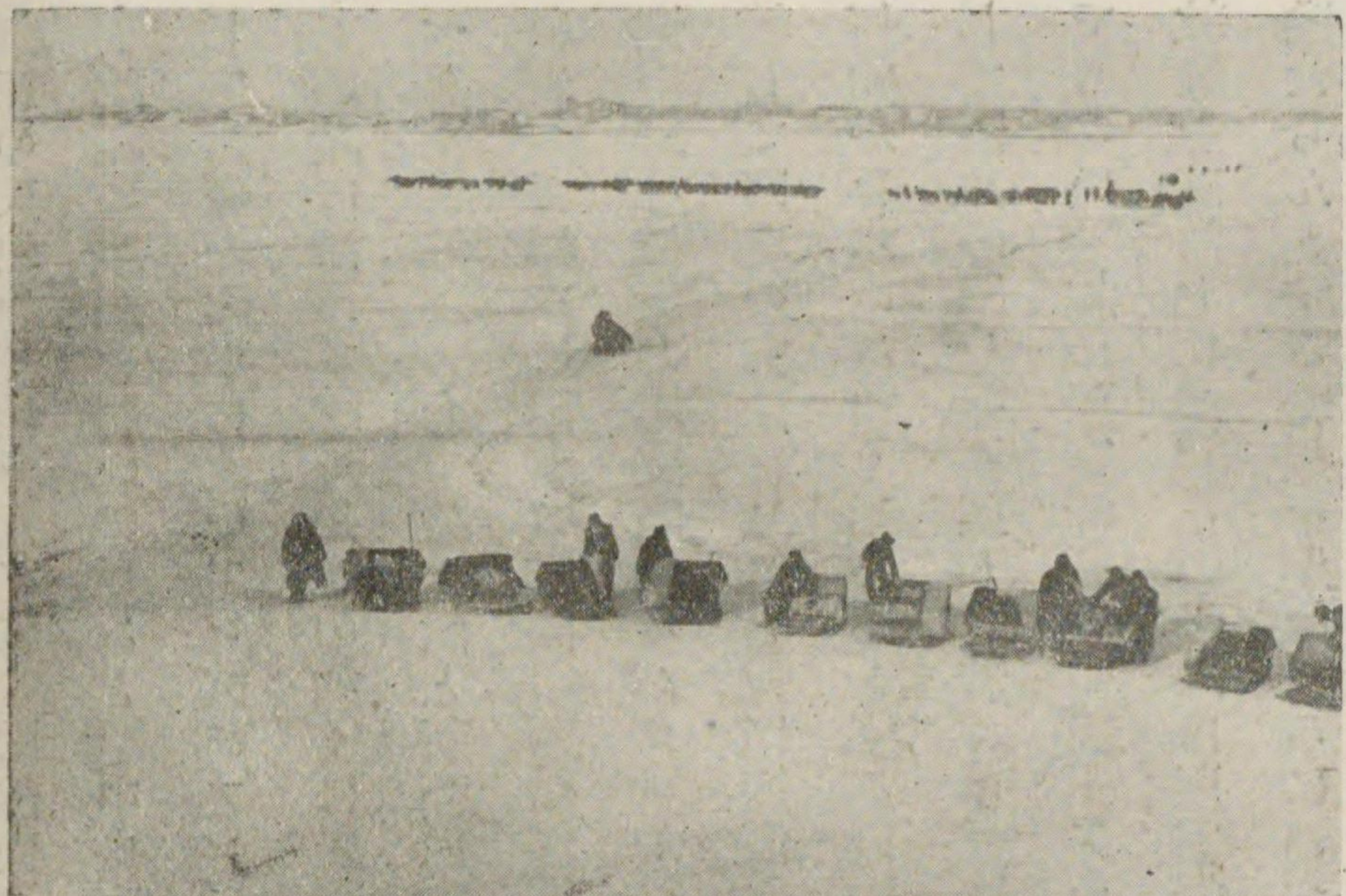
要するに上述せる如く滿洲の富源は從來日本が寄與せる力によつて著しく開發さるゝと共に日本と滿蒙地方との經濟的關係は極めて密接に結合さるゝに至つた。今、滿蒙回の政治上の地位を觀察するに當り、先づこれだけの事實を認識して、其處から出發することが當然の順序であらう。

茲にいふ滿蒙回とは滿洲、内外蒙古、新疆の各地方を一括せる區域をいふのであつて、其處に擴がるどころの大平野は、文化の光に浴すること未だ薄く、滿洲及蒙古の一部を除いては、交通機關も發達せず産業も幼稚を極め、人煙も亦甚だ稀薄であるが、地理的に觀察すれば將來歐亞交通の要衝たるべき場所に位置し、亞細亞の將來を按ずる者に取つては、政治上重要な意義を有する地方である。殊に外蒙古は既に獨立して勞農露國の勢力下に支配され、西藏も亦事實上英國の侵略する所となつて、新疆一帶の地は北から伸びんとする露國の勢力と、南から擴がらんとする英國の勢力との間に挟まれてゐる形である。ヤブロンイ山脈やアルタイ山脈が自然の障壁を成してゐるに拘はらず、露國の勢力はそれを乗越えて亞細亞の中腹たる蒙古を侵蝕し、ヒマラヤ山脈の險も英國の北上を遮る力なく、亞細亞の屋根といはるゝ西藏が夙に危殆に瀕してゐる。英國が今一步崑崙山脈を越えて來れば新疆である。寸進尺歩、徐々として亞

細亞の天地を侵蝕せんとする歐洲強國の動向に對して、誰か眼を瞑ぶることが出來やう。

試みに地圖を開いて見ると、中央亞細亞の方面からは、外裏海、中央亞細亞の二鐵道が連絡して新疆の國境に近いアンヂジャンにまで延びて居り、殊に新に開通したトルクシブ鐵道は露支國境に沿ふて蜒々長蛇の如くに走つてゐるのみならず、ソヴェート露國はこの鐵道を延長すべき豫定地點として公々然と新疆内部の重要地區を選定してゐるのである。又西伯利亞の曠野を走つて極東に出づる露國の西伯利亞鐵道は、チタから岐れて滿洲里で東支鐵道と連絡し、滿洲の野を横斷し露支國境ボグラニーチナヤに達するを承けて、其處から又浦潮に連絡してゐる。轉じて印度の方面を見ると、印度領内に張り廻らした鐵道網の先端は西藏及び四川の方面へと何物かを求める如く延びんとする氣勢を示してゐるのを發見する。これらの諸鐵道が支那に對して門戸の開放を要望し、若くは侵略の野心を象徴しつゝあるものたるは、また改めて説くまでもない。曩に亞富汗斯坦の前王アマヌラー・ハンは遙々と、羅馬、巴里、伯林、莫斯科、倫敦等を歴訪したが、その目的は亞富汗斯坦が、支那及び印度を、歐洲及び阿弗利加に繋ぐ連鎖點たらんとする希望を達成するにあつたと報道せられた通り、支那の裏門を解放せしめて、歐洲の文化と物資とを陸路鐵道を通じて直接に輸入せしめんとする計畫は、漸次實現の機運に向

つて進みつゝある。若しそれらの鐵道によつて支那大陸と歐洲とが繋がれることゝなれば、歐



冬北の滿洲 見渡す限り雪に鎮たれ北の滿洲は冬の荒涼と 雄大な景光を呈す。氷詰りためた河人は馬や車が樂とて上を渡り行くのときに出る交路のなるあ。

洲諸國の政治的經濟的の勢力は滔々として支那に侵入し、今日主として太平洋沿岸の方面からのみ眺められてゐる支那大陸の形勢には一大變化を呈するに至るべきや明かである。従つてその通路となり又はその通路に近接することゝなるべき滿蒙回の地位は、著しき影響を受けることゝなる。

極めて近視的に觀察しても、現在の滿蒙は第二の「バルカン」と評せられるまでに諸國の勢力が錯綜して、利害の相反する諸勢力が互ひに反撥すべき形勢の下に置かれてゐる。露西亞は革命後、帝政時代に締結された諸條約を全部放棄する旨を宣言し、北滿に於ける東支鐵道の權利

露國の行動

赤化運動の根據地

も放棄することを明に表示したが、其後(大正十三年)張作霖が吳佩孚と中央に於て相争へる隙に乗じて強制的に奉露協定を結び、東支鐵道の經營權を奪取し、又外蒙古に對しては反過激派討伐の名目の下に赤軍を入れて、自國の勢力下に都合よき政權を樹立せしめ、之を籠蓋して現在では外蒙古をソヴェート聯邦の一聯邦たる状態に至らしめてゐる。露國が東支鐵道の經營權を握るや、之を支那赤化の根源たらしめ露骨なる赤化政策を行ふので、支那側は憤つて強壓的に奪還を企て、あはや露支間の開戦を見るべき形勢にまで立到りしも、支那は遂に退讓して露國は再び東支線の經營に参加することゝなつた。東支鐵道は露國が浦潮に出づる最短交通路である。露國が極東に於て經濟的の勢力を張る上からいつて之を重視するは無理からぬことであるが、露國の期する所は尋常一様の經濟競争ではなくて、東支鐵道の經營權を握る事により多數の露人を北滿に入込ませ、こゝを根據地として支那の赤化を圖らんとするのがその眞意である。何が故に支那の赤化に力を注ぐかといへば、支那が赤化して共產主義の國と化すれば、其處に必ず起る現象は、諸外國資本主義國家の勢力が支那から排除されることである。外國資本主義國家の諸勢力を排除し盡して共產支那と握手し、その富源を思ふ存分に利用せんとするのが露國の外交方針の本體である。それについては外蒙古の現情を述べることが事實を證據だてるに

露國と蒙古

好都合であるが、詳細の事は蒙古の項に於て述べることにし、唯だ現在外蒙古と農勞露國との間に結ばれてゐる經濟關係を見るに、露國は外蒙政府をして外國人商業及び個人商業に極度の制限を加へしめ、外蒙古人は露國の指導せる購買組合を利用するにあらざれば生活必需品をも得ることが出来ぬやうな組織とし、然かもこの購買組合を重要な貿易機關として活動せしめ西伯利亞消費組合支部を母胎として外蒙購買組合を通じ、露國の物資を外蒙人に供給し、且つ蒙古の物資を購買組合に蒐集して露國に輸送せしめ、其間外國の生産機關並びに商業機關が介入する餘地なからしめてゐる。而してかうした組織の下に進んで唐努烏梁海方面を赤露化し、更に進んで呼倫貝爾、內蒙古新彊方面を合して蒙古族による勞農聯邦を出現せしむべき計畫を進めつゝあるのである。

各國とも滿蒙を重視

英米の對支態度竝に支那を中心とした對日態度に就ては「支那の政治上の地位」の項下に於て概説したから、茲に重ねて説く必要はない。しかし滿蒙に於ては日本が特殊の權益を有してゐるだけに、滿蒙を中心とした國際關係は一層深き注意を以て眺める必要がある。殊に前述せる如く、滿洲の經濟的發展が目覺ましく、滿蒙回の廣大なる面積に亘つて存する富源が莫大である爲に、各國が着目する度合は近年益々深くなりまさりつゝある。思ふに歐米各國とも、現

白系露人を驅逐し赤系露人を來る

時の如く産業設備が發達し、それを活用して益々自國の繁榮を期せんとするには、勢ひ原料品の獲得及び海外市場の擴張を圖らねばならぬのであるが、既に開拓せる市場に向つては此上多くを期待すべからず、原料品の獲得に就ては尙更新方面に富源を求めねばならぬ必要に迫られてゐるのである。さうした希求が極東方面に向つて動くのは當然の數で、最近米國の一大學教授が「世界の不景氣を救ふがために支那の富源を開發せよ」と高唱したのは、這間の消息を最も端的に語るものである。支那の富源を開發する爲には多大の資本を必要とする。而して資本の投下は即ち其處に經濟的基礎を据える所以である。滿蒙の經濟的價値の認識されることが明かになれば明かになるだけ、外國が此地方に資本を投下して經濟的利益を占めむとする計畫は愈々盛んになつて來るであらう。現に露西亞は北滿政策の遂行を容易ならしむるため、白系露人を滿洲から驅逐して、これに代ふるに多數の赤系軍人を、散髮屋、洗濯屋、鐵道員などに仕立て、東支線各驛に配置せしめ、いざといはゞ何時にても命令一下總動員を行ひ得る準備を整へ、一面、奉天に露國商品の販賣機關を設けて、石油、木材、諸雜貨等を廉價に投賣し、滿洲に於ける經濟的勢力を扶植するに餘念なく、支那側の排日運動の激化するのを待ち構へて居り英國の如きも利權の獲得に汲々として鑛山採掘權等を手中に收めてゐる。現在の如く支那の國

權回復熱が熾烈で、外國人の特權排除に力を注いでゐる有様では、その進出容易にあらずとするも、所謂夷を以て夷を制し、或は遠交近攻の策によつて自己の立場を擁護せんとする支那の傳統的外交政策からすれば、或る一國の有する權益を排除する手段として、第三國の勢力を導き込む如き事態を發生するに至るかも保し難い。斯くして經濟的に利害の相容れない關係が發生すれば、やがて政治的の衝突となり、遂に砲火を以て相對するやうな局面にまで展開することは、過去の歴史がその例を示してゐる。滿蒙の將來に斯かる危險が潜まないと誰が斷言し得やう。滿蒙を第二のバルカンと評するのも實にこの理由に因るのである。

滿蒙に於て我國が有する特殊權益は、歴史上の深き因縁と條約の保障に基くもので、我が國民が多大の犠牲と努力とを拂つた結果設定されたものである。而してこの既得權益については夙に世界の公認を得、確乎として動かすべからざる基礎の上に立つてゐるのである。又この權利に基いて我國がなした所の施設が、今日の如く滿洲をして顯著なる發達を遂げしむる原因となつたことは既に繰返して述べた通りである。日本はこの權益を保持することによつて國家の自衛を全うすると共に、日支共存共榮の目的を遂ぐることを得るのである。然るにこの權益を擁護する道に於て歴代の爲政者の措置宜しきを失ひ、國際的には著しく之を狹義に解釋さるゝ如

確乎たる
基礎を有
する我が
權益

侮目的態
度の増長

き結果に陥らしめたるのみならず、肝腎の支那をしてこの權益の由來する眞意を充分に諒得せしめず、却つて反感敵意を以て我れに對せしめ、權益の擁護その事についても、甚しく我國を見縊らしめる如き状態を呈してゐるのである。最近の最も著しい現はれば、滿蒙に於ける支那の鐵道自營計畫であつて、我國は確乎たる權益を有するに拘らず、支那が傍若無人の振舞をなすに對して、容易に之を控制する能はざる有様である。斯くして我が權益を次第に薄弱なるものたらしむるに終らんか、過去に於て日本國民が拂ひたる多大の犠牲は水泡に歸するのみならず、遂には國家の存立をも脅さるゝに至る憂ひなしとしないのである。思ふに斯の如き趨勢を醸すに至つたのは、我が國民の多數が滿蒙に於ける我が權益の重要性を充分に認識せず、從つて之を擁護すべき國民的態度の緊張を缺きたること一因であつて、一部志士の憂慮にのみ委ねて省みざる風があつたのは甚しき不覺である。滿蒙回の方面に亞細亞の一大憂患が孕まれたゝある際、我國民は、茲に覺醒一番して、公正合法なる手段によりて先づ滿蒙の權益を擁護し、國家百年の長計を謬らざるやう努力せねばならぬ。國民が覺醒して其處に始めて彈力のある妥當なる政策が生れ、これによつて消極退讓に終始し來れる滿蒙政策を改め、失墜せんとする權益を完全に擁護することが出来るのである。

國民の覺
醒を要す

極東政策
の重心

假令極東に禍亂の危機が潜むとしても、日支の間に完全なる諒解と協力とが存すれば、その禍根を刈ることは極めて容易であつて、外力の跳梁跋扈を防ぐことも決して難くない。極東の危機といふのも畢竟、滿蒙に於ける日本の權益が脅さるゝこと、日支兩國の間が疎隔することとの二つから發生する現象である。されば極東政策の重心は一に日支の協調といふことに存し、それには滿蒙に對する確乎不拔にして、且つ何等の領土的野心なき日本の眞精神が支那國民に能く理解さるゝことを必要とする。支那の政客が如何なる惡宣傳と排日政策とを以て日本に對するにもせよ、日本が終始一貫して渝る所なき友邦として、支那のために盡しつゝある親切は滿洲に在る支那人の心に徹し、常に信賴と感謝とを以て待たれてゐる有様なれば、何處までも搖ぎ無き毅然たる態度を持って押通し、輕率不謹慎なる支那の政客をして、如何に妄動を繰返すも結局詮なきことを知らしめ、斯くして共に國利民福を全ふすべき日支親善の大道に轉向せしめる機會を促進すべきのみである。

世界に對
し憚る所
なし

日本は常に公明正大なる態度を持ち、正當合法なる手段を以て既得の權益を擁護するに何等世界に對して憚るべき理由はない。滿蒙に於ける權益の擁護は自ら國家の存立を衛る道であると共に、やがて亦支那を救ふ所以の道である。軍事上からいふも經濟上からいふも滿蒙回は日本に取つて最も重要な關係地帯であり、人口食糧問題を解決すべき鍵も埋めて其處にある。その眞價を認識して夫れに處すべき確乎たる國民的覺悟がなくてはならぬ。

近時滿蒙問題は漸く緊張の狀を帯び來り、世論も頓に喧しくなつたが、世間には尙ほ滿蒙問題の認識を謬り、頗る退嬰自屈の議論を試みるものがある。その主旨とする所は日支兩國の親善を期するにあつて、一見穩健公正を得たものゝやうであるけれども、若しこれらの論者の言ふ如く、矯激なる支那の國權回復論者をして満足せしむる程度の讓歩をなすとせば、恐らくは滿蒙に於ける我が權益を一糸も剩す所なきまでに拋棄しなければならぬ結果となり、苟も我が權益の多少にても存する限り、他日必ず排日の口實を與ふる因となるは明である。退けば退くだけ引け身となつて遂に土俵際に押切らるゝ如き態度は、元より滿蒙に對しては禁物であつて、既得の權益は何處までも擁護し、その權益を把持する所以の精神を明にし、進んで日支兩國の利福を増進することこそ最も肝要である。日本の滿蒙に於ける地位については曩に對支新借款團の成立に際し、日本と列國との間に討議されたことがあつて、當時日本は南滿洲及び東部内蒙古一帯の地方が我が領土たる朝鮮に接壤してゐる自然の結果として、我が國防及び經濟的生存に至大の關係を有し、同地方に於ける事業は國家の緊切なる安危の問題を包含するものであ

我が權益
と列國

るから、日本としてはこの地方に特殊の利害を有する旨を明にし、日本としては何等地理的區劃を設けて經濟上の利益を壟斷し、若くは支那の獨立及び領土保全主義に背反する意思はないが露國の政情の東亞に及ぼす影響は大に憂ふべきものがあり、滿蒙は實にこれらの勢力が極東に浸潤し、帝國及び東亞の安寧を脅かす門戸である、かゝる事情の下に於て日本は特に滿蒙地方に對し他の列國と異り死活に關する底の緊切なる關係を有する故、國家及び國民の生存上缺くべからざる特殊且つ正當なる留保をなす必要があると主張し、關係列國たる英、米、佛諸國は日本の有する自衛權の原則を承認したのである。これは日本の滿蒙に於ける特殊地位が列國から夙に承認されてゐることを證據立てるもので、今日と雖も何等の疑義を挾む餘地はなく、而して又滿蒙に於ける日本の特殊權益が緊切なる國家存立の必要上已むに已まれずして設定されたものであることの理由を物語るのである。従つて我が國民は前に日露の大戦に臨んだ時と同様の覺悟を以て今も尙滿蒙問題に處さなくてはならぬ。

日本にして滿蒙を得んとすれば、その機會は今日まで既に屢々あつたのであつて、精銳なる我が軍を出せば、眞に鎧袖一觸して完全に之を占領することを得たのである。しかもそれを敢てしなかつたのは、常に我國が平和的經濟的の公明なる心事を以て之に對し、日支兩國の共存

公明なる
日本の心
事

日本の自
衛權

共榮と東洋大局の平和を望むが故である。支那の國民が之を解せずして無法なる排日的態度に出で、飽くまでも既得の權益を脅かんとするに於ては、遂に自衛權の發動として日本は實力に訴へなければならず、長く隱忍自重せる日本國民はこの國防的經濟的の生命線を擁護すべく一致して奮起せざるを得ざるに至るであらう。日支兩國の有力者は事態を其處に陥らしめざる前、互に赤誠を披瀝して肝膽相照らし、滿洲をして眞に富榮なる平和の殿堂となし、兩國の利福と安寧とを増進する所以の道を見出すことが經綸の第一義であると信ずる。

風 俗

滿洲人と漢人とは、外觀上甚だ區別し難い。服裝は殆ど同一で、容貌、骨格、風俗、習慣等も亦よく似てゐる。唯婦人だけは兩者の差異が歴然としてゐる。即ち硬直な舉動や、纏足しない足や、一種特別な頭飾及服裝は一見して支那婦人と識別することが出来る。又氣風からいつても、一般に獨立堅固の質に富み、頗る活潑であつて、かの柔弱な支那婦人とは大に趣を異にしてゐる。

○服裝 男子は支那人と餘り變らないが、婦人は大分異つてゐる。それは下着が男の物と同じ

滿洲婦人
の特徴

で、上衣も同様に寛濶なのである。上衣には襯衣外袍の二種がある。襯衣の襟は閉塞してゐて、單に咽喉の所に開口がある許りで、其左方の胸上に衣衿を結び下げてゐる。外袍も同様で、兩方に袖口があつて、胴から衣縁に擴がつてゐる。何方も模様の付いた紗か絹か又は縐子で作つて、縁深く縫ひ取つた繡箔で飾つてゐる。模様には花や蝶を用ひて居るが、なか／＼美事である。

婦人の足は、纏足せずに自然の儘であつて、靴は普通の男子用の物を穿いてゐる。靴の表は絹か縐子を使い、底は扁平である。貴婦人は轎子や車に許り乗つて滅多に歩くことが無い。靴の底は木製で之を白綿布で纏るんである。靴の底が甚だ薄いから、歩くには不便である。滿洲婦人は一體に身長が高く容色が好い。

○飲食 食事は一日二回で、午前七八時頃食べるのを早飯といひ、午後一時乃至三時頃取るのを晩飯といふ。通常早飯には高粱、豚肉、白菜及粉條子フエンチアオツ（綠豆又は玉蜀黍にて製した麵の如き物）を食し、晩飯には高粱、馬鈴薯、紅蘿蔔等を豆油で調理した物を食べる。

飯子チヤオツ、饅頭マントウ、烙餅ロビエン、饅々ポク、白麵ペインの類は、上等の物であるから、毎月一日十五日と三節（新年五月、八月十五日）と其他年數回の祝祭日並に犒勞の爲に特に御馳走として造るに過ぎない。

然し官衙や金持の家や料理屋で用ひる食物は、材料は劣り調理法は拙づいが、南北支那の物と大差は無い。回々教徒は、普通人民と異つて一切豚肉を食はない。冬は牛肉を、夏は羊肉を食べてゐる。一般に茶は食後に飲み、其他の場合は多く湯を飲んでゐる。酒は高粱酒が最も多い。

○住居 家屋の構造は、さして支那と異つてはゐないが、概して矮小で土造が多い。煉瓦造といつても、其れは壁ばかりのことで、官衙や寺廟を除く外は、屋根は石灰か又は泥土で塗つたもの許りである。之は寒暑の度が激しく風塵が多いのにも係はらず、雨の少い滿洲では、自然に適合した設備であると考へられる。然し一方から見れば、貧乏を表はしてゐるとも想へる。

建築の材料は松、杉、榆、楊、柳等で屋根や壁に高粱稈を用ふ。下等の建築では煉瓦の代りに土杯土にて煉瓦の形を造り未だ焼かざる物を使つてゐる。屋根は初め高粱の桿を麻繩で編んだ物で葺き、其上を石灰又は泥土で塗る。泥土は粟麥等の桿を切つた物を混合して塗つた後、之れを鞏固にする爲に鹽を撒く。石灰の方は毎年修繕することは要らないが、泥土の方は雨期の前後には必ず修繕しなければならない。鹽は其度毎に撒き直すのである。

○宗教 宗教は佛教、道教、回教で、其儀禮式典は支那の部に於て詳説したから、茲には略する。